

池田軍功記



『池田軍記』（翻刻付き）について

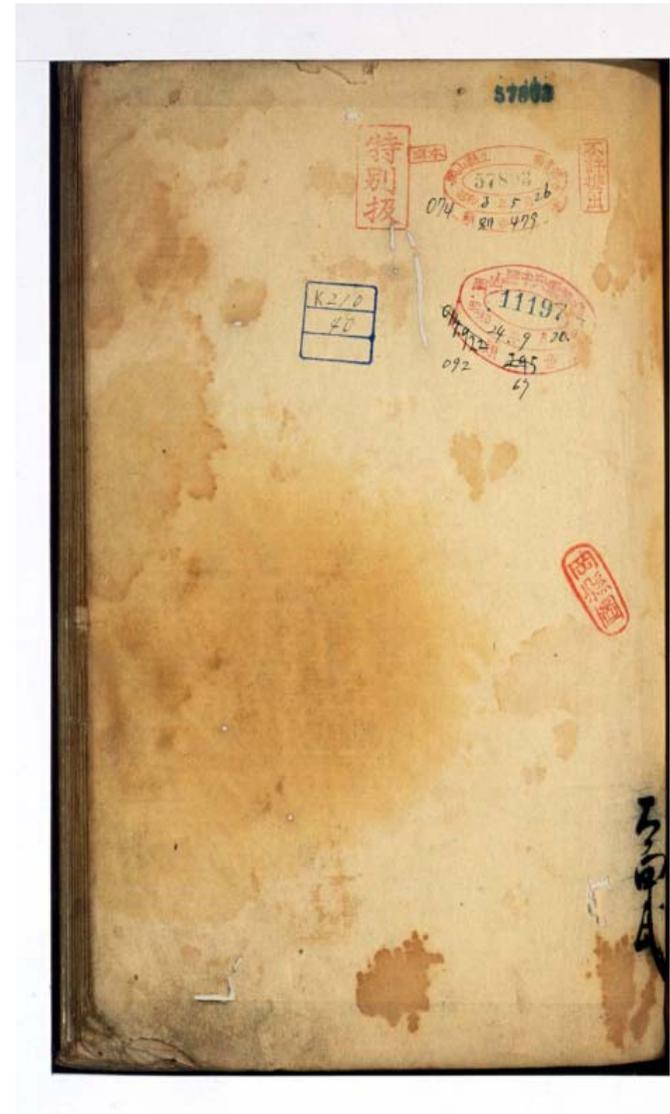
岡山県立図書館所蔵和装本 KW210/26 『池田軍記』（表紙は「池田軍功記」、本文標題は「池田軍記」、『国書総目録』は『池田軍功記』と登載）を翻刻し、原文と併載しました。池田家の歴史について、起こり（池田教正）から池田輝政（1564～1613）が文禄の役（1592）に参加した時代まで、合戦を中心に記述してます。延享三年（1746）に太田正儀が写した本で、原本は未詳です。

本書中「朝鮮の陣の節輝政家臣中村九郎右衛門」逸話の記述は、池田家正史『池田家履略記』中の「運漕兵糧於名古屋」の記述と酷似しており、原本は『池田家履略記』編集者斉藤一興が収集した資料の一冊であったかも知れません。

目次

一	池田教正	三頁
二	池田軍記	五頁
三	教正働の事	五頁
四	池田恒利入道宗伝之事	一一頁
五	恒利後室乳母に被選事	一三頁
六	池田勝三郎立退事	一五頁
七	池田勝三郎恒興海津陣口一番首取事	一七頁
八	武蔵守殿討手仕損処池田勝三郎撞伏之事	二二頁
九	義元と合戦恒興諫言図 <small>二</small> 中事	二五頁
一〇	軽海合戦池田信輝討取稲葉又右衛門事	三三頁
一一	池田信輝家士伊木山を取事	四一頁
一二	堂洞城信輝一番に乗取事	四三頁
一三	越前手筒城攻信輝父子軍功之事	四九頁
一四	花熊城攻池田父子軍功之事	六一頁
一五	大坂落去信輝撰州拝領付御感状之事	七五頁
一六	淡州退治勝九郎発向之事	七九頁
一七	小牧長久手陣勝入・之助討死の事	一一頁
一八	「一天正十三年乙酉雜賀征伐池田三左衛門輝政軍勢有之」（一つ書き）	一六九頁

太田氏

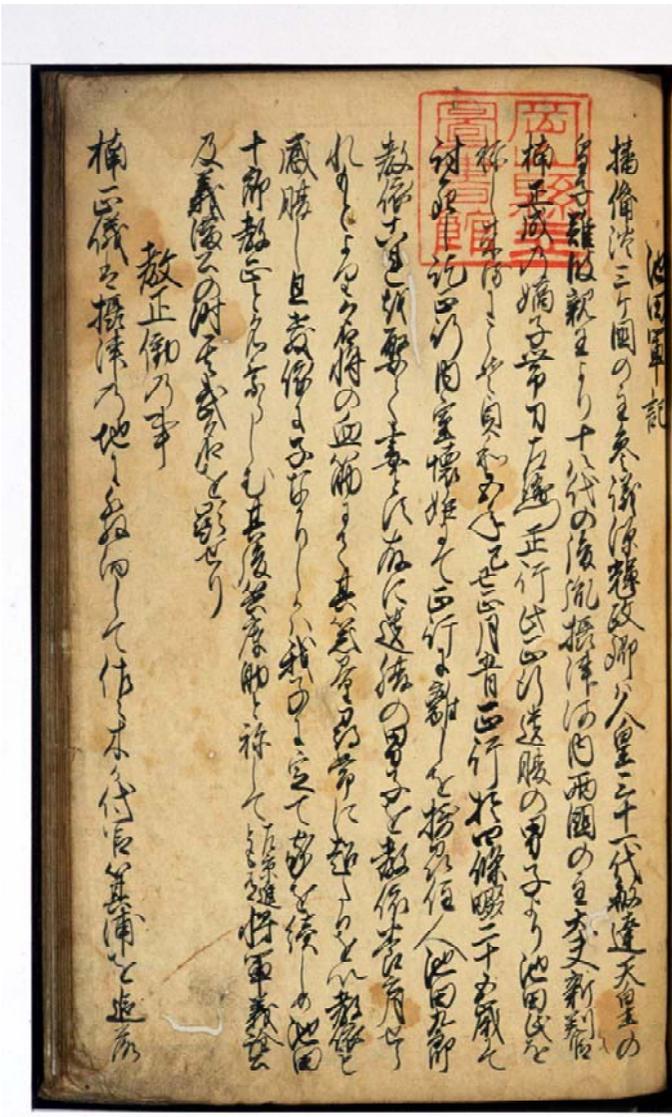


池田教正 三補実録二十二卷

撰州野瀬ノ庄ノ住人内藤右兵衛満幸ト云者仁勇人ニ超シカハ
故楠公是ヲ賞翫ノ餘リ渠ガ娘ヲ以テ正行ニ約シ置ニ子
ヲ産シ嫡子ハ三歳ニテ早世シニ男教正也月未滿胎中半ニ
シテ左金吾討死セラレシ後満幸心有テ高武州ニ属シタリ
シカハ正儀兄ノ妻ナレハトテ不義ノ家族差置ニ不丹トテ
故郷へ送りシヲ同國ノ住人池田九郎教依娶テ後教正出生シ
ケルヲ名將ノ種子ナレハトテ教依實子ニシテ養育シ七
歳ニテ元服セサセ池田十郎教正ト称ス而後細川頼之ノ
手ニ属シテ武ノ誉アリシ池田兵庫助ハ此人ノ事ニソ
アリケル

池田教正 三補 実録 二十二卷

撰州野瀬ノ庄ノ住人内藤右兵衛満幸ト云者、仁勇人ニ超シカハ、
故楠公是ヲ賞翫ノ余リ、渠ガ娘ヲ以テ正行ニ約シ置、二子
ヲ産シ、嫡子ハ三歳ニテ早世シニ男教正也、月未レ滿胎中半ニ
シテ左金吾討死セラレシ後、満幸心有テ高武州ニ属シタリ
シカハ、正儀兄ノ妻ナレハトテ不義ノ家族差置ニ不忍トテ
故郷へ送りシヲ、同國ノ住人池田九郎教依娶テ後、教正出生シ
ケルヲ、名將ノ種子ナレハトテ教依實子ニシテ養育シ、七
歳ニテ元服セサセ池田十郎教正ト称ス、而後細川頼之ノ
手ニ属シテ武ノ誉アリシ池田兵庫助ハ此人ノ事ニソ
アリケル

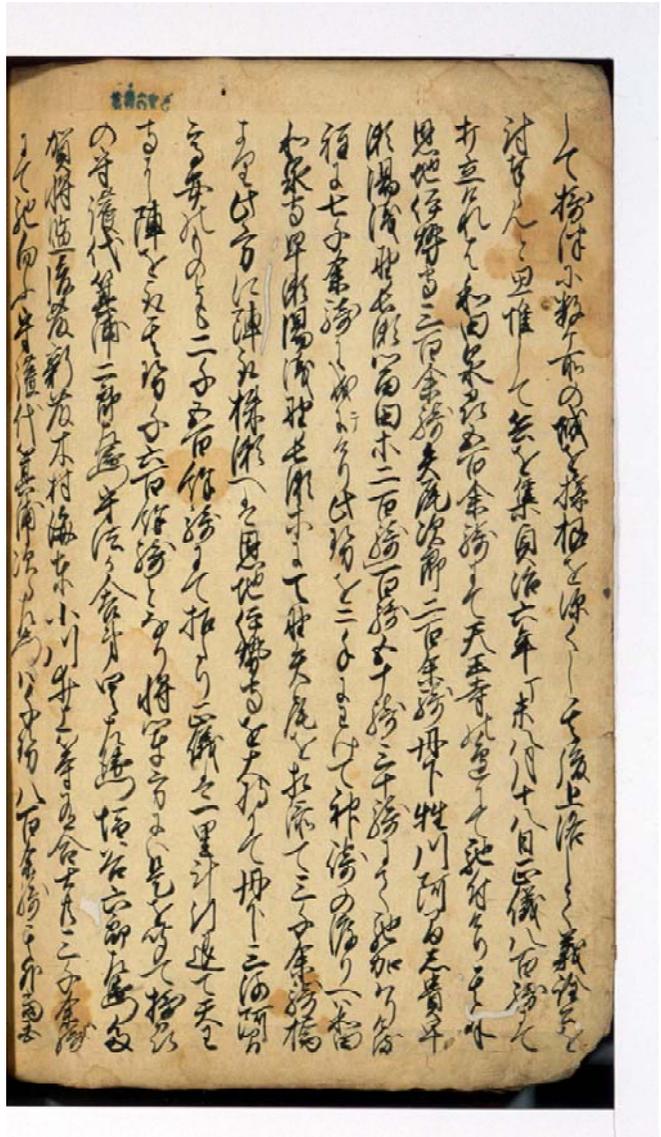


池田軍記

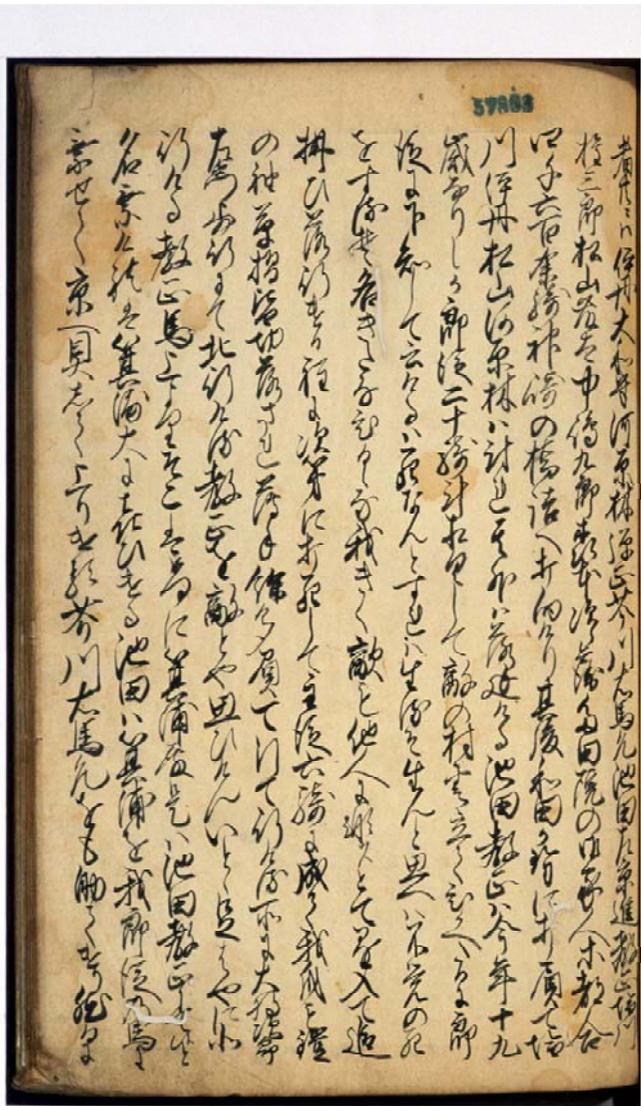
播備淡三ヶ国の主参議源輝政卿ハ、人皇三十一代敏達天皇の皇子難波親王より十八代の後胤撰津河内両国の主大夫新判官楠正成の嫡子帯刀左衛門正行、此正行遺腹の男子より池田氏を称し来るにこそ、貞和五年^{己丑}正月五日正行於四条畷二十五歳にて討死し訖、正行内室懐妊にて正行に離しを、撰州住人池田九郎教依これを娶て妻とす、故に遺腹の男子を教依養育せられ、もとより名將の血筋にて其器量尋常に超たるを以、教依も感服し且教依に子なかりしかハ我子に定て家を続しめ、池田十郎教正と名乗らしむ、其後兵庫助と称して左京進將軍義詮公及義満公の時、其武名を顕せり

教正働の事

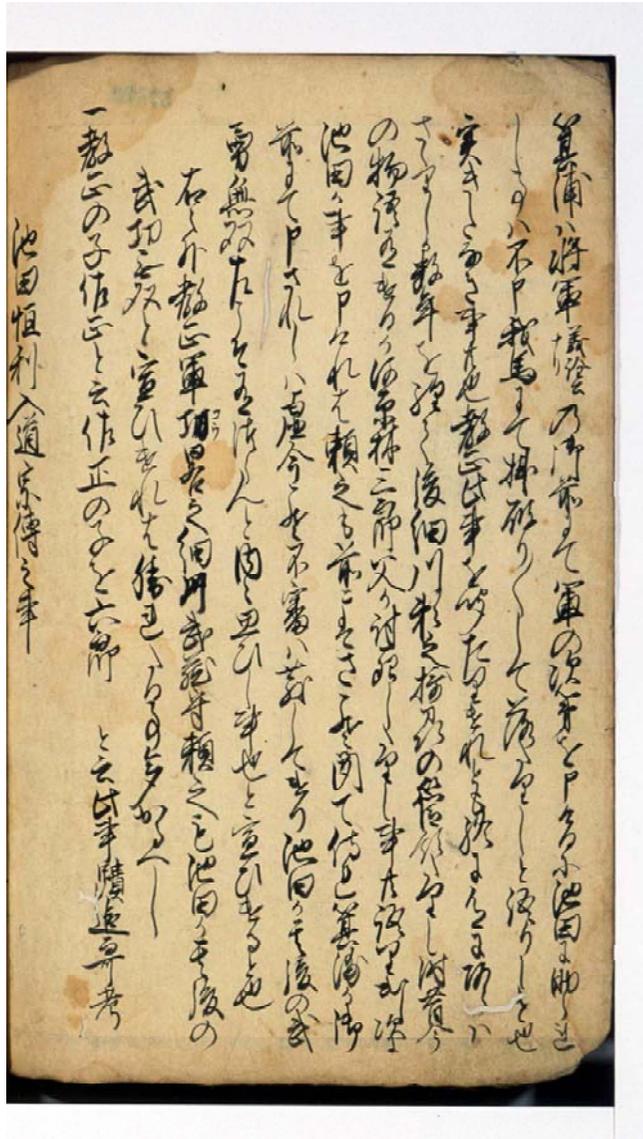
楠正儀は、撰津の地に発向して佐々木か代官箕浦を追落



して撰津に数ヶ所の城を構、根を深くし其後上洛して義詮公を討奉らんと思惟して兵を集、貞治六年丁未八月十八日正儀八百騎にて打立ければ、和田泉州五百余騎にて天王寺の辺にて馳付けり、其外恩地伊勢守三百余騎、矢尾次郎二百余騎、丹下・牲川・阿間・志貴・早瀬・湯浅・野長瀬・富田等、二百騎・百騎・五十騎・三十騎にて馳加ハリける程に、七千余騎に成にけり、此勢を二手にわけて、神崎の渡りへ八和田泉守、早瀬・湯浅・野長瀬等にて野矢尾を相添て三千余騎、橋より此方に陣取、株瀬へは恩地伊勢守を大将にて丹下三河・阿間高安のものとも二千五百余騎にて招たり、正儀は一里計引退て天王寺に陣を取其勢千六百余騎となり、將軍方にハ是を聞て撰州の守護代箕浦二郎左衛門守護か舎弟四郎左衛門、塩谷六郎左衛門、多賀將監、後藤・新藤・木村・海東・小川・井上等有合士共三千余騎にて馳向ふ、守護代箕浦次郎左衛門ハ手勢八百余騎、其外当国



者共ニハ伊丹大和守・河原林弾正・芥川右馬允・池田左京進教正・塩川
 権三郎・松山藤太・中嶋九郎・森本次郎兵衛・多田院の御家人等都合
 四千六百余騎、神崎の橋詰へ打向けり、其後和田か勢に打負て塩
 川・伊丹・松山・河原林ハ討れ其外ハ落延ける、池田教正ハ今年十九
 歳なりしか、郎従二十騎計相具して敵の村雲立てひかへたるに、郎
 従に下知して云けるハ、死なんとすれハ生るそ、生んと思へハ不覚の死
 をするそ、各きたなひくな、我きく敵も他人に非スとて、懸入て追
 払ひ落ける程に、次第に打死して主従六騎に成て我身も鎧
 の袖・草摺皆切落され、薄手余多負て引て行ける所に、大將次郎
 左衛門歩行にて北行ける教正を敵とや思ひけん、いとゞ足はやに北
 行ける、教正馬上より、そこは如何に箕浦殿是ハ池田教正にて候と
 名乗ければ箕浦大に喜びける、池田ハ箕浦を我郎従の馬に
 乗せて京へ具して上りける、芥川右馬允をも助てけり、然るに



池田恒利入道宗伝之事

箕浦ハ將軍義詮公の御前にて軍の次第を申けるに、池田に助られし事ハ不申、我馬にて掛破りくして落たりしと語りしと也、実きたなき事共也、教正此事を聞たりけれとも終に色にあらハさゞりしか、数年を経て後細川頼之摂州の管領たりし時、昔今の物語有けるか、河原林三郎父か討死したりし事共語り出し、次に池田か事を申ければ、頼之も前ニはさこそ聞て侍れ、箕浦か御前にて申されしハ虚、今こそ不審ハ散してけり、池田か其後の武勇無双左こそ有つらんと内々思ひし事也と宣ひけると也、右之外教正軍功略之、細川武藏守頼之も池田か其後の武功無双と宣ひければ、勝れたる事多かるへし、一教正の子佐正と云、佐正の子を六郎と云、此事蹟追而可考

箕浦ハ將軍義詮公の御前にて軍の次第を申けるに、池田に助られし事ハ不申、我馬にて掛破りくして落たりしと語りしと也、実きたなき事共也、教正此事を聞たりけれとも終に色にあらハさゞりしか、数年を経て後細川頼之摂州の管領たりし時、昔今の物語有けるか、河原林三郎父か討死したりし事共語り出し、次に池田か事を申ければ、頼之も前ニはさこそ聞て侍れ、箕浦か御前にて申されしハ虚、今こそ不審ハ散してけり、池田か其後の武勇無双左こそ有つらんと内々思ひし事也と宣ひけると也、右之外教正軍功略之、細川武藏守頼之も池田か其後の武功無双と宣ひければ、勝れたる事多かるへし、一教正の子佐正と云、佐正の子を六郎と云、此事蹟追而可考

池田恒利入道宗伝之事

大永元辛巳細川武藏守高国、故將軍義澄の御子義晴公を
播磨より迎て六月入洛し奉仰、頓て十二月征夷將軍に任し
給ふ、義晴公御入洛の頃より出仕して享祿年中に仕を辭し尾
州へ退去し江州池田氏の娘を娶り、其後剃髮して宗伝と
稱す、内室懷妊ありしかハ桑の弓・蓬の矢いつくの頃なるらんと
待れしか、病の床に臥て天命限あるにや服藥無驗して世を
終りぬ、斯て天文五年丙申男子誕生す、後に所謂池田勝三郎
トハ是なり

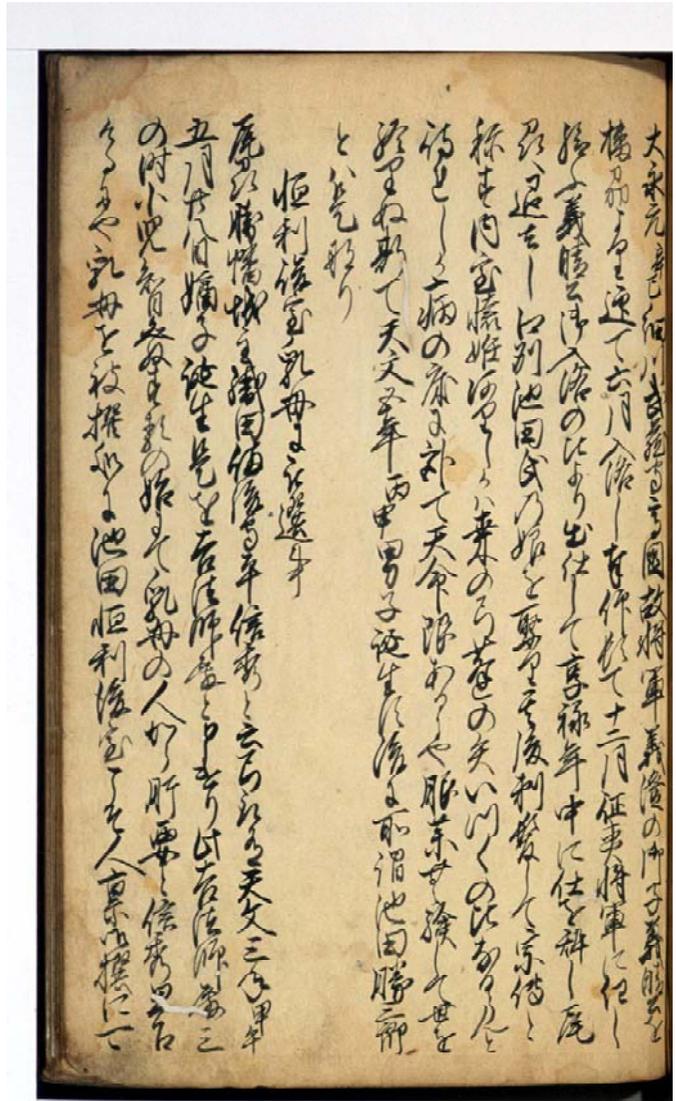
恒利後室乳母に被選事

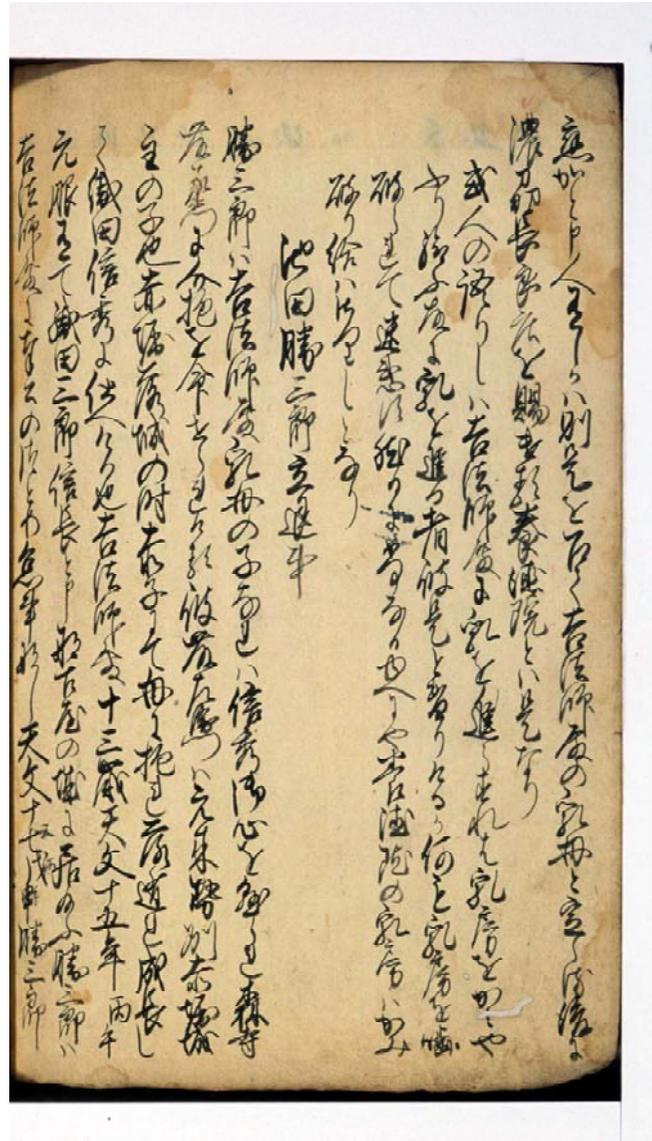
尾州勝幡城主織田備後守平信秀と云弓取有、天文三年甲午
五月廿八日嫡子誕生、是を吉法師殿と申けり、此吉法師殿三
の時、小兒智發するの始にて乳母の人から肝要と信秀思召
けるにや乳母を被撰処に、池田恒利後室こそ人稟御撰に可

大永元辛巳細川武藏守高国、故將軍義澄の御子義晴公を
播州より迎て六月入洛し奉仰、頓て十二月征夷將軍に任し
給ふ、義晴公御入洛の頃より出仕して享祿年中に仕を辭し尾
州へ退去し江州池田氏の娘を娶り、其後剃髮して宗伝と
稱す、内室懷妊ありしかハ桑の弓・蓬の矢いつくの頃なるらんと
待れしか、病の床に臥て天命限あるにや服藥無驗して世を
終りぬ、斯て天文五年丙申男子誕生す、後に所謂池田勝三郎
トハ是なり

恒利後室乳母に被選事

尾州勝幡城主織田備後守平信秀と云弓取有、天文三年甲午
五月廿八日嫡子誕生、是を吉法師殿と申けり、此吉法師殿三
の時、小兒智發するの始にて乳母の人から肝要と信秀思召
けるにや乳母を被撰処に、池田恒利後室こそ人稟御撰に可





池田勝三郎立退事

意中しり人より別是と云く吉法師殿の乳母と云くは
 濃島寺と云く賜まらば養徳院とい先なり
 或人の誤りし吉法師殿の乳母と進まされ乳母といや
 中法師殿の乳母と進まらば先と進りたる何と乳母を囓
 破らして遠慮は細り事あるや下り吉法師殿の乳母とい
 破り給はさりしとなり

勝三郎は吉法師殿の乳母の子なり信秀御心を懸りて森寺
 居たりと云抱と命をとりては彼居たりとい各々別居
 主の子也赤堀落城の時赤子にて母に抱れ落遁れ成長し
 織田信秀は信三郎也吉法師殿十三歳天文十五年丙午
 元服して織田三郎信長と申那古屋の城に居給ふ勝三郎ハ
 吉法師殿に奉公のつとめ怠事なし天文十七戊申勝三郎ハ

応かと申人有しかハ、則是を召て吉法師殿の乳母と定らる、後に
 濃州長良庄を賜ける養徳院とハ是なり

或人の語りしハ、吉法師殿に乳を進らすれば乳房をかミヤ
 ぶり給ふ故に乳を進る者彼是と替りけるか、何も乳房を囓
 破られて迷惑す、然るに如何なるゆへにや養徳院の乳房ハかみ
 破り給ハさりしとなり

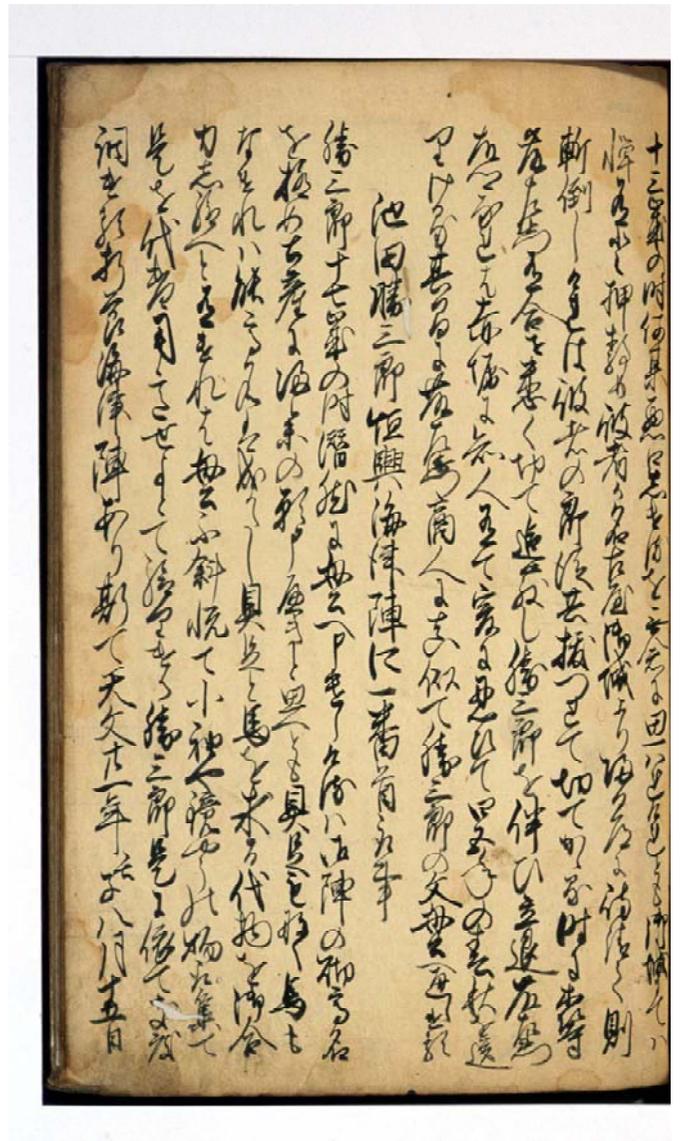
池田勝三郎立退事

勝三郎ハ吉法師殿乳母の子なれハ信秀御心を懸られ、森寺
 藤左衛門に介抱を命せられける、彼藤左衛門ハ元來勢州赤堀城
 主の子也、赤堀落城の時赤子にて母に抱れ落遁れ成長し
 て織田信秀に仕へける也、吉法師殿十三歳天文十五年丙午
 元服有て織田三郎信長と申、那古屋の城に居給ふ、勝三郎ハ
 吉法師殿に奉公のつとめ怠事なし、天文十七戊申勝三郎

十三歳の時、何某悪口しけるを無念に思ハれけれども、御城にてハ
 憚有と押静め、彼者か名古屋御城より帰る道に待請て則
 斬倒し、直に彼者の所迄去抜つて切て可なり。時、森寺
 藤左衛門有合せ悉く切て追散し、勝三郎を伴ひ立退、藤左衛門
 故郷なれば赤堀に知人有て、爰に忍ひて四五年の春秋を送
 りける、其間に藤左衛門商人に真似て勝三郎の父母公へ通しける

池田勝三郎恒興海津陣口一番首取事

勝三郎十七歳の時、潜然に母公へ申遣しけるハ、御陣の砌高名
 を極め土産に帰参の願申へきと思へとも、具足もなく馬も
 なけれハ能高名は成かたし、具足と馬を求る代物を御合
 力し給へと有ければ、母公不斜悦て小袖や鏡やらの物取集て
 是を代替用意せよとて給りける、勝三郎是に依て支度
 調ける折節海津陣あり、斯て天文廿一年^{壬子}八月十五日

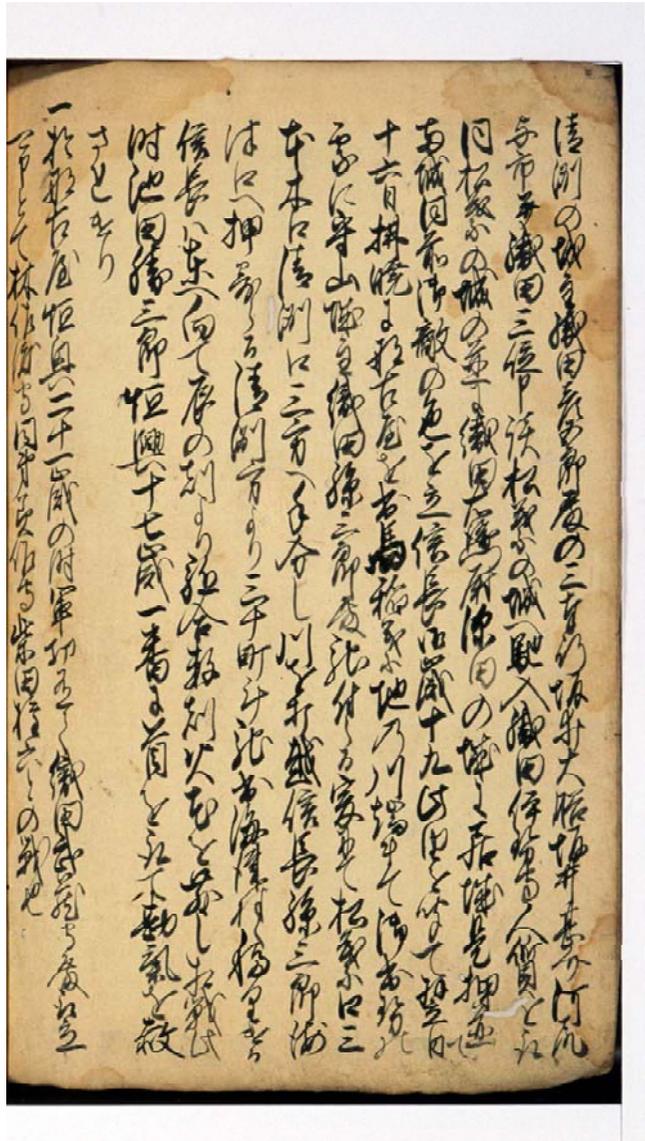


十三歳の時、何某悪口しけるを無念に思ハれけれども、御城にてハ
 憚有と押静め、彼者か名古屋御城より帰る道に待請て則

斬倒しければ、彼者の郎従共抜つて切てかゝる時に、森寺
 藤左衛門有合せ悉く切て追散し、勝三郎を伴ひ立退、藤左衛門
 故郷なれば赤堀に知人有て、爰に忍ひて四五年の春秋を送
 りける、其間に藤左衛門商人に真似て勝三郎の父母公へ通しける

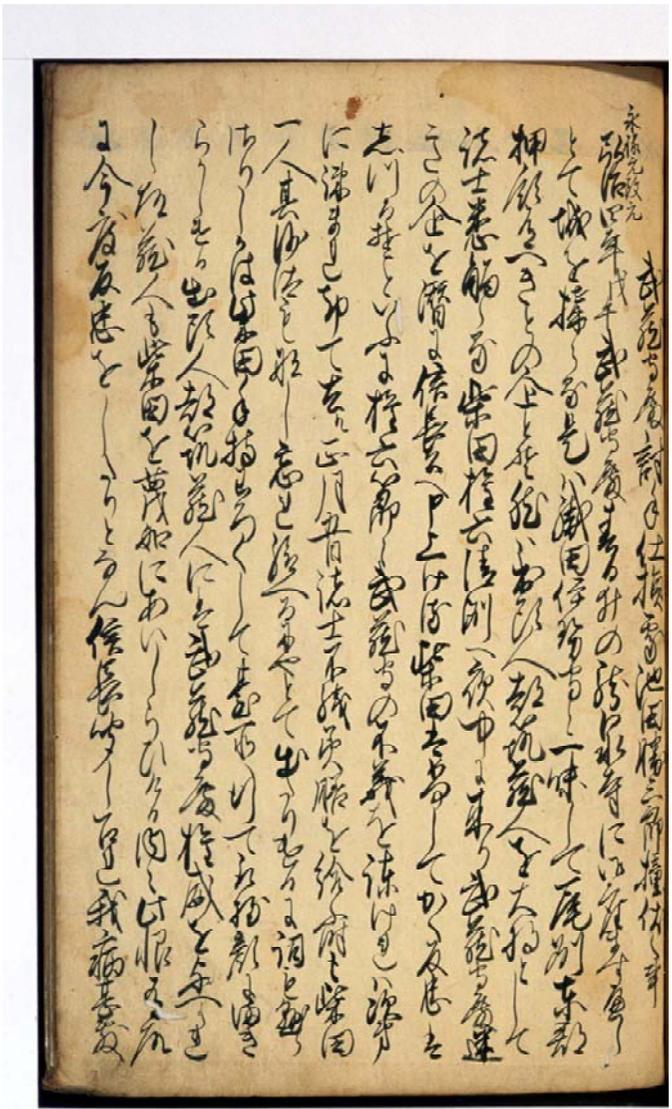
池田勝三郎恒興海津陣口一番首取事

勝三郎十七歳の時、潜然に母公へ申遣しけるハ、御陣の砌高名
 を極め土産に帰参の願申へきと思へとも、具足もなく馬も
 なけれハ能高名は成かたし、具足と馬を求る代物を御合
 力し給へと有ければ、母公不斜悦て小袖や鏡やらの物取集て
 是を代替用意せよとて給りける、勝三郎是に依て支度
 調ける折節海津陣あり、斯て天文廿一年^{壬子}八月十五日



清洲の城主織田彦五郎殿の三奉行坂井大膳・坂井甚介・河尻
 与市并織田三位申談、松葉の城へ馳入織田伊勢守人質を取、
 同松葉の城の並に織田右衛門尉深田の城に居、城は押並て
 両城同前御敵の色を立、信長御歳十九此由を聞て翌日
 十六日払暁に那古屋を出馬、稲葉地の川端まで御出勢の
 処に守山城主織田孫三郎殿馳付らる、爰にて松葉口・三
 本木口・清洲口三方へ手分し川を打越、信長・孫三郎、海
 津口へ押寄らる、清洲方より三十町計馳出海津村へ移りける、
 信長ハ東へ向て辰の刻より駈合数刻火花を散し相戦、此
 時池田勝三郎恒興十七歳一番に首を取て勘気を赦
 されけり

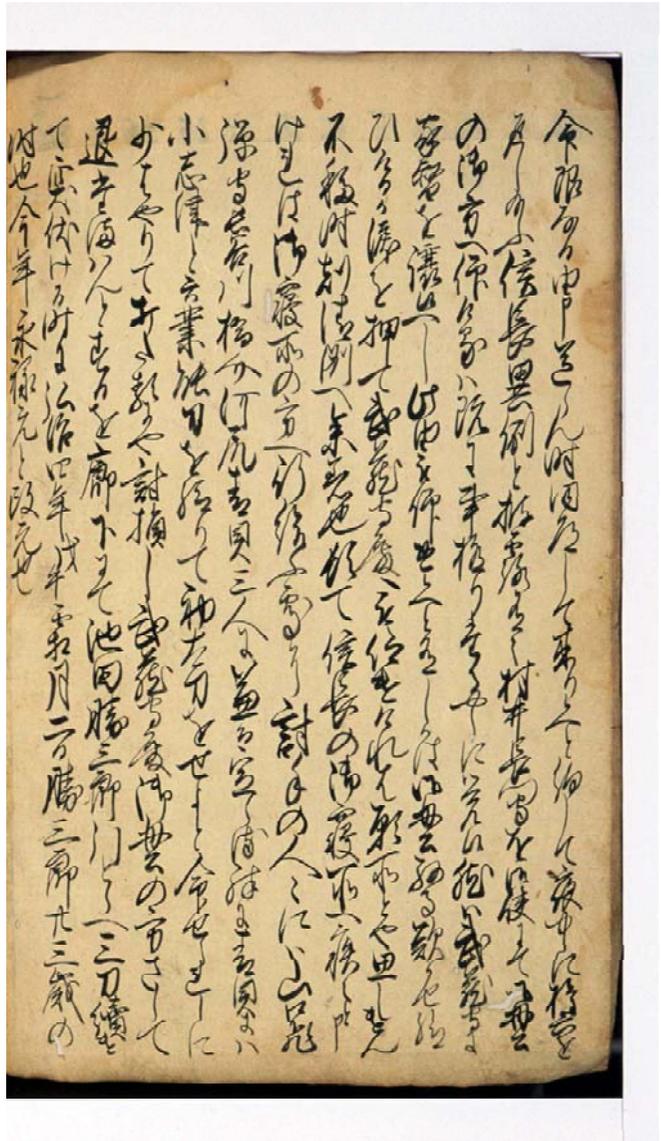
一於那古屋恒興二十一歳の時軍功有て織田武蔵守殿取立
 可申とて、林佐渡守・同弟美作守・柴田権六との戦也



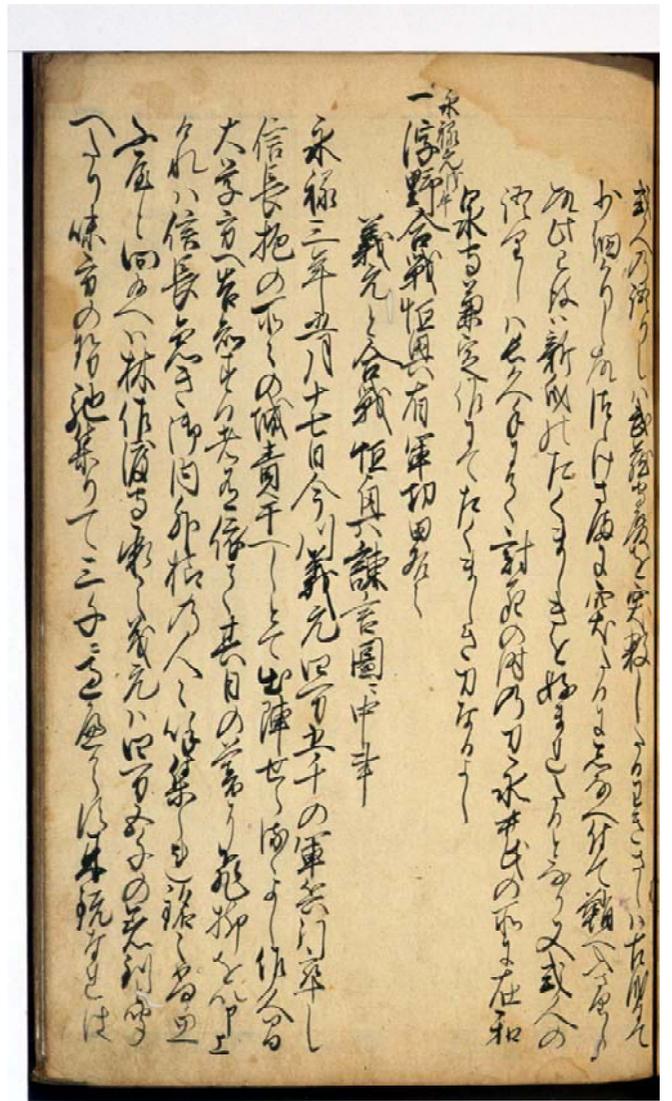
武蔵守殿討手仕損処池田勝三郎撞伏之事

永祿元改元

弘治四年戊午武蔵守殿春日井の龍泉寺に御座ますへし
 とて城を構らる、是ハ織田伊勢守と一味して尾州東郡
 押領有へきとの企とそ、然ハ出頭人都筑蔵人を大将として
 諸士悉触らる、柴田権六清洲へ夜中に来り武蔵守殿迷
 意の企を潜に信長公へ申上ける、柴田は如何してかく反忠は
 しつるそといふに、権六節々武蔵守の不義を諫けれハ、次第
 に疎まれ却て去ル正月五日諸士不残美膳を給ふ時も柴田
 一人其沙汰もなし、忘れ給へるにやとて出たりけるに詞も懸ら
 さりしかは、柴田手持わるくして台所へ行て取持顔にまき
 らかしける、出頭人都筑蔵人には武蔵守殿権威を与へられ
 し故、蔵人も柴田を蔑如にあいしらひける、内々此恨有故
 に今度反忠をしたりとなん、信長聞し召れ我病甚敷



命限なる由申送らん時、同道して来り候へと約して夜中に権六を返し給ふ、信長異例と披露有之、村井長門守を御使にて御母公の御方へ仰けるハ、既に事極りたるやうに覚候、然ハ武蔵守に家督を譲候へし、此由被仰遣候へと有しかは、御母公驚歎かせ給ひけるか、涙を押して武蔵守殿へ被仰遣ければ、願所とや思しけん不移時刻清洲へ参着也、頓て信長の御寝所へ疾々と申ければ御寝所の方へ行給ふ処に、討手の人々にハ山口飛驒守・長谷川橋介・河尻青貝三人に兼而定らる、殊に青貝にハ小志津と云業能刀を給りて初太刀をせよと命せられしに、少はやりて打たるにや討損し、武蔵守殿御母公の方さして退たまへんとするを、廊下にて池田勝三郎引とらへ三刀続けて突伏ける、時に弘治四年戊午霜月二日勝三郎廿三歳の時也、今年永禄元と改元也



或人の語りしに武蔵守殿と交戦し、
少細りしに、
武蔵守殿は、
新成れたる、
討死の附り、
永井氏の所、
在和

永禄元年
一浮野合戦恒興有軍功略之
義元と合戦恒興諫言圖中事

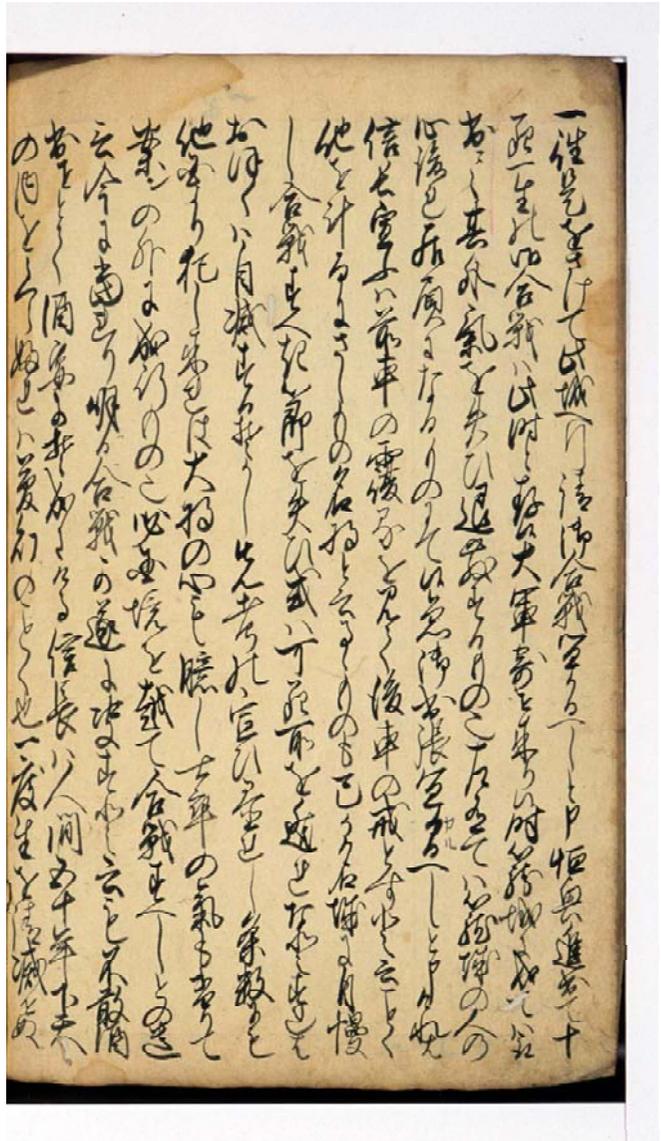
永禄三年五月十七日、今川義元四万五千の軍兵引率し、
信長扼の所々の城責干し、とて出陣せし、
大守方(岩倉)より老る信長に其日の言、
「信長、
此已後ハ新身のたくましきを好まれたるとなり、
又或人の語りしハ長久手にて討死の時の刀永井氏の所に在、
和泉守兼定作にてたくましき刀なるよし」

永禄元年
永禄元年戊午

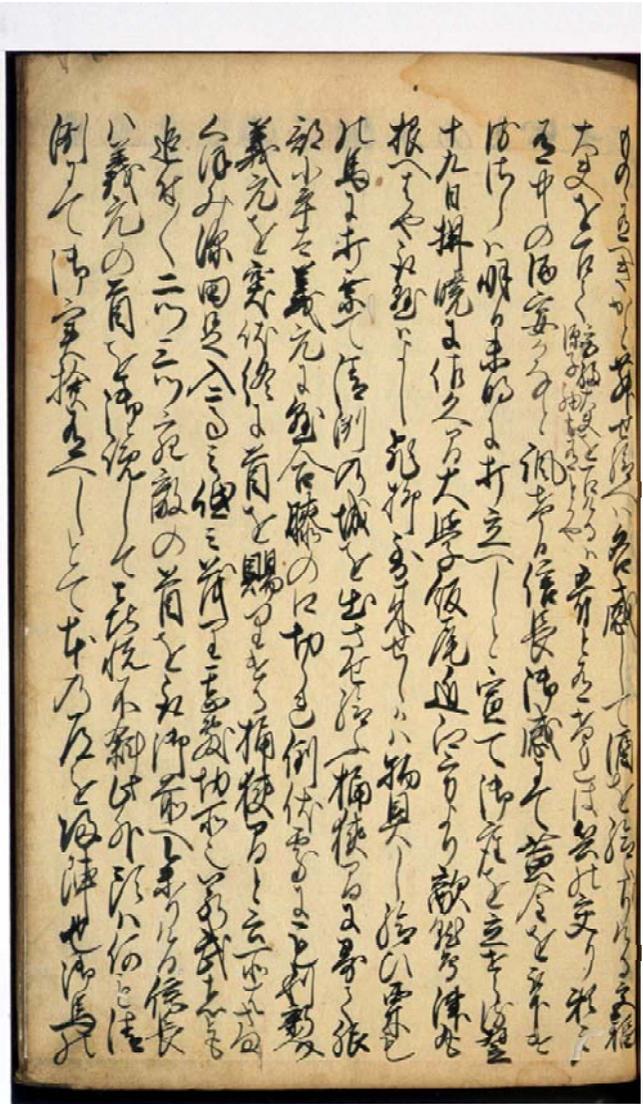
一浮野合戦恒興有軍功略之

義元と合戦恒興諫言圖中事

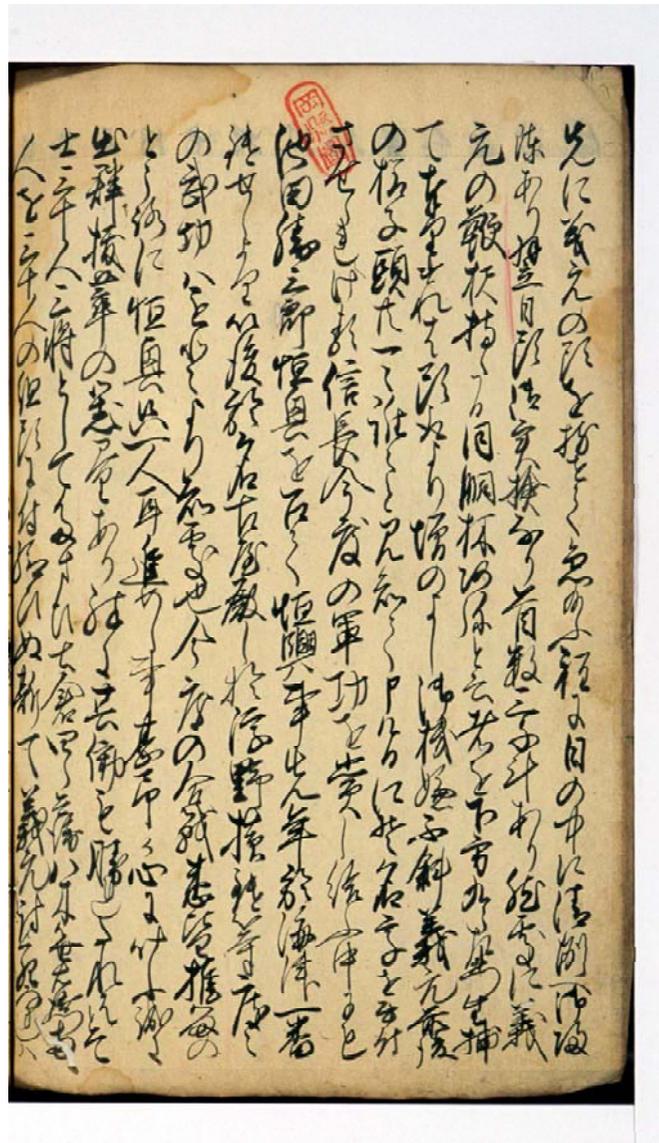
永禄三年五月十七日、今川義元四万五千の軍兵引率し、
信長扼の所々の城責干し、とて出陣せらるゝよし、
佐久間大学方へ告知する者有、依て其日の暮に飛脚を以申上
けれハ信長急き御内外様の人々呼集られ銘々如何思
ふやと問給へハ、林佐渡守承之、義元ハ四万五千の着到と聞
へたり、味方の勢馳集りて三千ニ過へからず、
成銳なれば



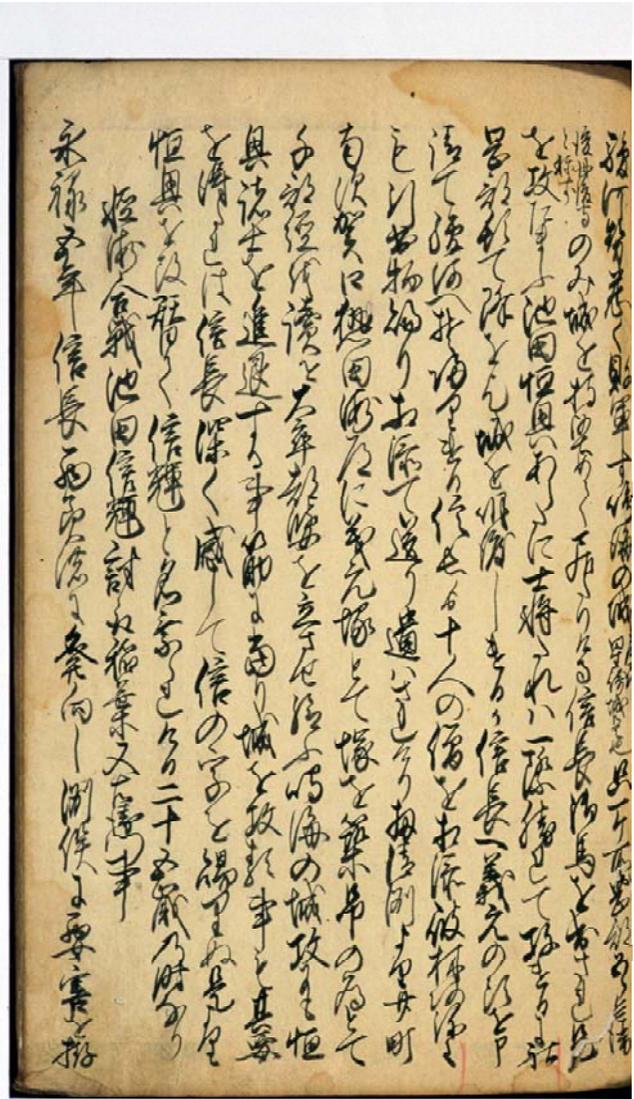
一往是をさけて此城へ引請、御合戦宜かるへしと申、恒興進出て十
死一生の御合戦ハ此時と存候、大軍寄せ来り候時、籠城に成てハ取
出ニし其外気を失ひ退散するもの也、左有てハ籠城の人の
心後れ居、負になるものにて候、急御出張宜かるへしと申ければ
信長宣ふハ、前車の覆るを見て後車の戒とすと云ことく
他を計るに、さしもの名将と云るゝものも己か名城に自慢
し合戦すへき節を失ひ、或ハ可死所を遁れなとすれば
おほくハ自滅するそかし、先考の宣ひ置れし条数にも
他国より犯し来れば大将の心も臆し士卒の気も替りて
案ノの外に成行もの也、必国境を越て合戦すへしとの遺
言今に当れり、明日合戦可遂に決すと云も不敵、酒
出せとて酒宴にそ成にける、信長ハ、人間五十年下天
の内をくらふれハ夢幻のことく也一度生を請滅せぬ



ものゝ有へきか、と舞せ給へハ、各感して酒を給たりける、宮福
 大夫を召て宮福大夫を召けるハ肴と有ければ、兵の交り頼深子細も有とかやほのめかしみ
 有中の酒宴かな、と諷諷ける、信長御感にて黄金を被下け
 る、さらハ明日未明に打立へしと宣て御座を立せらる、翌
 十九日払暁に、佐久間大学・飯尾近江方より敵鷲津・丸
 根へはや取懸候よし飛脚到来せしかハ、物具し給ひ栗毛
 の馬に打乗て清洲の城を出させ給ふ、桶狭間に寄て服
 部小平太、義元に懸合膝の口切られ倒伏処に、毛利新介
 義元を突伏終に首を賜りける、桶狭間と云所はさま
 くほみ深田足入、高ミ低ミ茂り甚敷切所也、若武者とも
 追付く、二ツ三ツ宛敵の首を取御前へ参りける、信長
 ハ義元の首を御覽して喜悦不斜、此外頭ハ何れ清
 洲にて御実檢有へしとて、本の道を帰陣也、御馬の

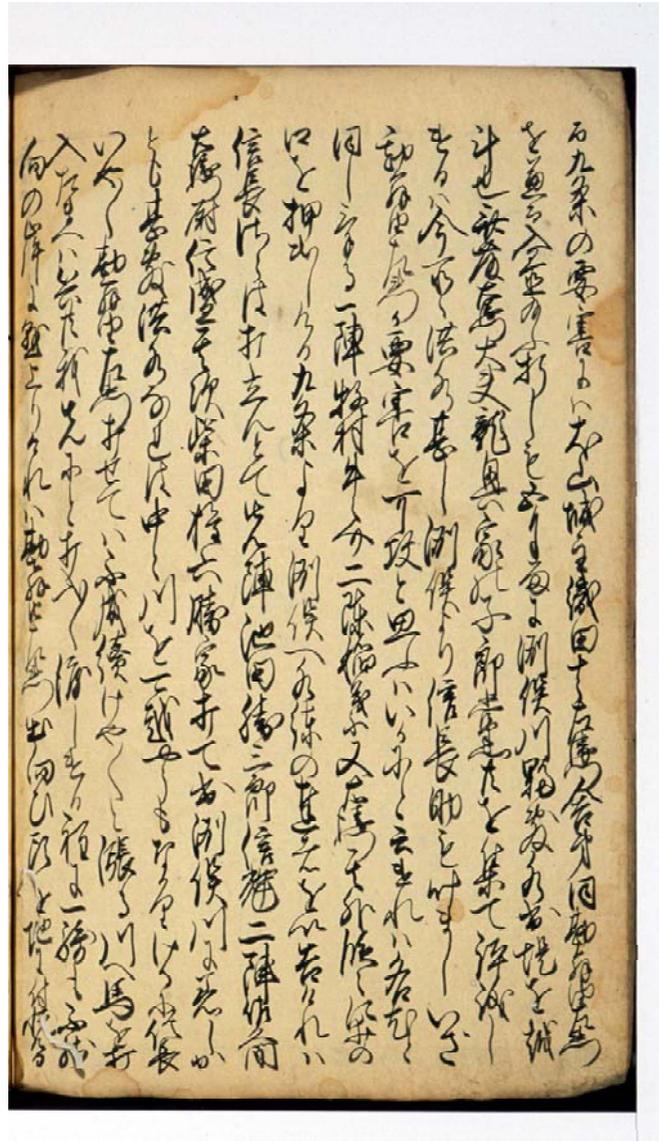


先に義元の頭を持せて急給ふ程に、日の中に清洲へ御帰陣あり翌日頭御実檢なり、首数三千計あり、然処に義元の鞭杖持たる同朋林阿弥と云者を下方九郎左衛門生捕て奉りければ、頭取より増のよし御機嫌不斜、義元最後の様子頭共一々誰々と見知て申けるにそ名字を書付させられる、信長今度の軍功を賞し給ふ中にも池田勝三郎恒興を召て、恒興事先年於海津一番鎗せしより以後、於名古屋殿し於浮野横鎗等度々の武功ハもとより知処也、今度の合戦悉皆推留のところ恒興只一人耳進めし事、甚予か心に叶ふ、誠に出群抜粹の器量あり、殊に其働も勝れたれはとて士三十人三将としてたまひ、土倉四郎兵衛・八木笹右衛門兩人を三十人の組頭に付給ひぬ、斯て義元討死なれハ



駿河勢悉く敗軍す、鳴海の城・星崎城是也、只一ヶ所岡部五郎兵衛
後丹後守
と稱すのみ城を持堅めて居たりける、信長御馬を出され是
 を攻たまふ、池田恒興あらたに士將たれハ一際勝れて攻けるに(二七)社、
 岡部頓て降を乞城を明渡しけるか、信長へ義元の頭を申
 請て駿河へそ帰りけり、信長より十人の僧相添彼林阿弥に
 も引出物賜り相添て送り遣ハされけり、扱清洲より廿町
 南須賀口熱田海道に義元塚とて塚を築、弔の為とて
 千部経を誦せ大卒都婆を立てさせ給ふ、鳴海の城攻にも恒
 興諸士を進退する事筋に当り、城を攻る事も其要
 を得たれば、信長深く感して信の字を賜りぬ、是より
 恒興を改替て信輝と名乗られける、二十五歳の時なり
 輕海合戦池田信輝討取稲葉又右衛門事
 永祿五年信長西美濃に発向し洲侯に要害を拵

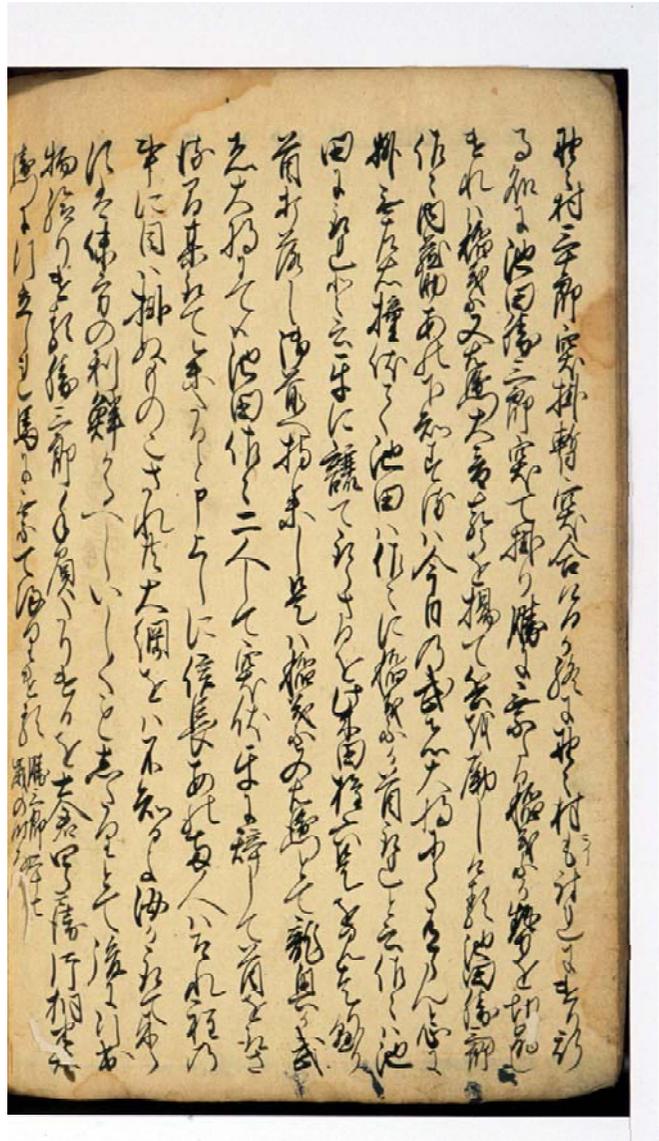
駿河勢悉く敗軍す、鳴海の城・星崎城是也、只一ヶ所岡部五郎兵衛
後丹後守
と稱すのみ城を持堅めて居たりける、信長御馬を出され是
 を攻たまふ、池田恒興あらたに士將たれハ一際勝れて攻けるに(二七)社、
 岡部頓て降を乞城を明渡しけるか、信長へ義元の頭を申
 請て駿河へそ帰りけり、信長より十人の僧相添彼林阿弥に
 も引出物賜り相添て送り遣ハされけり、扱清洲より廿町
 南須賀口熱田海道に義元塚とて塚を築、弔の為とて
 千部経を誦せ大卒都婆を立てさせ給ふ、鳴海の城攻にも恒
 興諸士を進退する事筋に当り、城を攻る事も其要
 を得たれば、信長深く感して信の字を賜りぬ、是より
 恒興を改替て信輝と名乗られける、二十五歳の時なり
 輕海合戦池田信輝討取稲葉又右衛門事
 永祿五年信長西美濃に発向し洲侯に要害を拵



而、九条の要害にハ犬山城主織田十郎左衛門舎弟同勘解由左衛門
を兼而入置給ふ、折しも五月雨に洲俣川夥敷水出堤を越
計也、斉藤右衛門大夫龍興家の子郎党共を集て評議し
けるハ、今所之洪水甚し洲俣より信長助も叶まし、いざ
勘解由左衛門か要害を可攻と思ふハいかにと云けれハ、各尤と
同しける、一陣牧村牛之介・二陣稲葉又右衛門、其外段々に井の
口を押しける、九条より洲俣へ水練の達者を以告けれハ、
信長さらは打立んとて先陣池田勝三郎信輝・二陣佐久間
右衛門尉信盛・其次柴田権六勝家、打て出洲俣川に着しか
とも、甚敷洪水なれば中々川を可越やうもなかりけるに、信長
いやく勘解由左衛門打せてハ不成続けやくと漲る川へ馬を打
入たまへハ、兵共我先にと打入く渡しける程に、一騎も不残
向の岸に懸上りけれハ、勘解由左衛門出向ひ頭を地に付け悦ける

今日の一番合戦ハ池田に命しつるそと宣ひけれハ、是ハ仰
とも覚へぬもの哉、某此に有なから誰に先を讓候へきと申切て
そ進ける、申所理なれば尤なりとて池田は二陣をせよと福留
平左衛門を以仰ける、頃ハ五月三日雲間の月影細く見へて
互に無覚東折なるに、牧村牛之助深田を前に当て、敵かしらハ
是を凌かせ其疲に乗て討へきと招て待懸たり、勘解由左衛門
いらつて懸るに降暮したる長雨に田の面水かさまして進め
共く、同じ所に有やうに見へしかハ、信長後より大音声を挙
て平にかゝれと、おがり 給へハ、深田を漸々に打越丘辺に走上
りける、牧村是を見て関を嘩と作り懸切て懸り暫戦しか、打
負て引退処に、二陣にひかへたる稲葉又喚叫てかゝり来ル、荒
手の駿にや、味方の勢突立られけるか、勘解由左衛門ハ一足
も不引して多の敵を突伏戦勞れて息を繼て立たる処に、

今日の一番合戦ハ池田に命しつるそと宣ひけれハ、是ハ仰
とも覚へぬもの哉、某此に有なから誰に先を讓候へきと申切て
そ進ける、申所理なれば尤なりとて池田は二陣をせよと福留
平左衛門を以仰ける、頃ハ五月三日雲間の月影細く見へて
互に無覚東折なるに、牧村牛之助深田を前に当て、敵かしらハ
是を凌かせ其疲に乗て討へきと招て待懸たり、勘解由左衛門
いらつて懸るに降暮したる長雨に田の面水かさまして進め
共く、同じ所に有やうに見へしかハ、信長後より大音声を挙
て平にかゝれと、おがり 給へハ、深田を漸々に打越丘辺に走上
りける、牧村是を見て関を嘩と作り懸切て懸り暫戦しか、打
負て引退処に、二陣にひかへたる稲葉又喚叫てかゝり来ル、荒
手の駿にや、味方の勢突立られけるか、勘解由左衛門ハ一足
も不引して多の敵を突伏戦勞れて息を繼て立たる処に、



野々村三十郎突掛暫突合けるか終に野々村も討ヒれにけり、斯
る処に池田勝三郎突て掛り勝に乗たる稲葉か勢を切崩し
けれハ、稲葉又右衛門大音声を揚て兵を励しける、池田勝三郎・
佐々内蔵助あの下知するハ今日の武者大将にて有らんと心に
掛無左右撞伏て、池田ハ佐々に稲葉か首取れと云佐々ハ池
田に取れと云互に譲て取らざるを、柴田権六是を見走り懸り
首打落し御前へ持参し、是ハ稲葉又右衛門とて龍興か武
者大将にて候、池田・佐々二人して突伏互に辞して首を取さ
る間某取て参たると申上しに、信長あの人ハそれ程の
事に目ハ掛ぬもの也、され共大綱をハ不知るに汝か取て来ら
すは味方の利鮮イサかるへし、いしくもしたりとて、後に引出
物給りける、勝三郎手負たりけるを土倉四郎兵衛・片桐半口
衛門に引立られ馬に乗て帰りける勝三郎二十七
歳の時なり

取可申とて一分の手勢にて乗取ける、則信長此上へ取上要害を
丈夫に候て両城を見下し御居陣なりしかは、宇留摩城難拘
思ひて明渡しける也、依之信輝感悦し今より香川氏を改て
伊木氏に成候へと有しかは伊木清兵衛とそ名乗ける、輝政の
代に伊木豊後と云ハ是也、扱猿はみの城ハ飛驒川に付て
高山也、また大ほく山とて猿はみのうへに茂りたるかさ有、是
へハ丹羽五郎左衛門先登して則御人数を上られ水の手を取切、
上下より取詰させ給へは、頓而降参して退散す

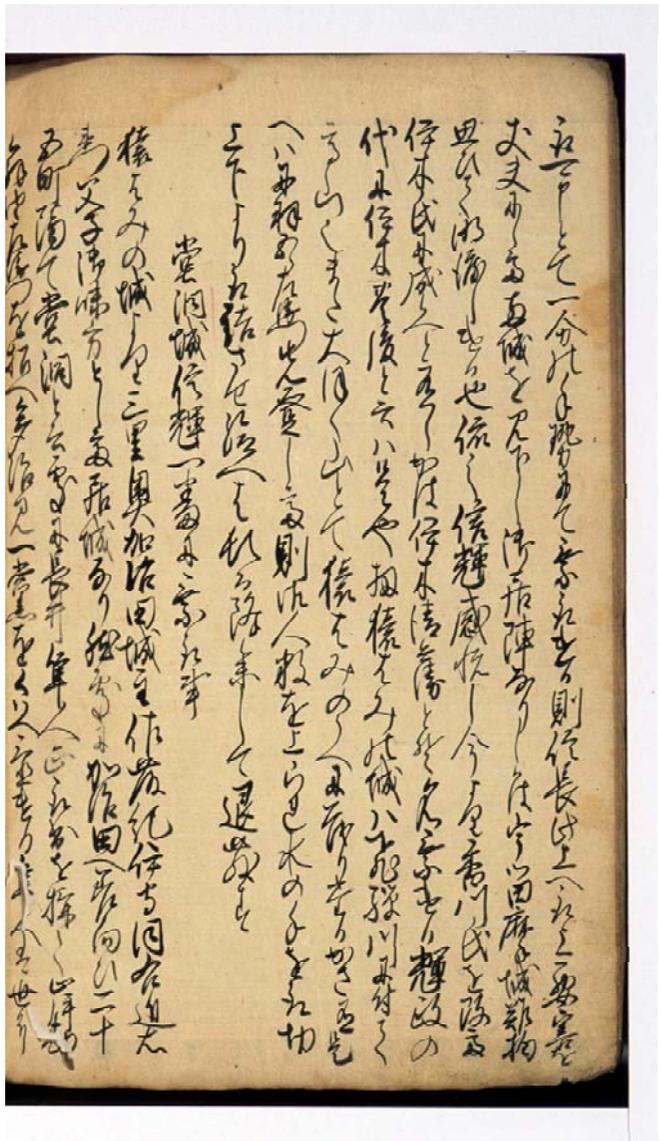
堂洞城信輝一番に乗取事

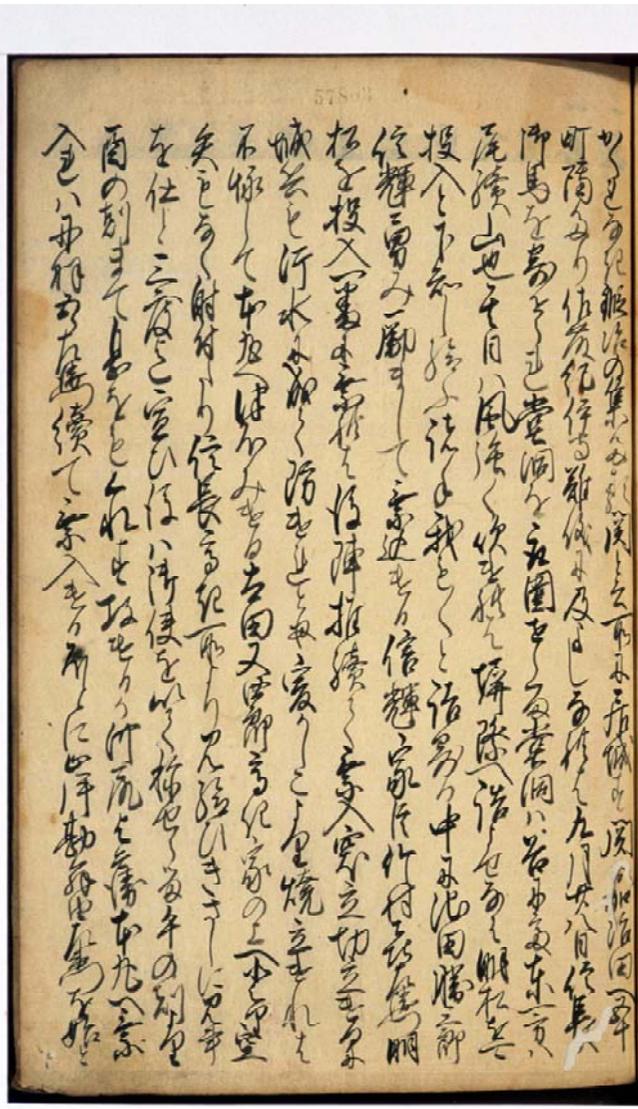
猿はみの城より三里奥加治田城主佐藤紀伊守・同右近右
衛門父子御味方として居城なり、然処に加治田へ差向ひ二十
五町隔て堂洞と云処に長井隼人正取出を構て岸勘
解由左衛門を扣へ、多治見一党をくハへ置けり、隼人は世に

取可申とて一分の手勢にて乗取ける、則信長此上へ取上要害を
丈夫に候て両城を見下し御居陣なりしかは、宇留摩城難拘
思ひて明渡しける也、依之信輝感悦し今より香川氏を改て
伊木氏に成候へと有しかは伊木清兵衛とそ名乗ける、輝政の
代に伊木豊後と云ハ是也、扱猿はみの城ハ飛驒川に付て
高山也、また大ほく山とて猿はみのうへに茂りたるかさ有、是
へハ丹羽五郎左衛門先登して則御人数を上られ水の手を取切、
上下より取詰させ給へは、頓而降参して退散す

堂洞城信輝一番に乗取事

猿はみの城より三里奥加治田城主佐藤紀伊守・同右近右
衛門父子御味方として居城なり、然処に加治田へ差向ひ二十
五町隔て堂洞と云処に長井隼人正取出を構て岸勘
解由左衛門を扣へ、多治見一党をくハへ置けり、隼人は世に





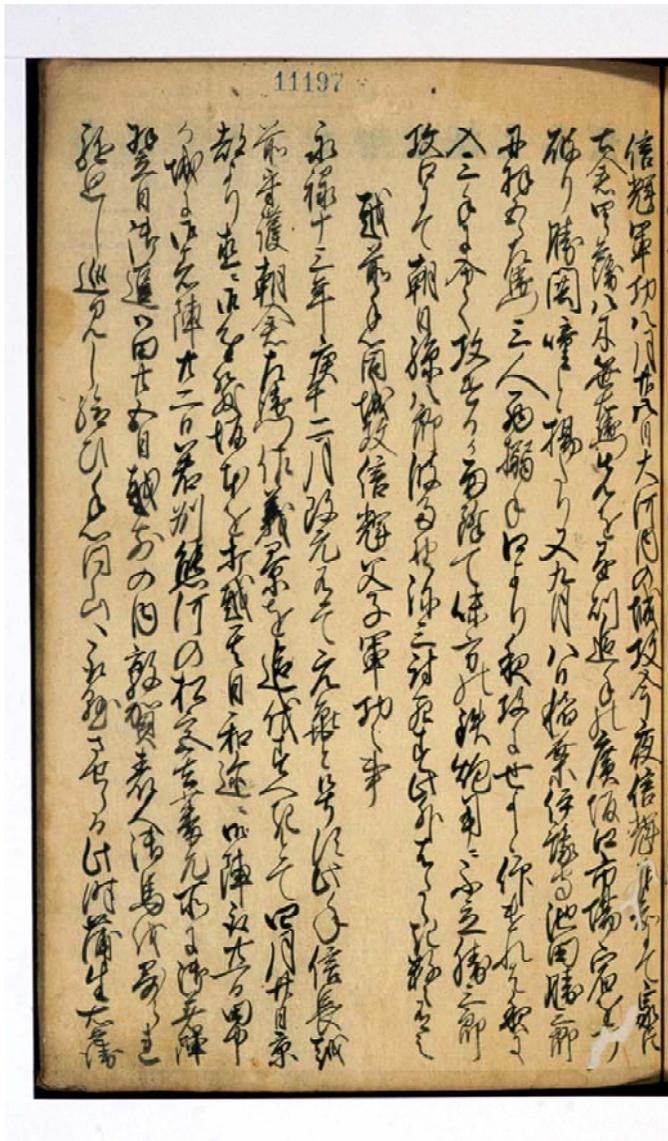
かくれなき鍛冶の集たる関と云所に居城す、関より加治田へ五十町隔たり、佐藤紀伊守難儀に及よしなれば、九月廿八日信長ハ御馬を寄せられ堂洞を取囲せらる、堂洞ハ谷にて東一方ハ尾続山也、其日ハ風強く吹ければ塀際へ詰よせなは、明松を可投入と下知し給ふ、諸手我もくくと詰寄る中に池田勝三郎信輝勇み励まして乗込ける、信輝家臣竹村喜左衛門明松を投入一番に乗れば、後陣推続て乗入突立切立けるに、城兵も汗水に成て防けれとも、爰かしこより焼立ければ不怵して本丸へつほみける、太田又四郎高き家の上へ登り空矢もなく射付たり、信長高き所より見給ひ、きさしに見事を仕と三度迄宣ひ、後ハ御使を以て称せらる、午の刻より酉の刻まで息をもくれず攻けるか、河尻与兵衛本丸へ乗入れハ、丹羽五郎左衛門続て乗入けるほとに、岸勘解由左衛門を始と

して多治見一党都合五六百打取けり、長井隼人正ハ後巻として
 山下まで馳来りけれ共、信長兼而其手当の備し給ふゆへ後
 攻もあたはされは、眼前に味方を打とられ口惜かるへき事
 とも也、扱信長ハ堂洞より加治田へ御馬を入らる、佐藤父子悦
 事限なし、竹村喜左衛門御前へ召て称せらる、翌十九日山下の
 町にて首実検し給ひ御帰陣の時、関口より長井隼人正
 井の口より斎藤龍興都合三千余にて馳出たり、信長の人数
 ハ千にハ不可過坎、手おひ死人多数あり、殊に引取際且又広
 野なれば大事の退口なり、信長ハ手負足弱悉くのかしめ
 て足輕を出すやうに馬共乗廻して軽々と引取給ひぬ、敵
 方本意なく思ひしとなり

一義昭御帰洛ニ付而佐々木攻に信輝軍務有之
 一永祿十一年伊勢国司北畠權中納言具教卿を攻らる、此時

して多治見一党都合五六百打取けり、長井隼人正ハ後巻として
 山下まで馳来りけれ共、信長兼而其手当の備し給ふゆへ後
 攻もあたはされは、眼前に味方を打とられ口惜かるへき事
 とも也、扱信長ハ堂洞より加治田へ御馬を入らる、佐藤父子悦
 事限なし、竹村喜左衛門御前へ召て称せらる、翌十九日山下の
 町にて首実検し給ひ御帰陣の時、関口より長井隼人正
 井の口より斎藤龍興都合三千余にて馳出たり、信長の人数
 ハ千にハ不可過坎、手おひ死人多数あり、殊に引取際且又広
 野なれば大事の退口なり、信長ハ手負足弱悉くのかしめ
 て足輕を出すやうに馬共乗廻して軽々と引取給ひぬ、敵
 方本意なく思ひしとなり

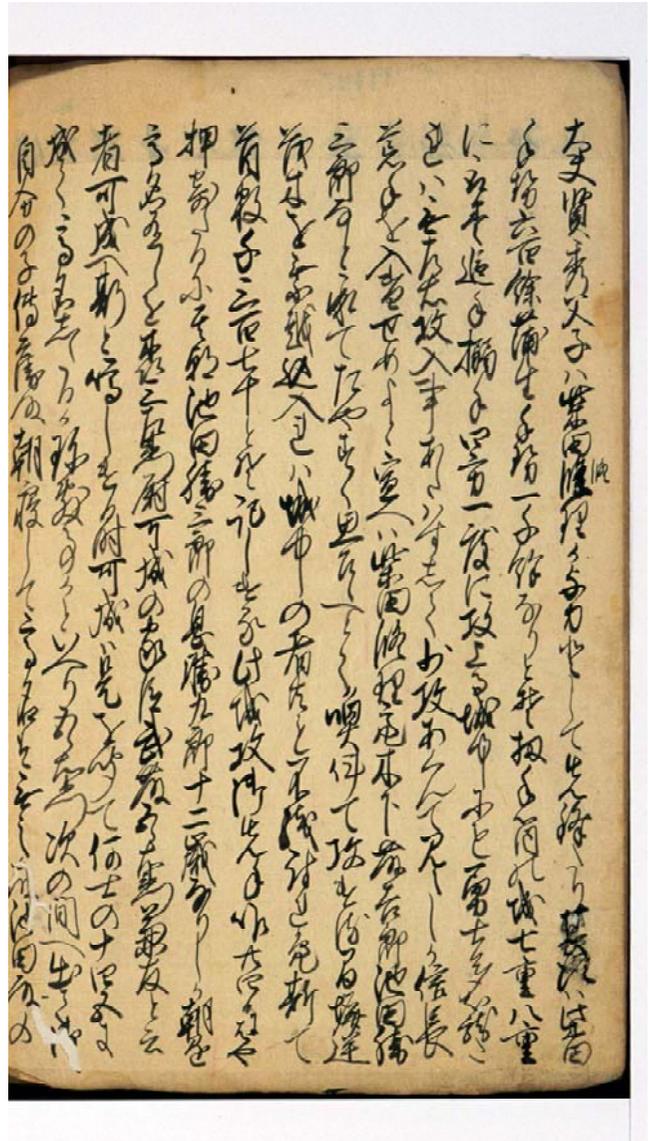
一義昭御帰洛ニ付而佐々木攻に信輝軍務有之
 一永祿十一年伊勢国司北畠權中納言具教卿を攻らる、此時



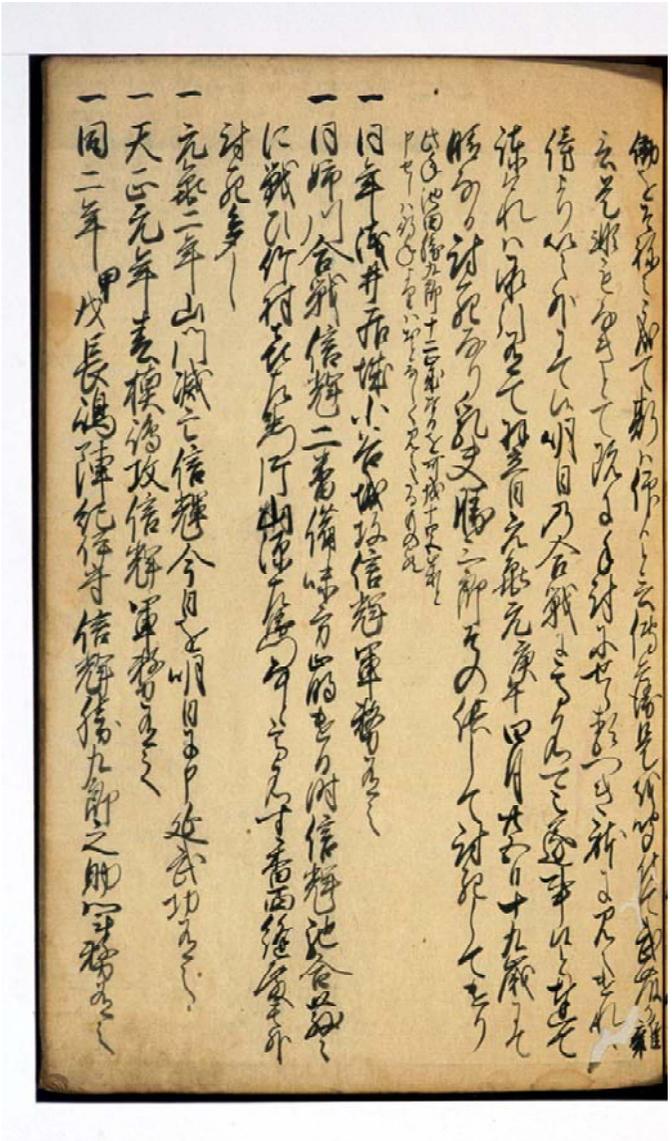
信輝軍功八月廿八日大河内の城攻、今夜信輝下知にて家臣
土倉四郎兵衛・八木笹右衛門先を懸、則追手の広坂郷市場宿を打
破り勝鬨と揚たり、又九月八日稲葉伊豫守・池田勝三郎・
丹羽五郎左衛門三人西搦山口より夜攻にせよと仰ければ、夜に
入三手に分て攻めるか雨降て味方の鉄炮用ニ不立、勝三郎
攻口にて朝日孫八郎・波多野弥三討死す、此外はたらき数々有之

越前手筒城攻信輝父子軍功之事
永祿十三年庚午二月改元有て元龜と号す、此年信長越
前守護朝倉佐衛門佐義景を追伐すへきとて四月廿日京
都より直ニ御進発、坂本を打越其日和迹^{わらひ}ニ御陣取、廿一日田中
か城に御着陣、廿二日若州熊河の松宮玄蕃允所に御着陣
翌日御逗留、廿五日越前の内敦賀表へ御馬を寄られ
駈廻し巡見し給ひ手筒山へ取懸させらる、此時蒲生右兵衛

信輝軍功八月廿八日大河内の城攻、今夜信輝下知にて家臣
土倉四郎兵衛・八木笹右衛門先を懸、則追手の広坂郷市場宿を打
破り勝鬨と揚たり、又九月八日稲葉伊豫守・池田勝三郎・
丹羽五郎左衛門三人西搦山口より夜攻にせよと仰ければ、夜に
入三手に分て攻めるか雨降て味方の鉄炮用ニ不立、勝三郎
攻口にて朝日孫八郎・波多野弥三討死す、此外はたらき数々有之



大夫賢秀父子ハ、柴田修理か与力として先鋒たり、其次ハ柴田手勢六百余、蒲生手勢一千余なりとそ、扱手筒の城七重八重に取巻、追手搦手四方一度に攻上る、城中にも勇士多く籠たれハ、無左右攻入事あたハすして、少攻あくんで見へしか、信長荒手を入替せめよと宣へハ、柴田修理亮・木下藤吉郎・池田勝三郎など承て、たやすく思召候へとて喚叫て攻ける間、堀・逆茂木を乗越込入れハ、城中の者共も不残討れ^{けり}、斯て首数千三百七十とそ記しける、此城攻御先手昨廿四日にはや押寄たるに、其朝池田勝三郎の息勝九郎十二歳なりしか、朝懸高名有しを森三左衛門尉可成の家臣武藤五郎右衛門兼友と云者、可成へ斯と噂しける時可成ハ是を聞て、何士の十四五に成て高名したるか珍敷事かといへり、五郎右衛門次の間へ出らる自分の子伝兵衛殿、朝寝して高名は無之故池田殿の

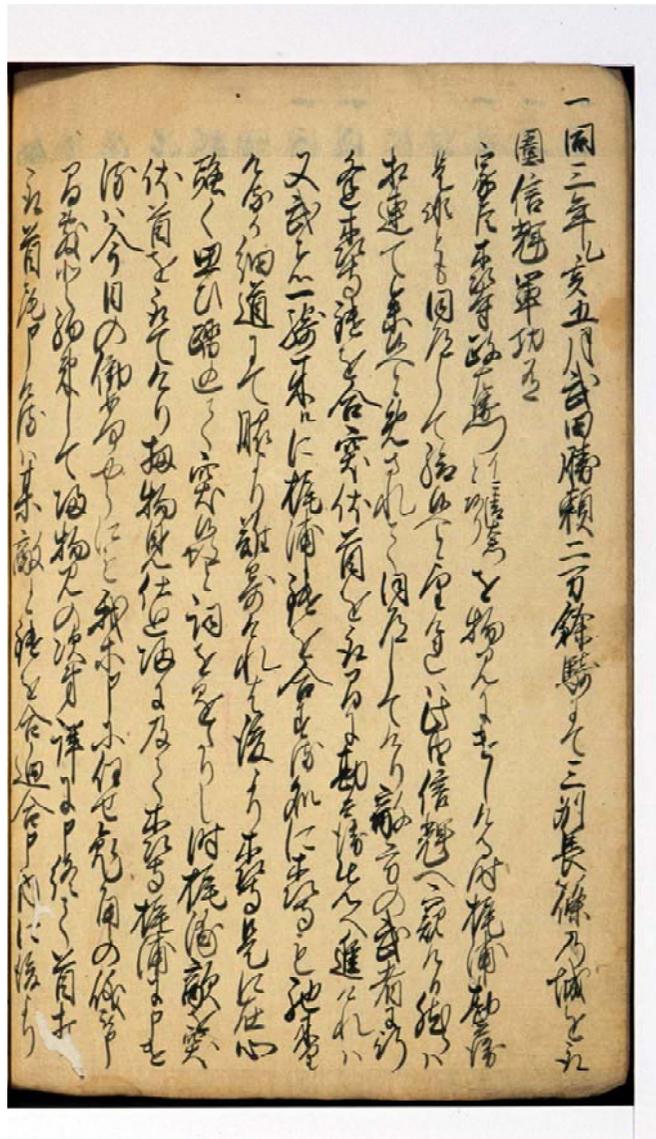


働と云はれし如く斯く仰候と云はれし如く是れは武藤公経
 公経は池田勝九郎十二歳なるを可成十四五歳と
 申せしハ行年よりハおとなしく見へたるもの歟
 一 元龜二年山門滅亡信輝今日と明日と申す武藤公経
 一 天正元年春榎嶋攻、信輝軍務有之
 一 同二年甲戌長嶋陣、紀伊守信輝・勝九郎之助軍務有之

働をそねミ被成て斯ハ仰候と云、伝兵衛是を聞付て、武藤公経
 言是非もなきとて、既に手討にせらるへき躰に見へけれ□、
 傍より以之外にて候、明日の合戦に高名可被遂事候と、達て
 諫けれハ承引有て、翌日元龜元年四月廿五日十九歳にて
 晴なる討死なり、乳夫勝三郎その供して討死してけり

此年池田勝九郎十二歳なるを可成十四五歳と
 申せしハ行年よりハおとなしく見へたるもの歟

- 一 同年浅井居城小谷城攻信輝軍務有之
- 一 同姉川合戦、信輝二番備味方崩ける時、信輝馳合散々
 に戦ひ、竹村喜左衛門・片山源左衛門など高名す、香西縫殿其外
 討死多し
- 一 元龜二年山門滅亡、信輝今日を明日に申延武功有之
- 一 天正元年春榎嶋攻、信輝軍務有之
- 一 同二年甲戌長嶋陣、紀伊守信輝・勝九郎之助軍務有之

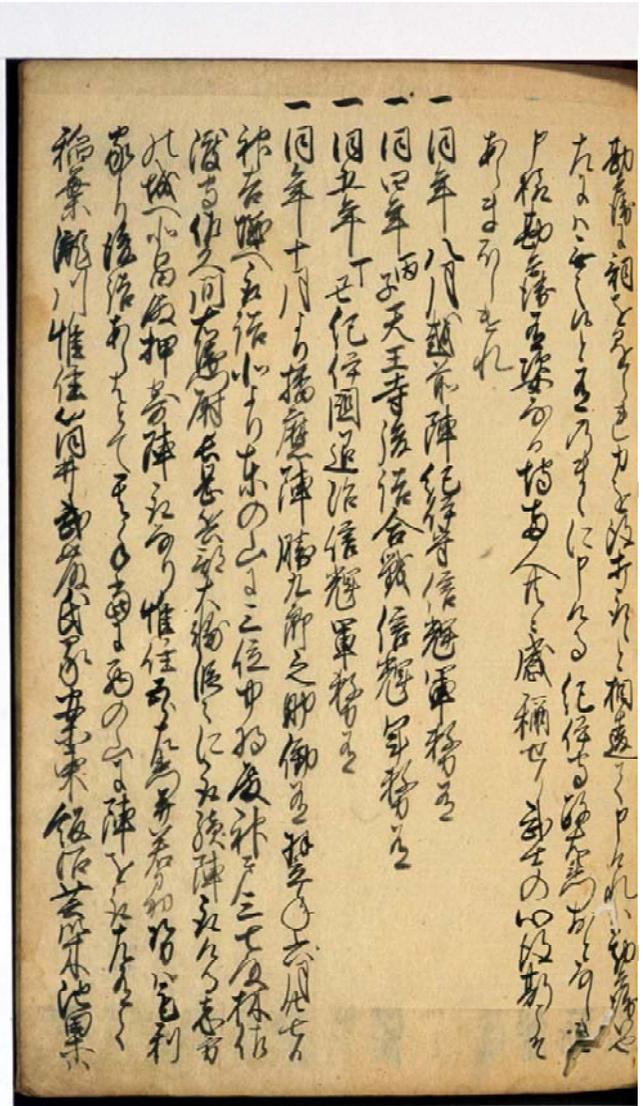


一國二年乙亥五月武田勝頼二万餘騎とて三州長篠の城を圍
圍信輝軍功有

家臣森寺政右衛門イニ清右衛門とありを物見遣しける時、梶浦勘兵衛
是非とも同道して給候へと望けれハ、此由信輝へ窺ける、然らハ
相連て参候へと免されて同道してけり、敵方の武者に行
逢、森守鎧を合突伏首を取間に、勘兵衛先へ進けれハ
又武者一騎来ルに、梶浦鎧を合する処に森寺も馳来り
けるか、細道にて脇より難寄けれハ、後より森寺是に在、心
強く思ひ踏込て突候得と詞を懸たりし時、梶浦敵を突
伏首を取てけり、扱物見仕廻帰に及て森寺、梶浦に申け
るハ、今日の働如何やうにも我等申に任せ、兎角の儀被申
間敷と約束して帰、物見の次第詳に申終て首打
取首尾申けるハ、某敵と鎧を合迫合申内に後より

一同三年乙亥五月武田勝頼、二万余騎にて三州長篠の城を取
圍、信輝軍功有

家臣森寺政右衛門イニ清右衛門とありを物見遣しける時、梶浦勘兵衛
是非とも同道して給候へと望けれハ、此由信輝へ窺ける、然らハ
相連て参候へと免されて同道してけり、敵方の武者に行
逢、森守鎧を合突伏首を取間に、勘兵衛先へ進けれハ
又武者一騎来ルに、梶浦鎧を合する処に森寺も馳来り
けるか、細道にて脇より難寄けれハ、後より森寺是に在、心
強く思ひ踏込て突候得と詞を懸たりし時、梶浦敵を突
伏首を取てけり、扱物見仕廻帰に及て森寺、梶浦に申け
るハ、今日の働如何やうにも我等申に任せ、兎角の儀被申
間敷と約束して帰、物見の次第詳に申終て首打
取首尾申けるハ、某敵と鎧を合迫合申内に後より



勘兵衛と相違を言ふに力を得取候と相違て申され、勘兵衛は
 左にハ無之候と有のまゝに申ける、紀伊守政右衛門おとしき
 申様、勘兵衛有姿なる埒、兩人共ニ感称せり、武士の心得斯こそ
 あらまほしけれ

一 同年八月越前陣紀伊守信輝軍務有

一 同四年丙子天王寺後詰合戦信輝軍務有

一 同五年丁丑紀伊國退治信輝軍務有

一 同年十月より播磨陣勝九郎之助働を相違て申され、勘兵衛は
 神吉城へ取詰、北より東の山に三位中将殿・神戸三七殿・林佐
 渡守・佐久間右衛門尉・長岡兵部大輔段々に取続陣取ける、志方
 の城へ北畠殿押寄陣取なり、惟住五郎左衛門并若州勢ハ、毛利
 家より後詰あらはとて、其手当に西の山に陣を取、左有て
 稲葉・瀧川・惟住・筒井・武藤・氏家・案東・飯沼・荒木・池田等ハ

勘兵衛に詞を懸られ、力を得取候と相違て申されハ、勘兵衛いや

左にハ無之候と有のまゝに申ける、紀伊守政右衛門おとしき

申様、勘兵衛有姿なる埒、兩人共ニ感称せり、武士の心得斯こそ

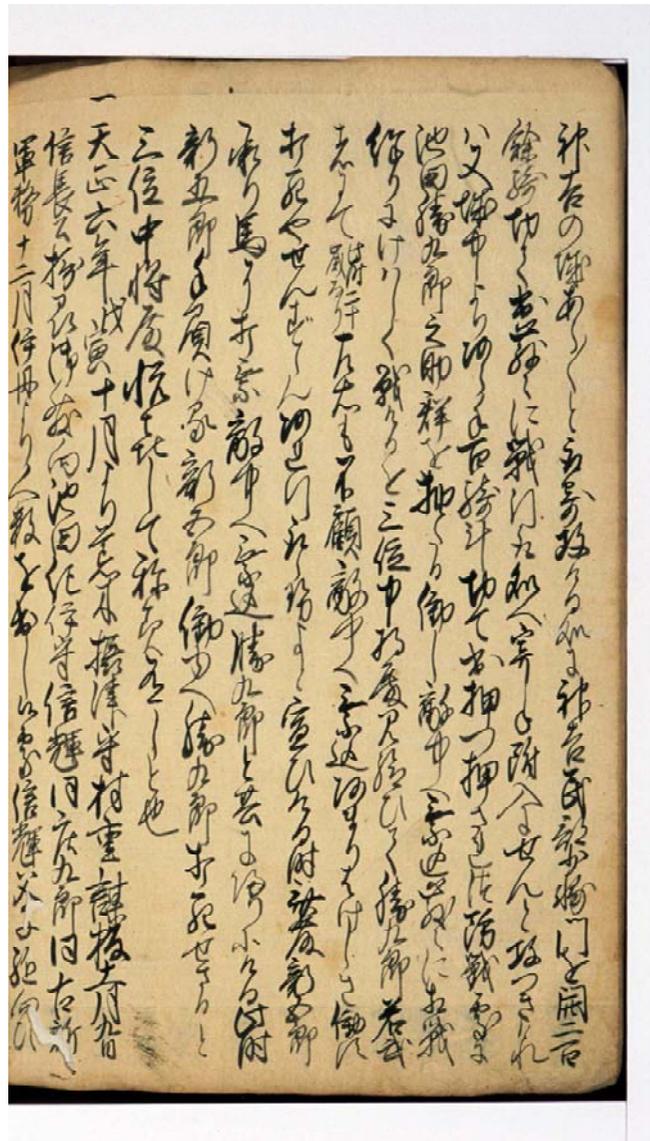
あらまほしけれ

一 同年八月越前陣紀伊守信輝軍務有

一 同四年丙子天王寺後詰合戦信輝軍務有

一 同五年丁丑紀伊國退治信輝軍務有

一 同年十月より播磨陣、勝九郎之助働有、翌年六月廿七日
 神吉城へ取詰、北より東の山に三位中将殿・神戸三七殿・林佐
 渡守・佐久間右衛門尉・長岡兵部大輔段々に取続陣取ける、志方
 の城へ北畠殿押寄陣取なり、惟住五郎左衛門并若州勢ハ、毛利
 家より後詰あらはとて、其手当に西の山に陣を取、左有て
 稲葉・瀧川・惟住・筒井・武藤・氏家・案東・飯沼・荒木・池田等ハ



神吉の城あらくと取寄攻ける処に、神吉民部少輔門を開二百
余騎切て出、散々に戦引取処へ、寄手附入にせんと攻つきけれ
ハ、又城中よりあら手百余騎計切て出、押つ押れつ防戦処に、
池田勝九郎之助群を抽たる働し、敵中へ乗込散々に相戦、
余りにけハしく戦けるを、三位中将殿見給ひて、勝九郎若武
者にて此時二十左右も不顧敵中へ乗込、あまりはけしき働す
打死やせんずらん、あれ引取らせよと宣ひける時、斎藤新五郎
承り馬に打乗り、敵中へ乗込勝九郎と共に帰りにける、此時
新五郎手負ける、新五郎働ゆへ勝九郎打死せさると
三位中将殿悦喜して称美有しと也

一 天正六年 戊寅十月より荒木撰津守村重謀板、十一月九日
信長公撰州御発向、池田紀伊守信輝・同庄九郎・同古新
軍務十二月伊丹より人数を出し候処、信輝父子駈向ひ

伊丹・倉橋の両鴻池と云ふに相戦伊丹勢と城(池)連なり家臣
多くあり伊丹羽山城強き佛(伊)紀伊守の感格(格)なり
初(初)十日鴨塚(野)村丹後大将(大)や(と)て(戦)新(新)賀(賀)の(山)
大加(大)里(里)拘(拘)たり(と)紀伊守(守)倉橋(橋)より押寄(寄)悉(悉)く城(城)敷(敷)を(守)府(府)
家(家)士(士)香(香)西(西)又(又)次(次)郎(郎)能(能)働(働)く(と)員(員)倉(倉)橋(橋)へ(向)り(て)死(死)す

花熊城攻池田父子軍功之事

天正八年庚辰二月廿七日信長公山崎(山)御(御)動(動)座(座)有(有)爰(爰)に
て津田七兵衛(津)伯耆守(伯)惟住(惟)五郎(五)左衛門(左)三人(三)花熊(花)の城(城)
へ指(指)向(向)て地(地)形(形)を(見)計(計)要(要)害(害)と(推)池(池)田(田)紀(紀)伊(伊)守(守)父(父)子(子)二(二)
人(人)倉(倉)橋(橋)父子(子)二(二)人(人)又(又)年(年)花(花)去(去)程(程)小(小)信(信)輝(輝)を(紀)伊(伊)守(守)の(小)
小(小)浜(浜)筋(筋)を(守)り(と)云(云)山(山)を(要)害(害)す(と)子(子)息(息)古(古)新(新)と(大)子(子)新(新)
陣(陣)なり(と)同(同)の(森)の(向)城(城)は(嫡)子(子)勝(勝)九(九)郎(郎)之(之)助(助)花(花)熊(熊)の(小)
馬(馬)合(合)別(別)古(古)山(山)の(要)害(害)は(家)臣(臣)伊(伊)木(木)清(清)兵(兵)衛(衛)・森(森)寺(寺)清(清)右(右)衛(衛)門(門)

伊丹と倉橋の間鴻池と云所にて相戦、伊丹勢を城へ追込たり、爰にて家臣丹羽山城強き働して紀伊守の感称に預りける

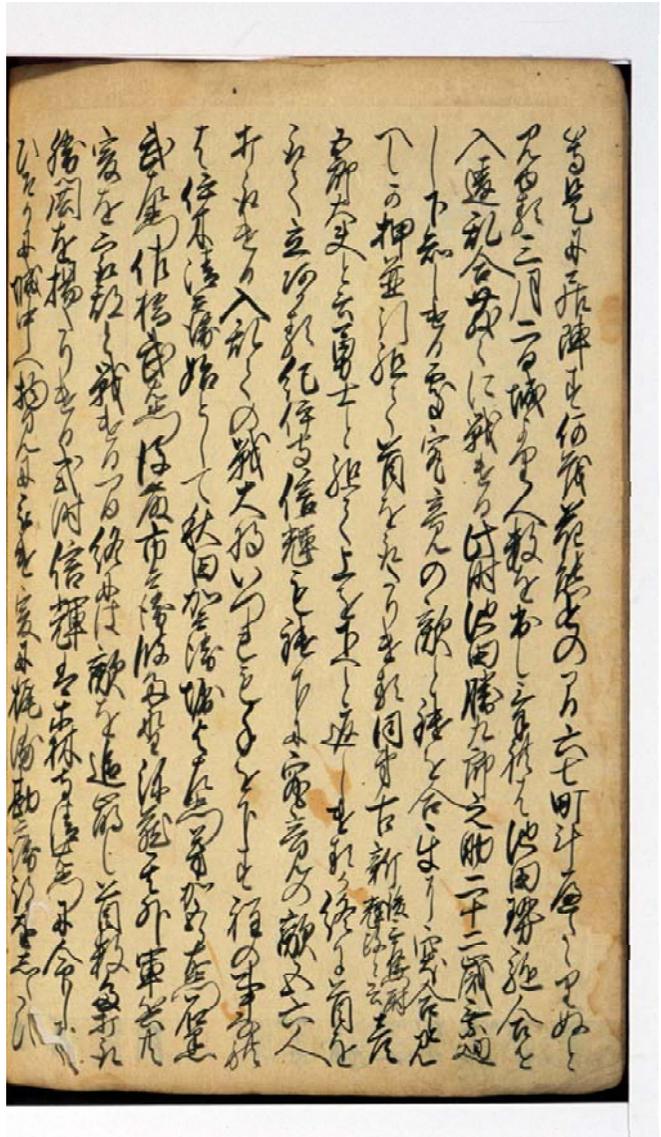
翌年十月鴨塚に野村丹後大将として荒木雜賀の者

共加り拘たるを、紀伊守倉橋より押寄悉く攻殺ける、此時

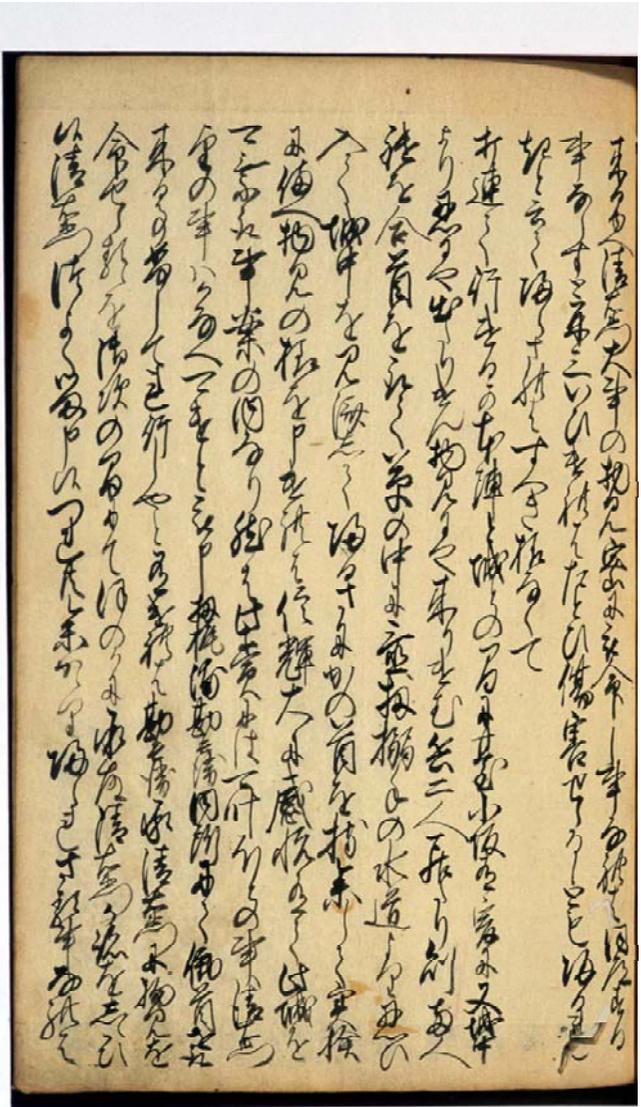
家士香西又次郎能働て手負、倉橋へ歸りて死す

花熊城攻池田父子軍功之事

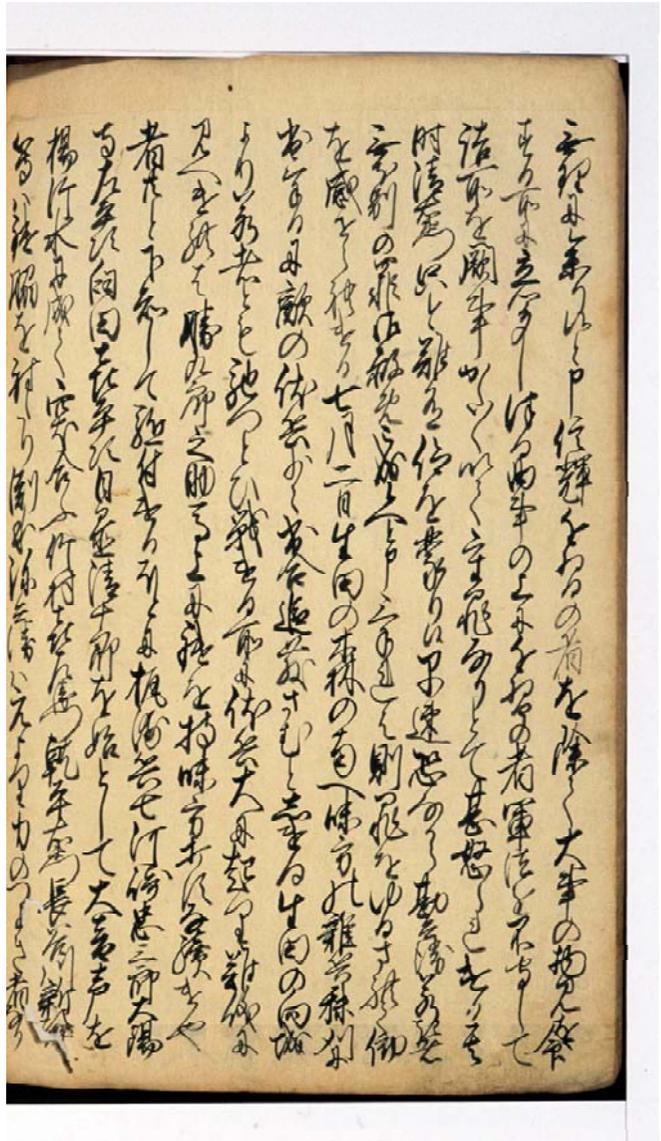
天正八年庚辰二月廿七日、信長公山崎へ御動座有、爰にて津田七兵衛殿・塩川伯耆守・惟住五郎左衛門三人花熊の城へ指向、可然地形を見計要害を拵、池田紀伊守父子三人入置、帰陣すへきよし被命訖、去程に信輝は花熊の北に諏訪か峯と云山を要害にして、子息古新と共に居陣なり、生田の森の向城には嫡子勝九郎之助、花熊の西金剛寺山の要害には家臣伊木清兵衛・森寺清右衛門



等是に居陣す、何も花熊との間六七町計へたゞりぬと見ゆる、三月二日城より人数を出しければ、池田勢駈合せ入違乱合散々に戦ける、此時池田勝九郎之助二十二歳、乗廻し下知しける処、究竟の敵と鏑を合互に突合と見へしか、押並引組て首を取たりける、同弟古新後三左衛門尉 輝政と云彦五郎大夫と云勇士と組て上を下へと返しけるか、終に首を取て立あかる、紀伊守信輝も鏑下に究竟の敵五六人打取ける、入乱ての戦大将いづれも手を下す程の事なれは、伊木清兵衛始として秋田加兵衛・堀与左衛門・芳加五郎右衛門・石黒武左衛門・佐橋武右衛門・後藤市兵衛・波多野弥蔵・其外軍兵共爰を最期と戦ける間、終には敵を追崩し首数多打取勝鬨を揚たりける、或時信輝は森寺清右衛門に命してひそかに城中へ物見に被遣、爰に梶浦勘兵衛跡をしたひ



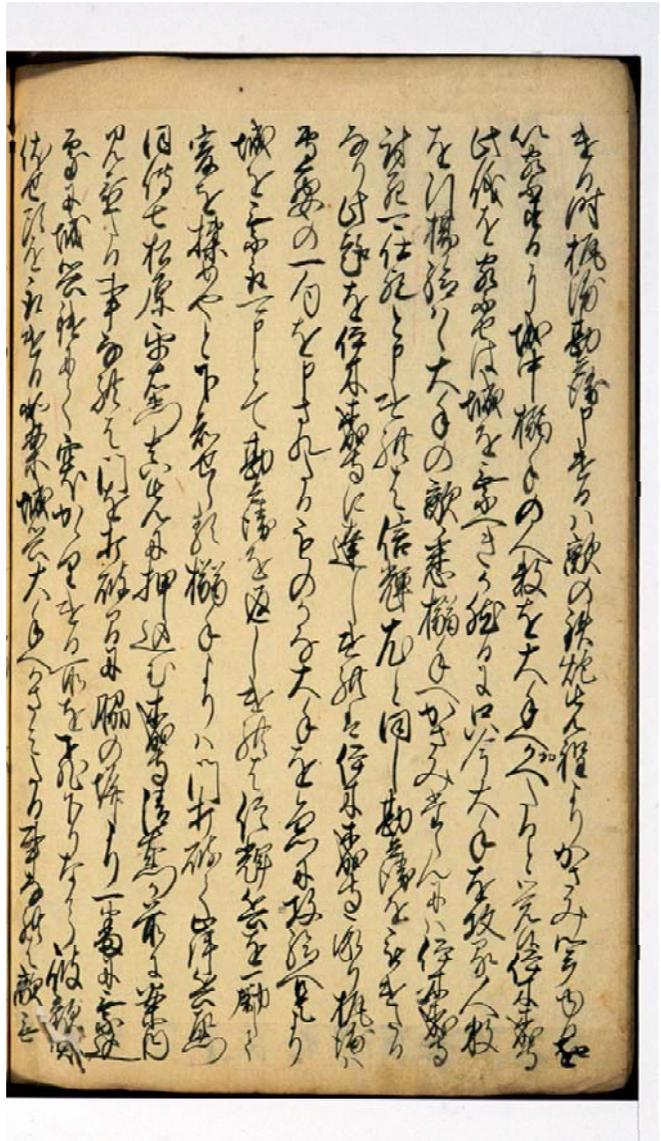
来るゆへ、清右衛門大事の物見密に被命し事なれば同道する
事ならしすと再三いひければ、たとひ傷害せらるゝとも帰るまし
きと云て帰らされは、すへき様なくて
打連て行けるか、本陣と城との間に台小坂有、爰に又城中
より忍にや出たりけん、物見にや来りけむ兵二人居たり、則兩人
鍵を合首を取て草の中に置、扱搦手の水道より忍ひ
入て城中を見済して帰るさに、かの首を持参して実検
に備へ物見の様を申ければ、信輝大に感悦有て此城を
可乗取事案の内なり、然は此賞には可叶ほと的事ハ、清右衛門
望の事ハかなへ可遣と被申、扱搦浦勘兵衛内所にて働、首を取
来る事如何して連行しやと有ければ、勘兵衛承清右衛門に物見を
命ぜらるを御次の間にてほのかに承故、清右衛門か跡をしたひ
候、清右衛門つよく留申候つれ共、参かゝり帰られさる事なれば、



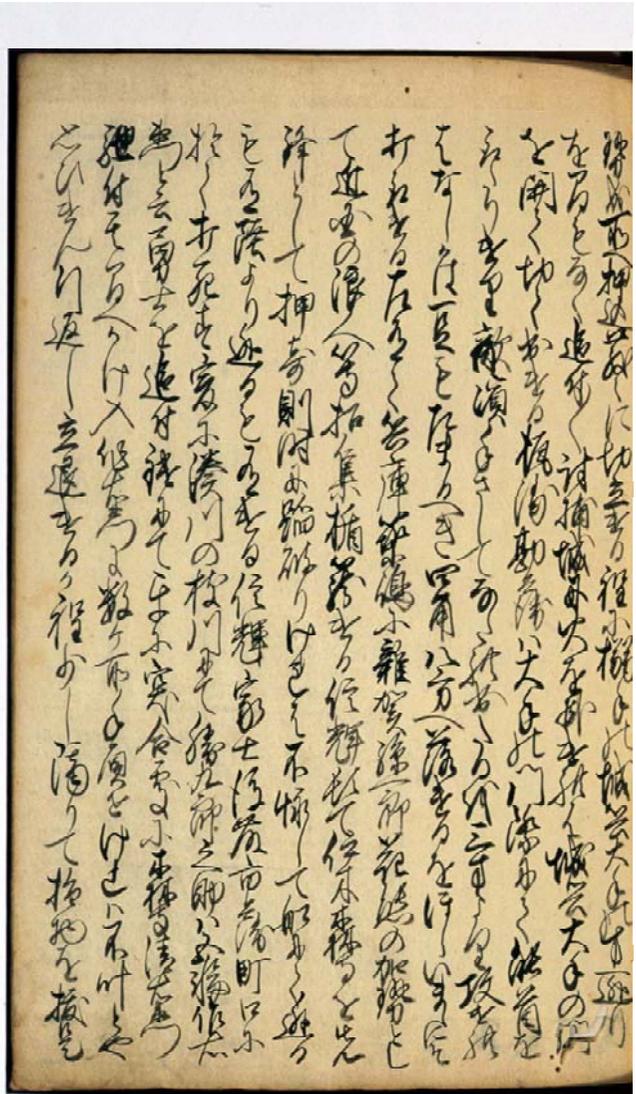
無理に参り候と申、信輝近習の者を除て大事の物見を命
する所に、立聞しつる曲事の上に近習の者軍法を不守して、
詰所を闕事かた／＼以て重罪なりとて甚怒られける、其
時清右衛門、只今難有仰を蒙り候、早速恐ながら勘兵衛若き者
無分別の罪御赦免被成候へと申ければ、則罪をゆるされて働
を感せられける、七月二日生田の森の南へ味方の雑兵秣刈に
出けるに、敵の伏兵少々出合追散さむとしける、生田の森の向城
より若者とも馳つとひ戦ける所に、伏兵大に起り難儀に
見へければ、勝九郎之助馬上に鎧を持、味方打すな続けや
者共と下知して駆付けけるほとに、梶浦兵七・河崎忠三郎・大陽
寺佐平次・白田喜平次・日置清十郎を始として、大音声を
揚汗水に成て突合ふ、竹村喜左衛門・乾平右衛門・長谷川新次郎
等ハ鎧脇を射たり、瀧本弥兵衛ハ元より力のつよき者なり

を獲し守角をうり二百里の柱を以て打て廻る、其外太刀打
するも有、組て勝負するも有、城方難儀に見へければ城中
よりも馳付たり、敵味方も爰を専途と戦ける、かゝりし時
金剛寺山に有し伊木清兵衛・森寺清右衛門ハ、大手合戦数刻
なり、いさ搦手より乗らん迎搦手へ押寄れば、城中より野
口与一兵衛搦手の門外半町計踏出して招たり、此野口か父
元来花熊の城主たりしか、以前西国の兵船と船軍して
打死したり、其跡へ荒木志摩守此城主として、野口与一兵衛ハ
志摩守か加勢に籠城したるなり、伊木・森寺・何かハ少もため
らふへき、則時に攻付切て追立、野口をハ森寺か家士打取
ける、其俣城際へ押詰攻ける所に、梶浦勘兵衛ハ信輝の使と
して来る、搦大手の戦数刻に及び、敵味方手負・死人
数をしらす軍勢疲つる間、人数引揚へきよし信輝被申

これハ四寸角はかり二間程の柱を以て打て廻る、其外太刀打
するも有、組て勝負するも有、城方難儀に見へければ城中
よりも馳付たり、敵味方も爰を専途と戦ける、かゝりし時
金剛寺山に有し伊木清兵衛・森寺清右衛門ハ、大手合戦数刻
なり、いさ搦手より乗らん迎搦手へ押寄れば、城中より野
口与一兵衛搦手の門外半町計踏出して招たり、此野口か父
元来花熊の城主たりしか、以前西国の兵船と船軍して
打死したり、其跡へ荒木志摩守此城主として、野口与一兵衛ハ
志摩守か加勢に籠城したるなり、伊木・森寺・何かハ少もため
らふへき、則時に攻付切て追立、野口をハ森寺か家士打取
ける、其俣城際へ押詰攻ける所に、梶浦勘兵衛ハ信輝の使と
して来る、搦大手の戦数刻に及び、敵味方手負・死人
数をしらす軍勢疲つる間、人数引揚へきよし信輝被申



ける時、梶浦勘兵衛申けるハ、敵の鉄炮先程よりかさみ聞ゆるを以、察するに城中搦手の人数を大手へかへたると覚候、伊木・森寺此儀を察せは城を乗へきか、然るに只今大手を攻る人数を引揚給ハ、大手の敵悉搦手へかさみたらんにハ伊木・森寺討死可仕欵と申ければ、信輝尤と同じ勘兵衛を被遣たるなり、此趣を伊木・森寺に達しければ伊木・森寺承り、梶浦ハ專要の一句を申されたるものかな大手を急に攻め給へ、是より城を乗取可申とて勘兵衛を返しければ、信輝兵を励して爰を揉めやと下知せらる、搦手よりハ門打破て岸兵左衛門・同伝七・松原平右衛門、真先に押込む、森寺清右衛門か前に案内見置たる事なれば、門を打破間に脇の塀より一番に乗込処に、城兵鎗にて突かゝりける所を飛下りながら彼敵突伏せ頭を取ける、如案城兵大手へかさミたる事なれば、敵無



勢成所へ押込散々に切立ける程に、搦手の城兵大手の方へ逃行を間もなく追付く討捕城に火を掛ければ、城兵大手の門を開て切て出ける、梶浦勘兵衛ハ大手の門際にて能首を取たりけり、敵浜手さしてなたれ出たるを三方より攻ければ、なしかは一足もたまるへき、四角八方へ落けるをほしいまゝにそ打取ける、左有て兵庫築嶋に雑賀孫一郎、花熊の加勢として近国の浪人等招集楯籠ける、信輝頼て伊木・森寺を先鋒として押寄則時に踏破りければ、不怵して船にて逃るも有、陸より逃るも有ける、信輝家土後藤市兵衛町口に於て打死す、爰に湊川の枝川にて勝九郎之助ハ、五輪作右衛門と云勇士を追付鎧にて互に突合処に、森寺清右衛門駆付其間へかけ入作右衛門に数ヶ所手負けけれハ、不叶とや思ひけん引返し立退けるか、程少し隔りて指物を抜、是

掃除也。表門には弓・鉄炮等の兵具を置、内には資財・雜具を調置て、八月二日に大坂退出す、近年相拘たる端城皆開退たり、扱八月十三日佐久間右衛門尉父子御追放なり、同十八日信長公池田紀伊守信輝に撰州を給り御感状を被下ける御感状に云



撰州大坂本願寺蜂起時遣佐久間右衛門尉對陣數年然敵與戰則未嘗擊手敵一人原田備中守引兵來救與敵大戰斬戮多矣而敵猶驕前後攻來故備中守戰死右衛門尉與敵為一腹乎迷懷於信長乎故追放佐久間池田父子三人於撰州四國西國之間軍戰之時不離其陣敵競來攻則力戰防之未嘗乞加勢高名甚多註進於安土其三男古新年僅十六入敵陣大振武勇真池田紀伊守之血筋也叶信長眼力其手柄無比類也此度攻取花隈

掃除させ、表門には弓・鉄炮等の兵具を置、内には資財・雜具を調置て、八月二日に大坂退出す、近年相拘たる端城皆開退たり、扱八月十三日佐久間右衛門尉父子御追放なり、同十八日信長公池田紀伊守信輝に撰州を給り御感状を被下ける御感状に云

撰州大坂本願寺蜂起時遣佐久間右衛門尉對陣數年然敵與戰則未嘗擊敵一人原田備中守引兵來救與敵大戰斬戮多矣而敵猶驕前後攻來故備中守戰死右衛門尉與敵為一腹乎迷懷於信長乎故追放佐久間池田父子三人於撰州四國西國之間軍戰之時不離其陣敵競來攻則力戰防之未嘗乞加勢高名甚多註進於安土其三男古新年僅十六入敵陣大振武勇真池田紀伊守之血筋也叶信長眼力其手柄無比類也此度攻取花隈

城者池田之力也信長同佐久間車瀬雖無面目就池田父子
三人之働以雲會暫冒其名譽高於山者欽池田勝九郎自
若年逢敵一步不退度々高名誠汲池水之流也信長嫡
子信忠次男信雄三男信孝此池水之心底常言會之畢
夫虎者惜一毛易其身弓取者惜名惜家輕其命身者
一代也名者末代也宜以池田為明鏡為報其地攝州一國內
諸取多宛行池田父子三人者也向後尚可任其飛望此等
之趣可為感狀

天正八年八月十八日 信長御判

池田紀伊守殿

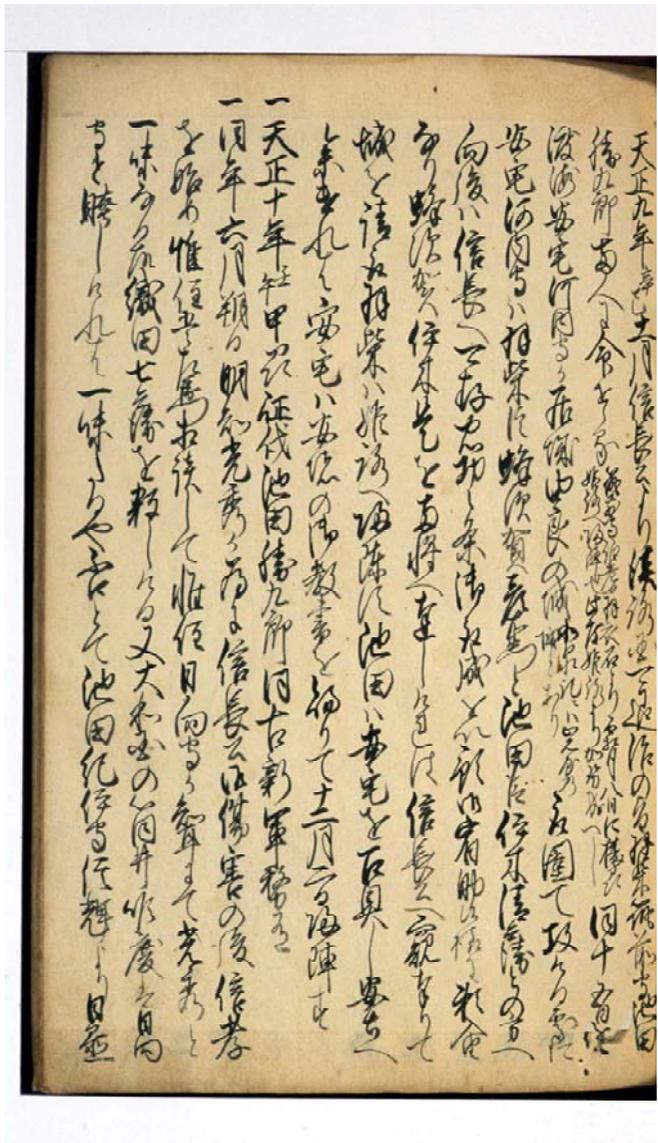
斯て紀伊守信輝ハ大坂に居り、勝九郎之助ハ伊丹の城に居り、
古新輝政ハ尼崎に居れり

城者池田之力也信長 同 佐久間事頗雖無面目就池田父子
三人之働以雪會稽其名譽高於山者欽池田勝九郎自
若年逢敵一步不退度々高名誠汲池水之流也信長嫡
子信忠次男信雄三男信孝此池水之心底常言會之畢
夫虎者惜一毛易其身弓取者惜名惜家輕其命身者
一代也名者末代也宜以池田為明鏡為報其功撰州一国内
諸所多宛行池田父子三人者也向後尚可任其所望此等
之趣可為感狀

天正八年八月十八日 信長御判

池田紀伊守殿

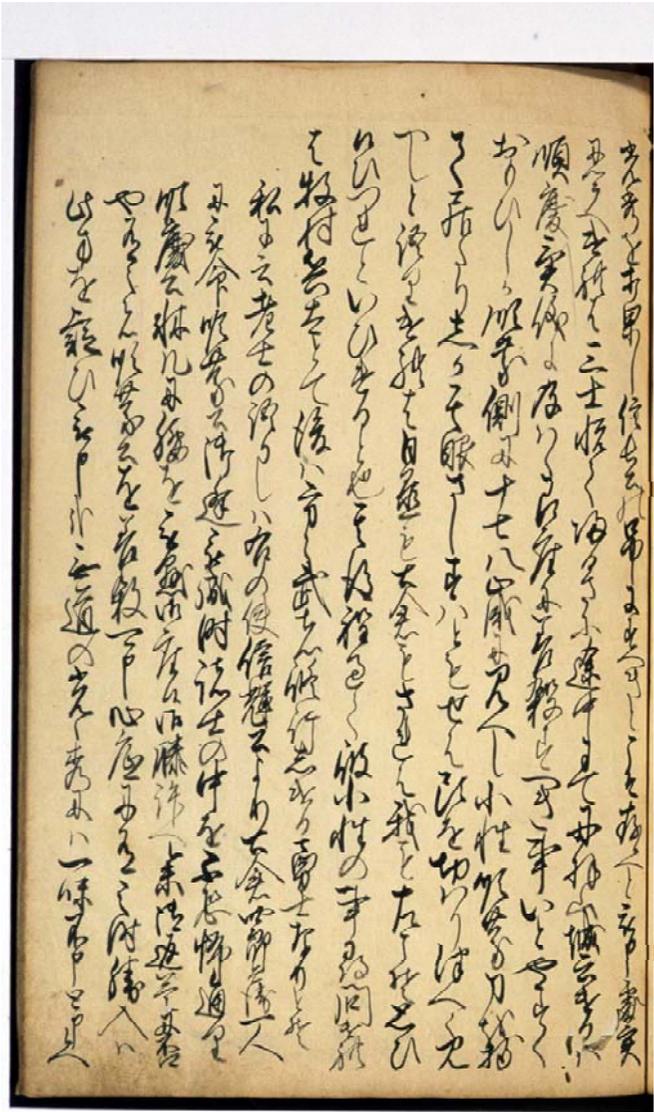
斯て紀伊守信輝ハ大坂に居り、勝九郎之助ハ伊丹の城に居り、
古新輝政ハ尼崎に居れり
淡州退治勝九郎発向之事



天正九年辛巳十一月信長公より淡路国可退治の旨、羽柴筑前守・池田勝九郎兩人に命せらる筑前守由善羽衣石より播磨八日に播州、淡路へ帰陣也此度姫路より加勢成へし、同十五日に渡海、安宅河内守か居城由良の城和泉記二ハ岩屋の城とあり取囲て攻ける処に、安宅河内守ハ羽柴臣蜂須賀彦右衛門と池田臣伊木清兵衛との方へ、向後ハ信長へ可存忠功之条、御取成を以預御宥助候様に頼入由なり、蜂須賀・伊木是を両将へ達しければ、信長公へ窺奉りて城を請取、羽柴ハ姫路へ帰陣す、池田ハ安宅を召具し安土へ参ければ、安宅ハ安堵の御教書を賜りて十二月二日帰陣す

一 天正十年壬午甲州征伐、池田勝九郎・同古新軍務有

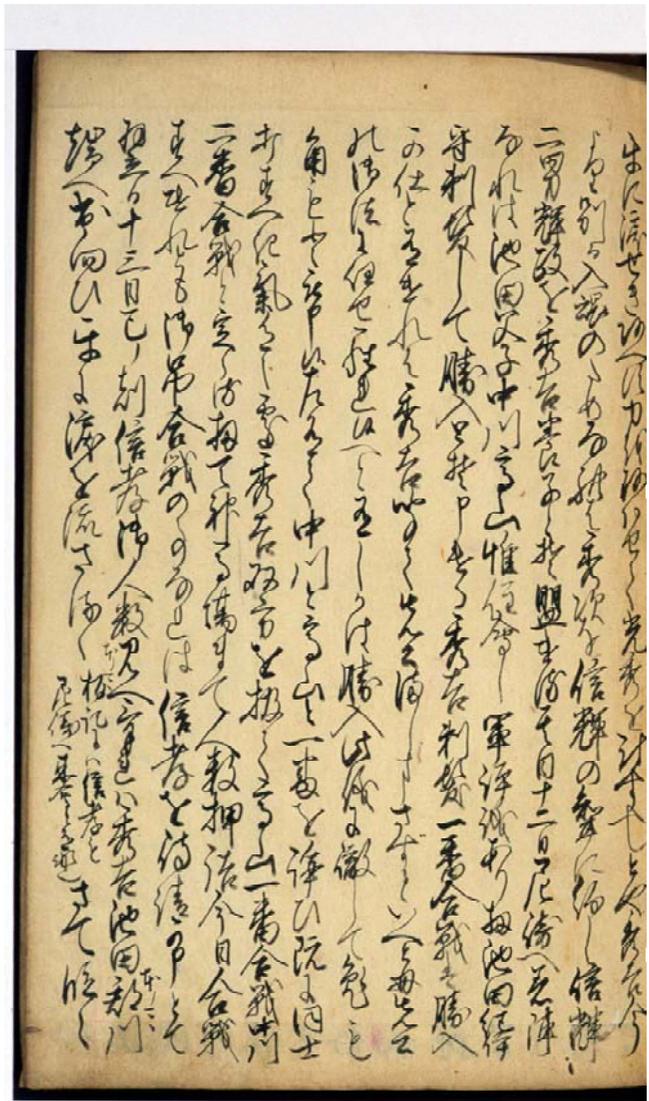
一 同年六月朔日明知光秀（魯）か為に信長公御傷害の後、信孝を始め惟住五郎左衛門相談して、惟任日向守か誓にて光秀と一味なる故、織田七兵衛を殺しける、又大和国の筒井順慶は日向守と睦しければ一味たるや否とて、池田紀伊守信輝より日置



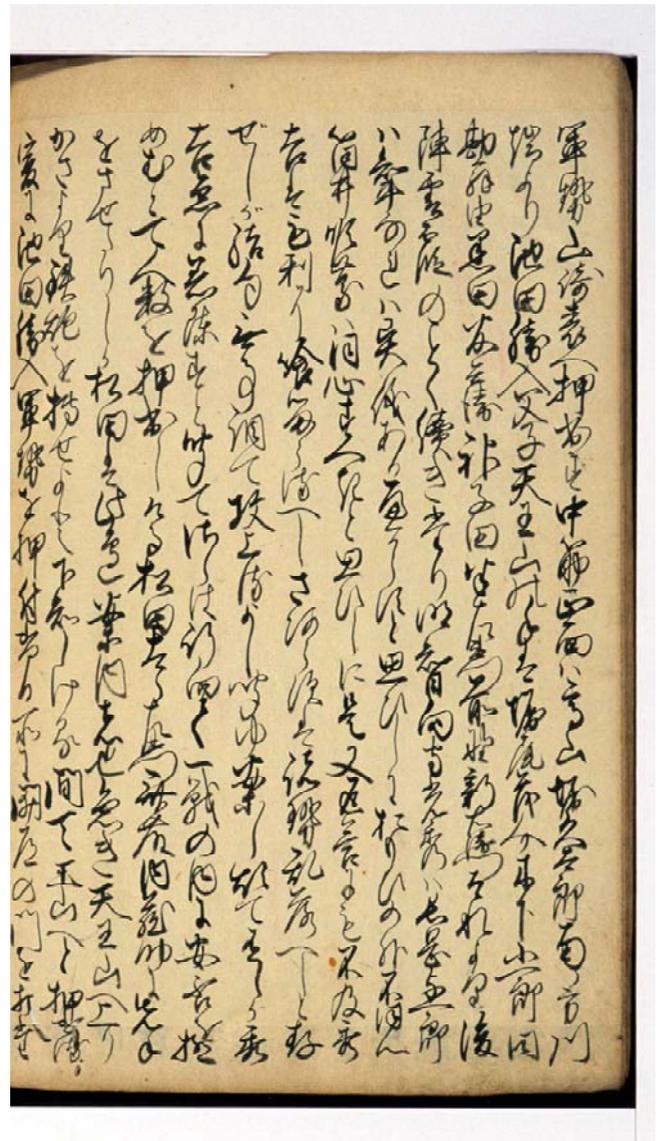
光秀を打果し、信長公の弔にすへきとこそ存候へ、と被申処実
に聞へければ、三士悦て帰るさに途中にて丹羽山城云けるハ、
順慶異儀に及ハ、即座に差殺すへき事いとやすく
おもひしか、順慶側に十七八歳に見へし小性順慶刀を持
て居たりしか、其眼さしすハともせは頭を切ハリつへく見
へしと語りければ、日置も土倉もされは我も左こそ思ひ
候ひつれといひけると也、其後程過て彼小性の事尋問けれ
は、牧村兵太とて後ハ方々武者修行しける勇士なりとそ
私に云老士の語りしハ、右の使信輝公より土倉四郎兵衛一人
に被命順慶公御逢被成時、諸士の中を不恐怖通り、
順慶公牀几に腰を被懸御座候御膝許へ参、御返答に否
や有之は順慶公を差殺可申心底に有之時、勝入ハ
此方を窺ひ被申哉、無道の光秀にハ一味不申と申候へ

此の事、四郎兵衛申けるは、御先手へ明智に一味不申間勝入
 被通候共毛頭讒不申候と直々被仰付を承、勝入へも可
 申間と申時、順慶暫く考以後使番を呼右之段被申
 付口上を聞、四郎兵衛罷帰り、其後四郎兵衛物語に、世
 上に能人は少き物、順慶へ使に行し時順慶内仮名は
 不知異名今弁慶と云者此方側に居る、若順慶へ
 飛懸気色もあらは差殺可申気性面色に見へ、此
 方ひさもとに気を配り居る弁慶に被差殺内に順
 慶を差殺可申と思ふ処、返答否無之無事に帰、外に
 は心遣の侍大身の順慶内にも一人も無之と物語のよし、
 右四郎兵衛名乗ハ貞利姓ハ菅原
 紀伊守信輝兵庫迄出向ひ、先公不慮に傷害の事

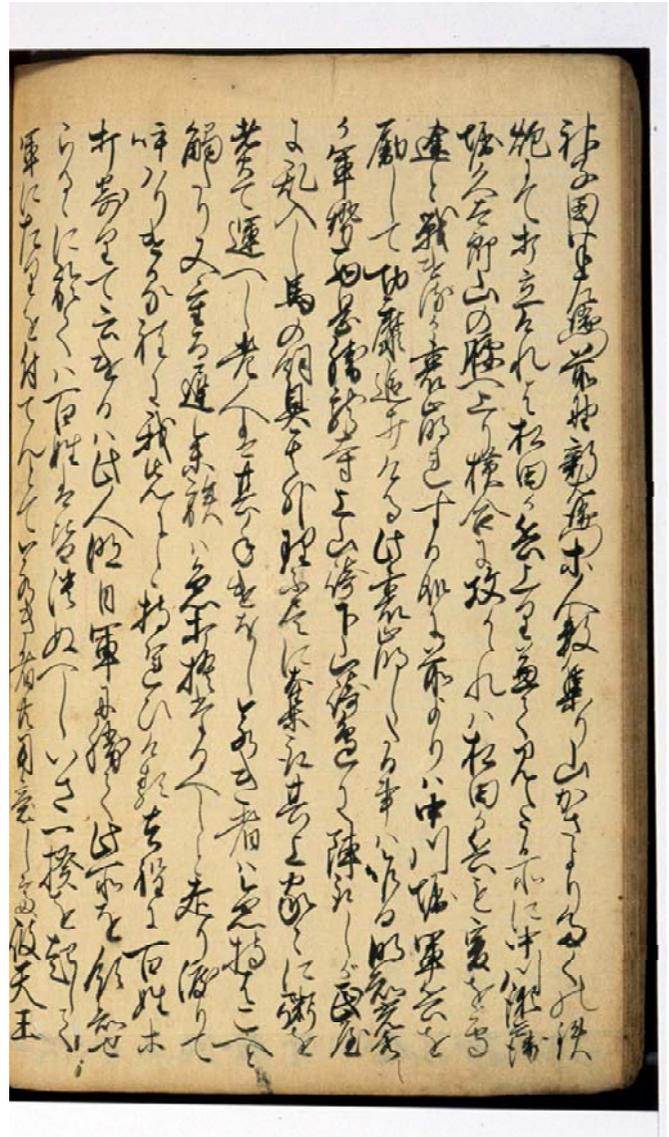
と被申、四郎兵衛申けるは、御先手へ明智に一味不申間勝入
 被通候共毛頭讒不申候と直々被仰付を承、勝入へも可
 申間と申時、順慶暫く考以後使番を呼右之段被申
 付口上を聞、四郎兵衛罷帰り、其後四郎兵衛物語に、世
 上に能人は少き物、順慶へ使に行し時順慶内仮名は
 不知異名今弁慶と云者此方側に居る、若順慶へ
 飛懸気色もあらは差殺可申気性面色に見へ、此
 方ひさもとに気を配り居る弁慶に被差殺内に順
 慶を差殺可申と思ふ処、返答否無之無事に帰、外に
 は心遣の侍大身の順慶内にも一人も無之と物語のよし、
 右四郎兵衛名乗ハ貞利姓ハ菅原
 紀伊守信輝兵庫迄出向ひ、先公不慮に傷害の事



互に涙せきあへず、力をあはせて光秀を討すへしとや、秀吉今
より別而入魂のためなれば、秀次を信輝の誓に約し信輝
二男輝政を秀吉養子とそ盟^{ちか}ける、其日十二日尼崎へ着陣
なれば、池田父子・中川・高山・惟住会し軍議あり、扱池田紀伊
守剃髪して勝入とそ申ける、秀吉剃髪一番合戦は勝入
可仕と有ければ、秀吉聞て先公ましまさずといへとも、先公
の御法に任せられ候へと有しかは、勝入此儀に徹して兎も
角もと被申候、左有て中川と高山と一番を諍ひ既に同士
打すへき氣有し処、秀吉双方を扱て高山一番合戦・中川
二番合戦と定らる、扱天神馬場まで人数押詰今日合戦
すへけれども、御弔合戦の事なれば信孝を待請可申として、
翌日十三日巳ノ刻信孝御人数見へけれハ、秀吉池田郡川^{本ノマ、}
端へ出向ひ互に涙を流される、^{板記にハ信孝も、}さて段々^{本ノマ、}



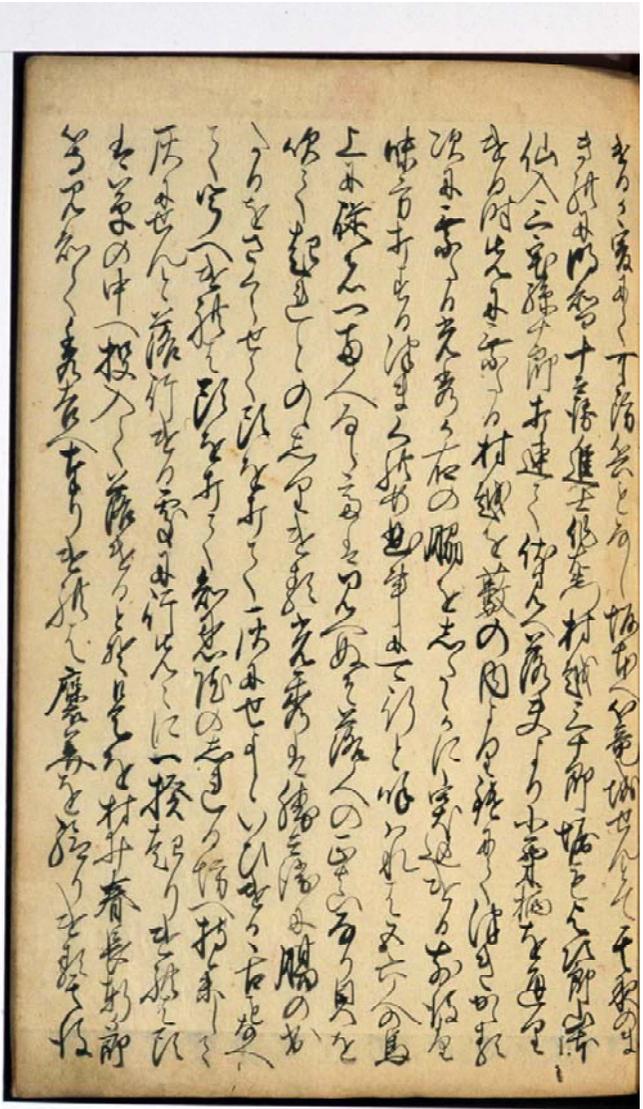
軍勢山崎表へ押出す、中筋正面ハは高山・堀久太郎、南ノ方川
端より池田勝入父子、天王山の手は堀尾茂介・木下小一郎・同
勘解由・黒田官兵衛・神子田半左衛門・前野新右衛門、それより後
陣雲霞のことく続きたり、明知日向守光秀ハ長岡与一郎
ハ聳なれハ異儀あるヘからすと思ひしに、おもひの外不同心、
筒井順慶ハ同心すヘきと思ひしに是又返答にも不及、秀
吉は毛利に喰留らるヘし、さあらずは諸勢乱落ヘしと存
ぜしが、結句無事調て攻上るよし聞ゆ、案し煩て有しが、秀
吉急に着陣すと聞て、さらは行向て一戦の内に安否を極
めむとて人数を押しける、松田太郎左衛門・斎藤内蔵助に先手
をさせたりしか、松田は此辺案内者也、急き天王山ヘ上り、
かさより鉄炮を持せよと下知しける間天王山へと押出ける、
爰に池田勝入軍勢を押しける所に開道の門を打た



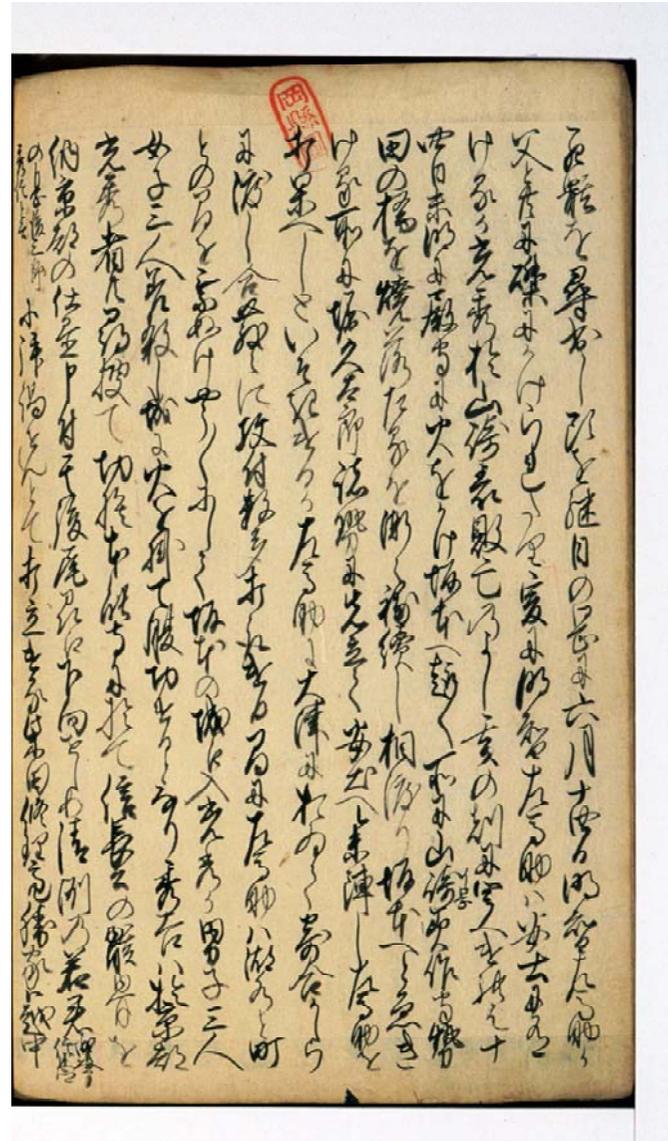
神子田半左衛門・前野新右衛門等人数集り、山かさより多くの鉄
炮にて打立ければ、松田か兵上り兼て見へたる所に、中川瀬兵衛・
堀久太郎、山の腰へ上り横合に攻かゝれハ、松田の兵も爰を専
途と戦けるか、裏崩れする処に、前より中川・堀軍兵を
励して切靡追打ける、此裏崩したる事ハ、昨日明知（當）光秀
か軍勢、西岡・勝龍寺・上山崎・下山崎辺に陣取しが、民屋
に乱入し馬の飼具其外理不尽に奪取、其上家々に粥を
煮て運へし、老人は其手遣をし、若き者ハ急持はこへと
触たり、又重（重）而遅参族ハ急打捨たるへしと走り渡りて
呼ハリける程に、我先にと持運ひける、去程に百姓等
打寄りて云けるハ、此人明日軍に勝て此所を領知せ
らるゝに於てハ、百姓は皆潰ぬへし、いさ一揆を起して
軍にたりを付てんとて、若き者共用意して彼天王

迫合最中に、五六百人うしろより山の根方を取て、紙旗ことく敷
 指拵、鉄炮をならし鬨を揚げれば、松田か勢うしろを見し
 より裏崩しけるとなん、高山右近と斎藤内蔵助と火花をちら
 し喚き呼て戦ける処に、池田父子川手の方より進み敵
 を脇に見る迄押出し、敵の真中へ横合に打て懸る、是を見て
 加藤作内・森隼人・中村孫平次、真先懸て鎧に入る、乱合入違散
 々に戦ふ、勝入家士森寺清右衛門松木笠の馬印にて乗廻し
 下知す、敵方より松木笠の馬印、名・苗氏を承度こそ候へ
 人数使懸引、目を驚たると呼る、岸兵左衛門此時能働す、勝
 入横合に突立れば敵むらくと崩る処に、勝入軍兵も高
 山軍兵も競懸り追詰く、打取ける、爰に小丸山の辺にて
 勝入家士山脇源大夫ハ、丹波のしらの城を預りたる村上
 源之丞と云者くり半月の印にて下知する処に、名乗合

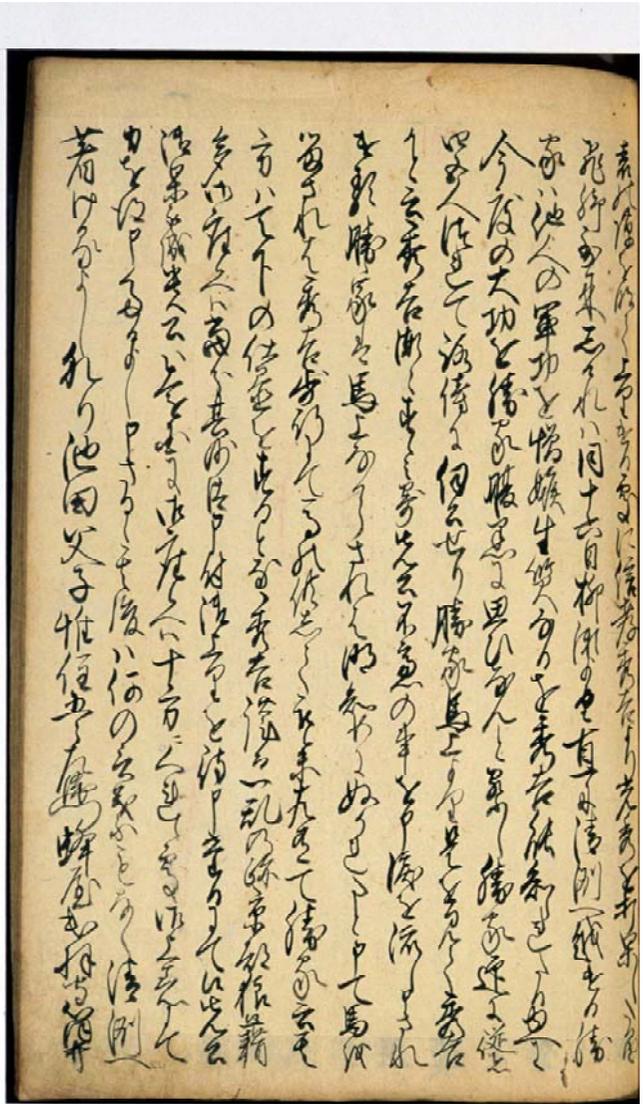
迫合最中に、五六百人うしろより山の根方を取て、紙旗ことく敷
 指拵、鉄炮をならし鬨を揚げれば、松田か勢うしろを見し
 より裏崩しけるとなん、高山右近と斎藤内蔵助と火花をちら
 し喚き呼て戦ける処に、池田父子川手の方より進み敵
 を脇に見る迄押出し、敵の真中へ横合に打て懸る、是を見て
 加藤作内・森隼人・中村孫平次、真先懸て鎧に入る、乱合入違散
 々に戦ふ、勝入家士森寺清右衛門松木笠の馬印にて乗廻し
 下知す、敵方より松木笠の馬印、名・苗氏を承度こそ候へ
 人数使懸引、目を驚たると呼る、岸兵左衛門此時能働す、勝
 入横合に突立れば敵むらくと崩る処に、勝入軍兵も高
 山軍兵も競懸り追詰く、打取ける、爰に小丸山の辺にて
 勝入家士山脇源大夫ハ、丹波のしらの城を預りたる村上
 源之丞と云者くり半月の印にて下知する処に、名乗合



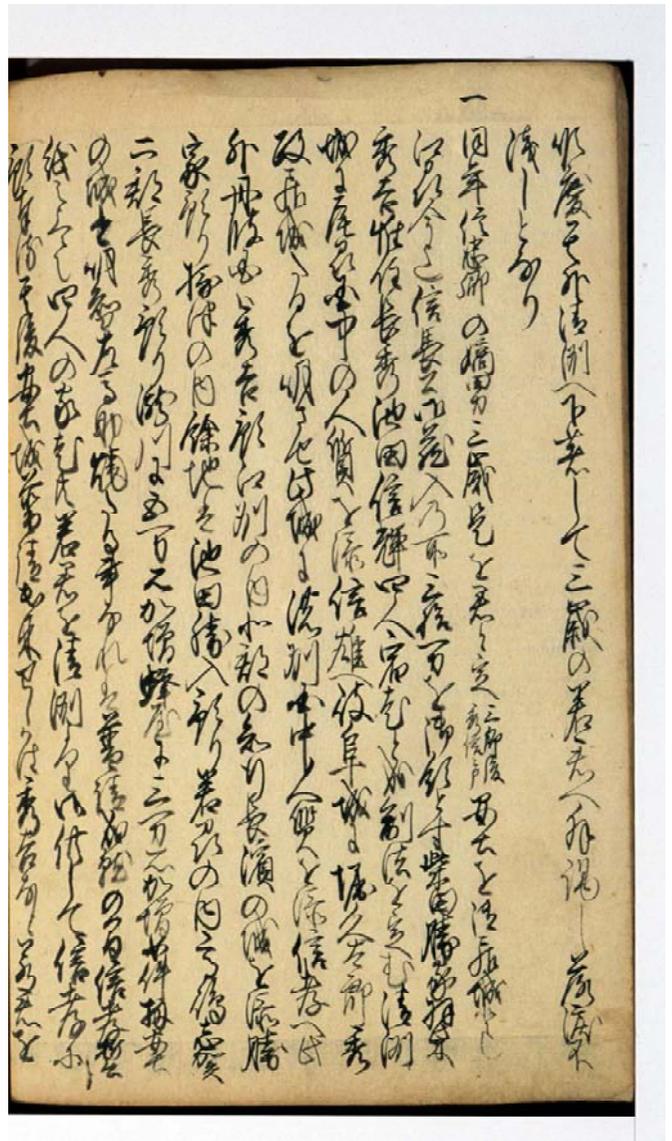
けるか、爰にて可防兵もなし、坂本へ籠城せんとて、其夜のま
きれに、明智十兵衛・進土作右衛門・村越三十郎・堀毛与次郎・山本
仙入・三宅孫十郎打連て伏見へ落、夫より小栗栖を通り
ける時、先に乗たる村越を藪の内より鎧にてつきかゝる、
次に乗たる光秀か右の脇をしたゝかに突込ける、前後より
味方打するつまくれめ曲事に可行と呼ハれば、五六人の馬
上に従者一兩人ならては見へぬそ落人の正真なり、貝を
吹て起れとのゝしりける、光秀は勝兵衛に腸の出
たるをさくらせて、頭を打て灰にせよといひける舌もなへ
て聞へければ、頭を打て知恩院のしれる坊へ持参して
灰にせんと落行ける処に、行先々に一揆起りければ、頭
は草の中へ投入て落けるとそ、是を村井春長軒か郎
等見知て秀吉へ奉りければ褒美を給りける、其後



死骸を尋出し頭を継、日の岡に六月十四日明智左馬助か
 父と共に磔にかけられたり、爰に明智左馬助ハ安土に有
 けるか、光秀於山崎表敗亡のよし亥の刻に聞へければ、十
 四日未明に殿守に火をかけ坂本へ趣く所に、山崎美作守勢
 田の橋を焼落たるを漸く補続し相渡り坂本へと急ぎ
 ける所に、堀久太郎諸勢に先立て安土へ参陣し、左馬助を
 打果へしといそぎけるか、左馬助に大津におゐて寄合かしら
 に渡し合、散々に攻付数多打取る間に、左馬助ハ湖水と町
 との間を乗ぬけ、やうくにして坂本の城江入、光秀か男子三人・
 女子三人差殺し、城に火を掛けて腹切けるとなり、秀吉ハ於京都
 光秀者共尋搜て切捨、本能寺に於て信長公の骸骨を
 納、京都の仕置申付、其後尾州江下向せしめ、清洲の若君出羽介
信忠卿
 秀信とそに拝謁せんとて打立ける、柴田修理亮勝家ハ越中

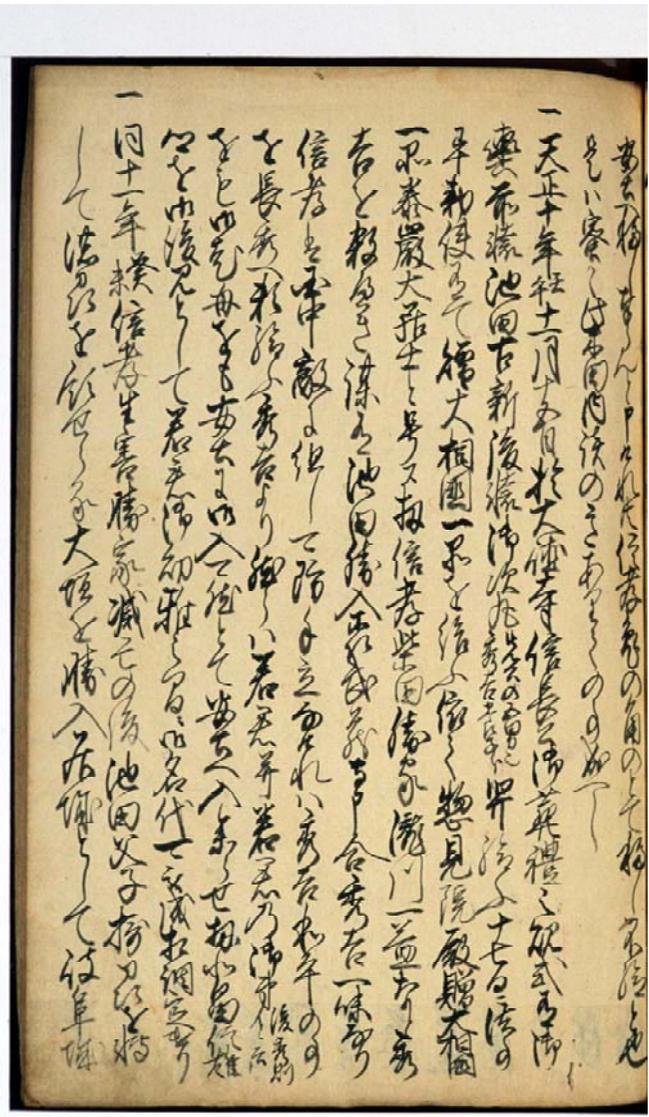


表の隙を明て上りける処に、信孝・秀吉より光秀を打果したる由
飛脚到来しけれハ、同十六日柳衛より直に清洲へ越ける、勝
家ハ他人の軍功を憎嫉生質なるを秀吉能知られたるゆへに、
今度の大功を勝家腹黒に思ひなんと察し、勝家迎に從者
四五人つれて路傍に伺公せり、勝家馬上より是を見て秀吉
かと云、秀吉漸々すゝミ寄、先公不慮の事を申、涙を流し申され
ける、勝家は馬上ながら、されは明知めにぬかれたと申て馬を
留されは、秀吉歩行にて馬の供して被參、左有て勝家云其
方ハ天下の仕置をするとな、秀吉謹而一乱の跡京都狼藉
多御座候へハ当分其沙汰申付御上りを待申たるにて候、先公
御果被成貴公ハ遠国に御座候へハ^{とほ}方ニくれ候処、御上着にて
力を得申たるよし申さるゝ、其後ハ何の言葉もなく清洲へ
着けるよしなり、池田父子・惟住五郎左衛門・蜂屋出羽守・筒井



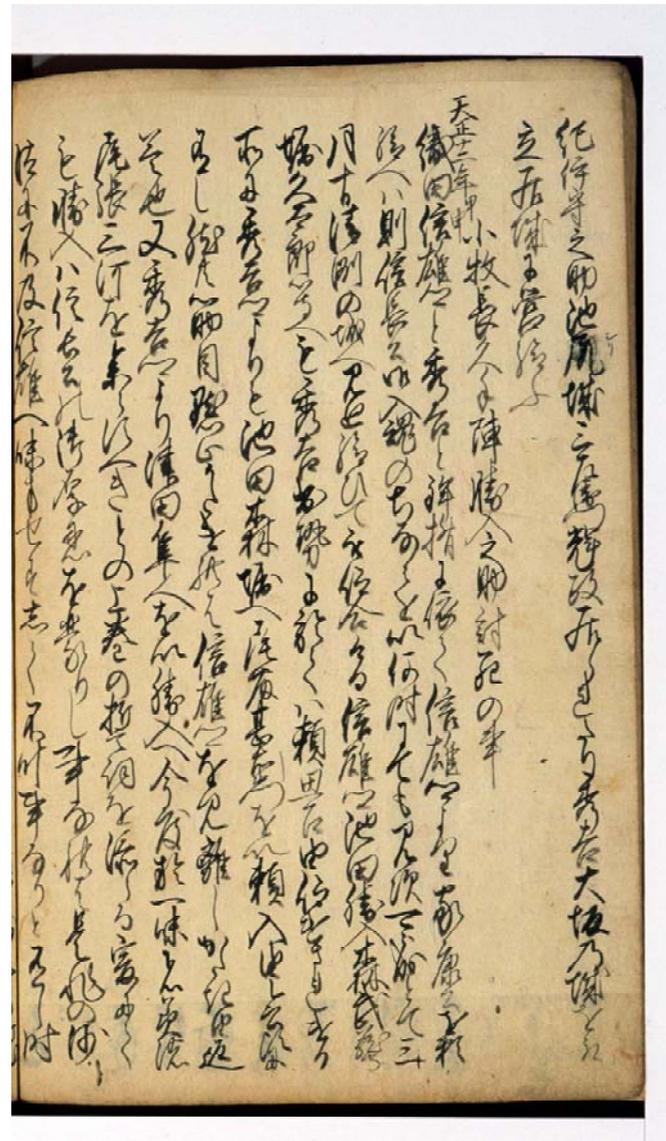
順慶其外清洲へ下着して三歳の若君へ拝謁し、落涙不
淺となり

一同年信忠卿の嫡男三歳、是を君と定^{三郎後}、安土を御居城とし
江州今迄信長公御蔵入の所三拾万を御領とす、柴田勝家・羽柴
秀吉・惟住長秀・池田信輝四人宿老と成、制法を定む、清洲
城に尾州国中の人質を添信雄へ、岐阜城に堀久太郎秀
政居城たるを明けさせ、此城に濃州国中人質添信孝へ、此
外丹波国ハ秀吉預、江州の内北郡の知行長浜の城を添勝
家預り、摂津の内余地は池田勝入預り、若州の内高嶋・志賀
二郡長秀預り、瀧川に五万石加増、蜂屋に三万石加増如件、扱安土
の城は明智左馬助焼たる事なれば、普請成就の間信孝誓
紙之上にて四人の家老共若君を清洲より御供して信孝に
預奉る、其後安土城普請出来せしかは、秀吉など若君を



安土へ移し奉らんと申けれ共、信孝兔の角のとて移し不給と也、
是ハ蜜々柴田内談の意ありての事成へし

一天正十年^{先公の五男也}壬午十一月十五日於大徳寺、信長公御葬礼之規式有、御
輿前轅池田古新・後轅御次丸^{秀吉養子分}昇給ふ、十七日ニ法事
畢、勅使有て贈大相国一品を給ふ、依て惣見院殿贈大相国
一品泰敵大居士と号ス、扱信孝・柴田勝家・瀧川一益など、秀
吉を殺へき謀有、池田勝入・森武藏守申合秀吉一味なり、
信孝は国中敵に組して防手立なけれハ、秀吉和平の事^{後秀則}
を長秀へ頼給ふ、秀吉より然らハ若君^{并若君の御弟}若若君の御弟^{と云}
をも御老母をも安土に御入可然とて安土へ入參らせ、扱北畠信雄
卿を御後見として、若君御幼稚之間ニ御名代可被成相調定けり
一同十一年癸未信孝生害勝家滅亡の後、池田父子摂州を転
して濃州を領せらる、大垣を勝入居城として岐阜城



紀伊守之助、池尻城三左衛門輝政居られたり、秀吉大坂の城を取立居城に營給ふ

小牧長久手陣勝入・之助討死の事

天正十二年甲申

織田信雄卿と秀吉と鉾楯に依て、信雄卿より家康公を頼給へハ、則信長公御入魂のちなミを以何時にても見次可被成とて、三月十日清洲の城へ見廻給ひて被仰合ける、信雄卿、池田勝入・森武蔵守・堀久太郎等へも、秀吉出勢に於てハ頼思召由仰遣されける所に、秀吉卿よりも、池田・森・堀へ尾藤甚右衛門を以頼入由候云頃に有し、然共筋目黙止かたければ、信雄卿を見離しかたき由返答也、又秀吉卿より津田隼人を以勝入へ今度於一味者美濃・尾張・三河を参らすへきとの上巻の誓詞を添らる、爰にても勝入へ、信長公の御厚恩を蒙りし事なれば是非の沙汰に不及、信雄へ味方もせずして不叶事なりと有し時、

是れ心懸成間、此段は申さぬ様にいたし候へと御内意ニ候きと申
さる、武蔵守涙を流ししはらく有て、然は遠江本知金山と
を給り候様ニと申さる、両使は兎角今度訴詔は然るへからず、
右両国御領納可然と有て、是を領掌し候秀吉へ一味也、堀久太
郎も秀吉へ一味なり使と配知と、重而考へし、秀吉より身方に属せられ喜悦
の由、且又近日出勢すへきの間、其前に信雄卿に属したる
城をいつれにても一ヶ所攻取可給由、重而被仰越たり、勝入是を
聞て、爰に信雄卿より中村勘右衛門尉を犬山城主として置れ
しか、勢州嶺の城番手として勘右衛門留守なれハ、幸の時節な
り、秀吉へ一味の印に是を乗とらんとて、犬山の城は此以前
勝入居城せられしなれハ、知れる町人同心すへき者のかたへ
日置三蔵を遣し、城乗取へき調儀しけるに、町人共同心
して人質式人渡し、三月十一日三蔵を返しける、又

是れ心懸成間、此段は申さぬ様にいたし候へと御内意ニ候きと申
さる、武蔵守涙を流ししはらく有て、然は遠江本知金山と
を給り候様ニと申さる、両使は兎角今度訴詔は然るへからず、
右両国御領納可然と有て、是を領掌し候秀吉へ一味也、堀久太
郎も秀吉へ一味なり使と配知と、重而考へし、秀吉より身方に属せられ喜悦
の由、且又近日出勢すへきの間、其前に信雄卿に属したる
城をいつれにても一ヶ所攻取可給由、重而被仰越たり、勝入是を
聞て、爰に信雄卿より中村勘右衛門尉を犬山城主として置れ
しか、勢州嶺の城番手として勘右衛門留守なれハ、幸の時節な
り、秀吉へ一味の印に是を乗とらんとて、犬山の城は此以前
勝入居城せられしなれハ、知れる町人同心すへき者のかたへ
日置三蔵を遣し、城乗取へき調儀しけるに、町人共同心
して人質式人渡し、三月十一日三蔵を返しける、又

高木孫右衛門に高瀬舟の才覺せよと遣しければ、十艘計犬山より
十四五町川下りんきさんと云所へ一説ニ大豆下しける、斯て勝入下知
志く曰東美濃へ發向して其日小舟陣立し勝を報年有
とせんとて十三日大垣をまゝり舟り小舟より入しは僅き地
弟守宇治屋の川沿小陣立東美濃へ通る處より解
りたり其刻の報もわたり川を渡りわしの城押寄停本
法を浦岸附に攻めりふ入る事常刀後左京須賀平四郎
と云云 高木孫右衛門大村定平をたすに働しては角はが
城中の者も我もくや防げぬ中ゆと物大急敵又法氣を堅
撲り功くせり也高木孫右衛門討死せり城と亦ぬ也因又高木
は指籠る信雄の家原に於清洲城十四日の東洋定河の原
宣ふ小牧山を尾張の真中にて要地なりけしと云ふ
方軍よいて橋の地也是打てお城と云り人秀吉下向せは

高木孫右衛門に高瀬舟の才覺せよと遣しければ、十艘計犬山より
十四五町川下りんきさんと云所へ一説ニ大豆下しける、斯て勝入下知

して曰、東美濃へ發向して其日に帰陣すへし、腰兵糧に用

意せよとて、十三日大垣を立て打けるに、夜に入しかは使番馳

来り、宇留摩の川端に陣取候へ東美濃へは八通るへからすと触

にけり、亥刻の頃船に取乗て川を渡し犬山の城へ押寄、伊木

清兵衛即時に攻破り乗入ル、舟戸帯刀後道開と云・須賀平四郎

後左京・真先駆て働、大村定平武左衛門先祖など能働て手負ける、

城中の者共我もくと防ける中にも、勘右衛門叔父清藏与堅

横に切て廻りける、終に討死せしかハ城を乗取則池田父子此城

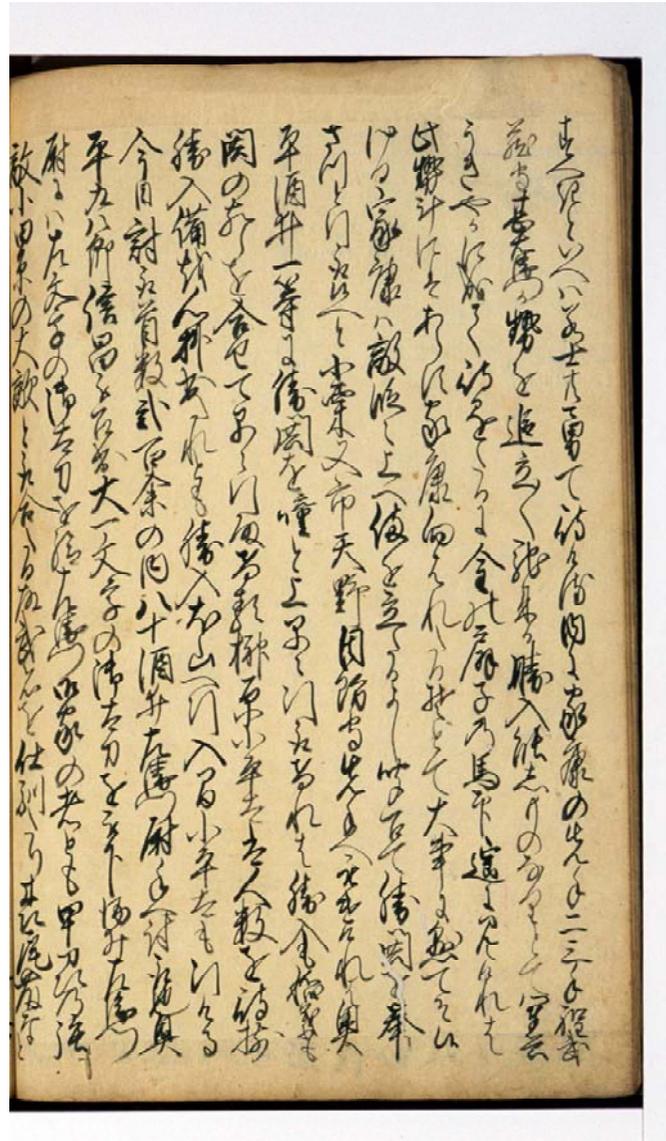
に楯籠る、信雄卿・家康ハ於清洲城十四日の夜評定あり、家康

宣ふハ小牧山は尾張国の真中にて要地なり、此山を取たる

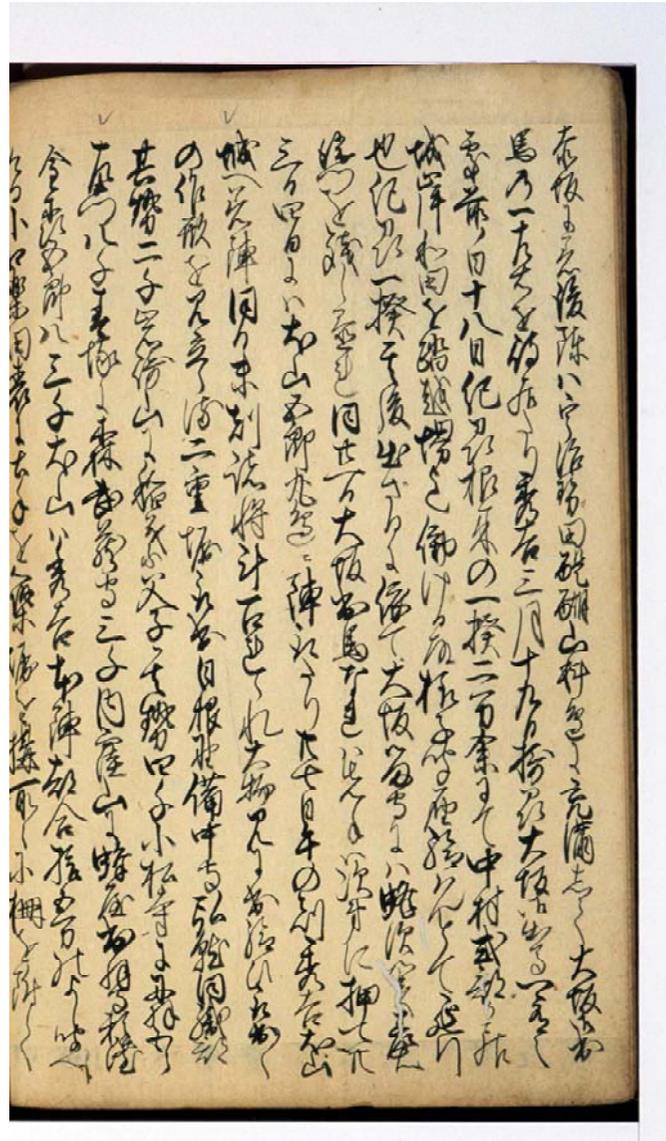
方軍にハ可勝カカの地也、是へ打て出城こしらへ秀吉下向せは

討陣之先、先明日大物見に出へくとて、榊原小平太に此旨被仰付
ける、本多豊後守康重諫申けるハ、已前長篠にて勝頼事思
召候ハすや、大敵をあなとり瀧沢川を越、二十町ばかり踏出し打負
候きと云、酒井左衛門尉忠次聞て、今の上方勢ハ軍の道知たる者
なけれハ何の手にか立へき、我等罷向て、若敵小牧山に有之ハ狼
煙を二筋立へし、敵なくハ狼煙一筋立申へしと約束して、十五日に
小牧をさして馳行ける、信雄卿も家康も酒井か跡を追て
小牧へ御出馬の処に、小牧にのろし一筋立たるを御覽して弥
急給へハ、我先くと行列猥成処に、井伊兵部少輔直政赤備
三千にて押太鼓を打、如何にも静々と行列正敷押来る、信
雄卿も家康も御感也、然処に勝入焼働の煙先手に
取やうに見へければ、能仕もの成とて家康馬を早めらる、
勝入は方々手合して在々所々に入渡り一時に仕廻引

対陣可然、先明日大物見に出へくとて榊原小平太に此旨被仰付
ける、本多豊後守康重諫申けるハ、已前長篠にて勝頼事思
召候ハすや、大敵をあなとり瀧沢川を越、二十町ばかり踏出し打負
候きと云、酒井左衛門尉忠次聞て、今の上方勢ハ軍の道知たる者
なけれハ何の手にか立へき、我等罷向て、若敵小牧山に有之ハ狼
煙を二筋立へし、敵なくハ狼煙一筋立申へしと約束して、十五日に
小牧をさして馳行ける、信雄卿も家康も酒井か跡を追て
小牧へ御出馬の処に、小牧にのろし一筋立たるを御覽して弥
急給へハ、我先くと行列猥成処に、井伊兵部少輔直政赤備
三千にて押太鼓を打、如何にも静々と行列正敷押来る、信
雄卿も家康も御感也、然処に勝入焼働の煙先手に
取やうに見へければ、能仕もの成とて家康馬を早めらる、
勝入は方々手合して在々所々に入渡り一時に仕廻引



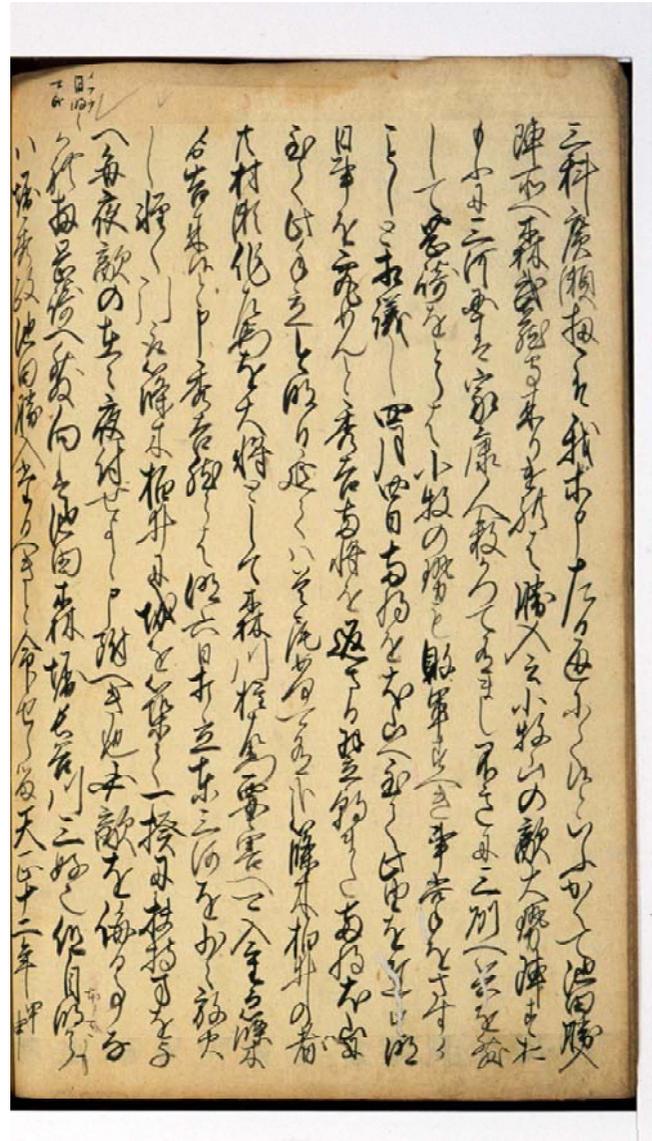
すへきといへハ、若士共勇て待ける内に、家康の先手二三手程武蔵守、甚右衛門か勢を追立く馳来る、勝入能しものなりとて軍兵うきやかに成て待懸たるに、金の扇子の馬印遙に見へければ此勢計にはあらず、家康向はれたるそとて大事に懸てそ候ける、家康ハ敵段々上へ備を立たるよし聞召て勝鬨を挙げさつと引取候へと小栗又市・天野周防守先手へ被遣ければ、奥平・酒井一等に勝鬨を囃と上、早々引取ければ、勝入も稲葉も鬨の声を合せて早々引取ける、榊原小平太は人数を待揃勝入備を心掛出たれとも、勝入犬山へ引入間小平太も引ける、今日討取首数貳百余の内、八十酒井左衛門尉手へ討取也、奥平九八郎信昌被召出大一字の御太刀を被下、酒井左衛門尉にハ左文字の御太刀を給、左衛門御家の者とも甲州の強敵、小田原の大敵と取合たる故、武者を仕馴たり、森・尾藤など



赤坂に着、後陣ハ宇治・勢田・醍醐・山科辺に充滿して大坂御出馬の一左右を待居たり、秀吉三月十九日摂州大坂御出馬可有之処、前ノ日十八日紀州根来の一揆二万余にて中村式部か居城岸和田を踏越、堺迄働ける故、様子聞届給ハんとて延引也、紀州一揆其後出ざるに依て、大坂留守にハ蜂須賀彦右衛門を残し置れ、同廿一日大坂出馬なれハ、先手ハ次第に押て廿三四日にハ犬山五郎丸辺ニ陣取たり、廿七日午の刻秀吉犬山城へ着陣、同日未刻諸将計召連られ大物見に出給ひ、取出くの作形を見立らる、二重堀取出日根野備中守弘就・同織部其勢二千、岩崎山に稲葉父子其勢四千、小松寺に丹羽五郎左衛門八千、春塚に森武蔵守三千、内窪山に蜂屋出羽守頼隆・金森五郎八三千、犬山ハ秀吉本陣都合拾五万のよし聞へける、小口楽田表に土手を築、堀を構、所々に柵を附て

伯耆守・信雄に八千草三郎左衛門・浜田与右衛門・小泉甚六・楠十郎・林与五郎・
同十蔵・同新右衛門・小坂孫九郎・加賀井弥八郎等都合二万五千を
率して小牧西陣也。家康御分国境目北条押に人数
を御遠見被成て、井伊兵部少輔直政与力甲州浪人広瀬美
濃守・三科肥前守を召、上方の大軍を見候へと宣へは、両
人承り、いかにも小勢のよし申、何とて左ハ云そと尋給へは、
只今筑前守方に軍のすへ存たる者無之候へハ、百万にても
氣遣なく候、惣而軍ハ勢の多少によらず、越後上杉謙信は
八千にて信玄二万三万氏康の五万六万と散々に戦
仕られしか、少も勝劣無之候きと申候、扨其後家康方日
々夜々二重堀辺へ二十騎三十騎にて相働日々分捕
高名しけるか、秀吉の勢ハ柵より外へ出る事ならされは

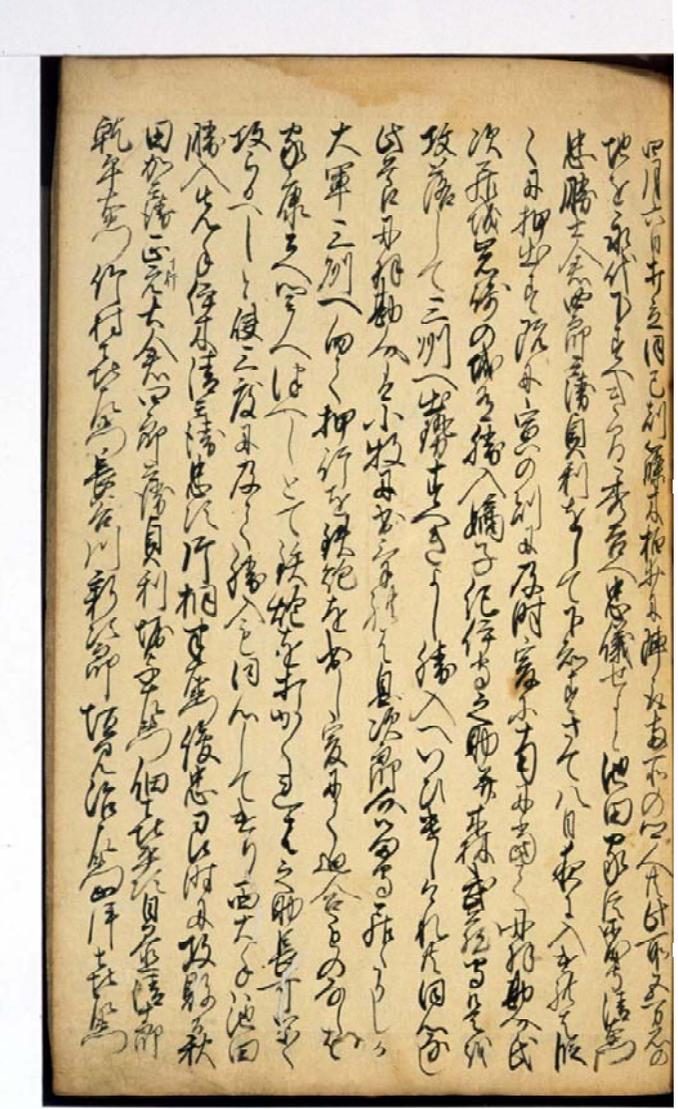
備給ふ、信雄に八千草三郎左衛門・浜田与右衛門・小泉甚六・楠十郎・林与五郎・
同十蔵・同新右衛門・小坂孫九郎・加賀井弥八郎等都合二万五千を
率して小牧御在陣也、家康御分国境目北条押に人数
を残り置、三万五千を率して同御在陣也、家康上方勢
を御遠見被成て、井伊兵部少輔直政与力甲州浪人広瀬美
濃守・三科肥前守を召、上方の大軍を見候へと宣へは、両
人承り、いかにも小勢のよし申、何とて左ハ云そと尋給へは、
只今筑前守方に軍のすへ存たる者無之候へハ、百万にても
氣遣なく候、惣而軍ハ勢の多少によらず、越後上杉謙信は
八千にて信玄二万三万氏康の五万六万と散々に戦
仕られしか、少も勝劣無之候きと申候、扨其後家康方日
々夜々二重堀辺へ二十騎三十騎にて相働日々分捕
高名しけるか、秀吉の勢ハ柵より外へ出る事ならされは



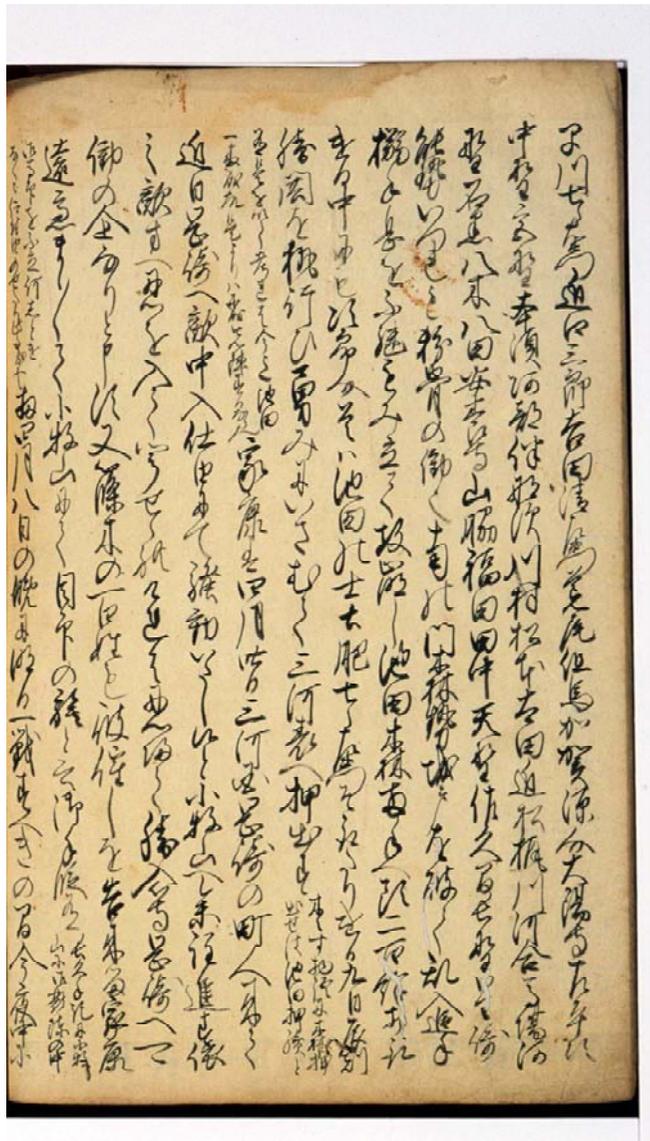
三科・広瀬扱こそ我等申たる通にて候といふ、かくて池田勝入陣所へ森武蔵守来りければ勝入云、小牧山の敵大勢陣す、おもふに三河国は家康人数かつて有まし、不意に三州へ兵を發して岡崎をとらは、小牧の勢も敗軍すへき事掌をさすかことしと相議し、四月四日両将を犬山へ至て此由を達□、明日事を究めんと秀吉両将を返さる、翌朝また両将犬山に至て此手立明日延て八首尾如何可有哉、篠木・柏井の者共村瀬作左衛門を大将として森川権左衛門要害へ可入、重重篠木より告来候と申、秀吉然らば明六日打立、東三河を少々放火し軽く引取、篠木・柏井に城を築て一揆に扶持方を与へ、毎夜敵の在々夜付せよと申附へき也、必敵を侮る事な目明し可成

かれ、扱岡崎へ発向は池田・森・堀・長谷川・三好也、但自明□
八堀秀政・池田勝入たるへきと命せらる、天正十二年本ノマ甲

四月六日打立、同巳刻篠木・柏井に陣取、両所の郷人共此所五百石の
 地を永代下すへき間秀吉へ忠儀せよと池田家臣森寺清右衛門
 忠勝・土倉四郎兵衛貞利をして下知す、さて八日夜に入ければ段
 々に押出す、既に寅の刻に及時、爰に南に当て丹羽勘介氏
 次居城岩崎の城有、勝入嫡子紀伊守之助并森武蔵守是を
 攻落して三州へ出勢すへきよし勝入へいひ遣しけれ共同心なし、
 此節丹羽勘介は小牧に出ければ、息次郎介留守居たりしか
 大軍三州へ向て押行を鉄炮を出し、爰に迫合ものならば
 家康公へ聞へつへしとて鉄炮を打かくれば、之助・長可早々
 攻らるへしと使三度に及て勝入も同心してけり、西大手ハ池田
 勝入、先手伊木清兵衛忠次・片桐半右衛門俊忠即時に攻敗る、秋
 田加兵衛正元・土倉四郎兵衛貞利・堀与左衛門・佃喜平次・日置清十郎・
 乾平右衛門・竹村喜左衛門・長谷川新次郎・垣見治左衛門・岸喜左衛門・



四月六日打立、同巳刻篠木・柏井に陣取、両所の郷人共此所五百石の
 地を永代下すへき間秀吉へ忠儀せよと池田家臣森寺清右衛門
 忠勝・土倉四郎兵衛貞利をして下知す、さて八日夜に入ければ段
 々に押出す、既に寅の刻に及時、爰に南に当て丹羽勘介氏
 次居城岩崎の城有、勝入嫡子紀伊守之助并森武蔵守是を
 攻落して三州へ出勢すへきよし勝入へいひ遣しけれ共同心なし、
 此節丹羽勘介は小牧に出ければ、息次郎介留守居たりしか
 大軍三州へ向て押行を鉄炮を出し、爰に迫合ものならば
 家康公へ聞へつへしとて鉄炮を打かくれば、之助・長可早々
 攻らるへしと使三度に及て勝入も同心してけり、西大手ハ池田
 勝入、先手伊木清兵衛忠次・片桐半右衛門俊忠即時に攻敗る、秋
 田加兵衛正元・土倉四郎兵衛貞利・堀与左衛門・佃喜平次・日置清十郎・
 乾平右衛門・竹村喜左衛門・長谷川新次郎・垣見治左衛門・岸喜左衛門・



早川七郎右衛門・近江三郎・吉田清左衛門・荒尾但馬・加賀源介・大陽寺左平次・
 中野・宮野・本須・阿部・伴・那須・川村・松本・太田・近松・梶川・河合・馬場・河
 野・石黒・八木・八田・安養寺・山脇・福田・田中・天野・佐久間・長野・星崎・
 能勢いづれも粉骨の働也、南の門森勢城戸を破て乱入、追手
 搦手息を不継もみ立て攻崩し、池田・森両手へ頭二百余打取
 ける、中にも次郎介首ハ池田の土土肥七郎左衛門そ取たりける、九日辰刻
 勝鬨を執行ひ、勇みにいさむて三河表へ押出す 木々す物語に森押
 出せは池田押統と
 有、是を以て考れば今迄池田 一番成故是よりハ森先陣するならん、家康は四月四日三河国岡崎の町人来て
 近日岡崎へ敵中入仕由にて騒動いたし候と小牧山へ参注進す、依
 之敵方へ忍を入れて聞せられければ、忍帰て勝入等岡崎へ可
 働の企なりと申す、又篠木の百姓も彼催しを告来る、家康
 遠慮ましくて小牧山にて目印の簾と云御手段有 長久手記に小牧
 山に御対陣の中
 御馬印を不立、何しとけ なく被仰付由のせたり此事成へし、扱四月八日の晩に明日一戦すへきの間、今夜中に

康政・水野惣兵衛忠重・同藤十郎後ハ六左衛門といふ 勝成・本多豊後守康重・
 丹羽勘介氏次・松平紀伊守家信七頭其勢四千五百余にて稻場
 口より八日の夜半に小牧を出て小畑迄着陣す、本多豊後守に遠
 聞の者附置へき仰なりければ、龍泉寺表に歩兵士五十人撰
 て附置、敵の人数三河表へ通らは段々に可注進の旨申付ける、
 上方勢ハ是をしらす、一番池田勝入父子一万二千、二番森武蔵
 守五千余、三番堀久太郎九千余、四番長谷川藤五郎秀一千余、
 五番三好孫七郎秀次二万六千、何も相備共に如此、都合四万
 五千にて段々に龍泉寺坂を下り長久手を打過押行、遠
 聞の者段々に小畑城へ注進す、七頭の御先手上方勢の跡を
 追て可発向と仰られ、家康ハ井伊兵部少輔直政千八百
 余御前備にて御馬廻り五千余也、同夜丑ノ刻小牧御出馬

未ノ刻と有

説は非なり 打立候へと下知し給ふ、御先手大須加五郎左衛門康高・榊原式部大輔

康政・水野惣兵衛忠重・同藤十郎後ハ六左衛門といふ 勝成・本多豊後守康重・

丹羽勘介氏次・松平紀伊守家信七頭其勢四千五百余にて稻場

口より八日の夜半に小牧を出て小畑迄着陣す、本多豊後守に遠

聞の者附置へき仰なりければ、龍泉寺表に歩兵士五十人撰

て附置、敵の人数三河表へ通らは段々に可注進の旨申付ける、

上方勢ハ是をしらす、一番池田勝入父子一万二千、二番森武蔵

守五千余、三番堀久太郎九千余、四番長谷川藤五郎秀一千余、

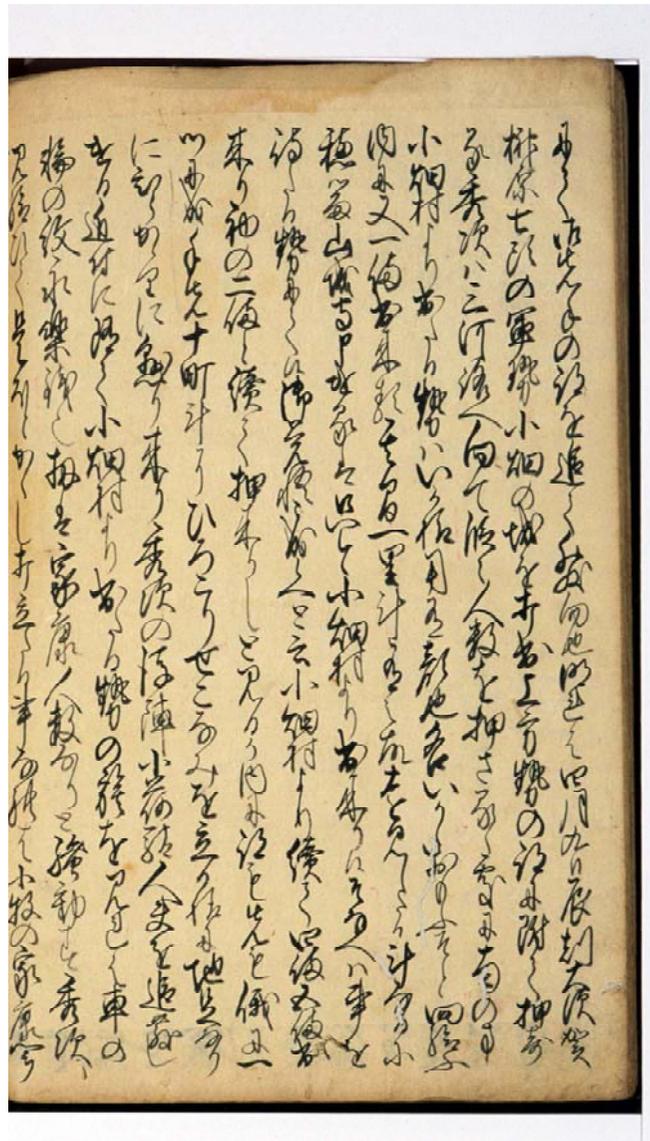
五番三好孫七郎秀次二万六千、何も相備共に如此、都合四万

五千にて段々に龍泉寺坂を下り長久手を打過押行、遠

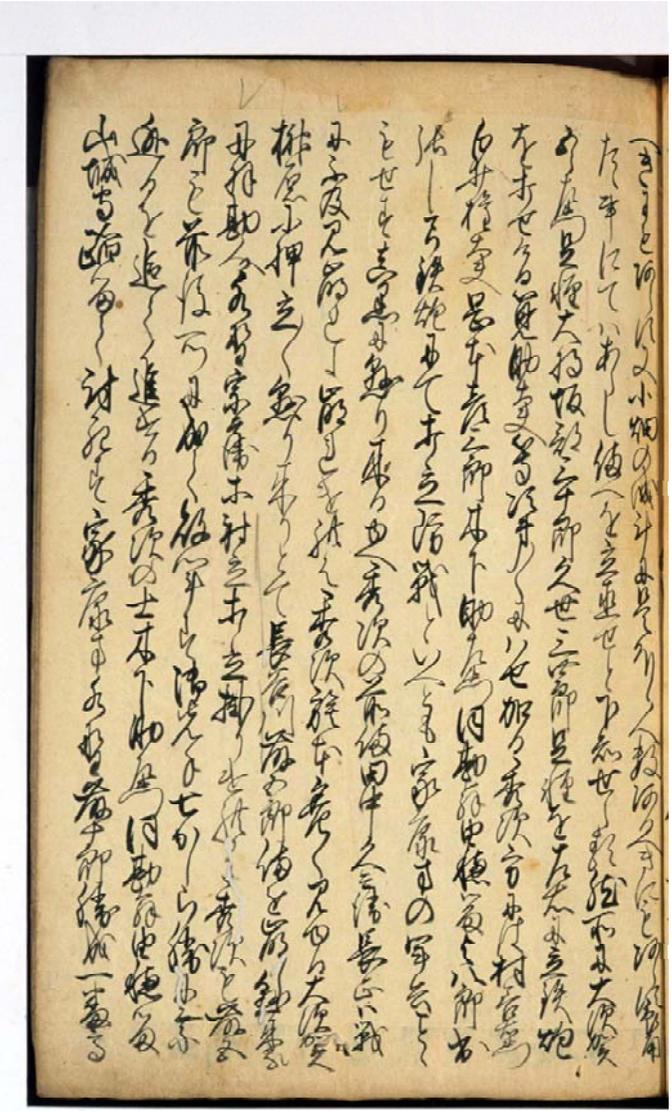
聞の者段々に小畑城へ注進す、七頭の御先手上方勢の跡を

追て可発向と仰られ、家康ハ井伊兵部少輔直政千八百

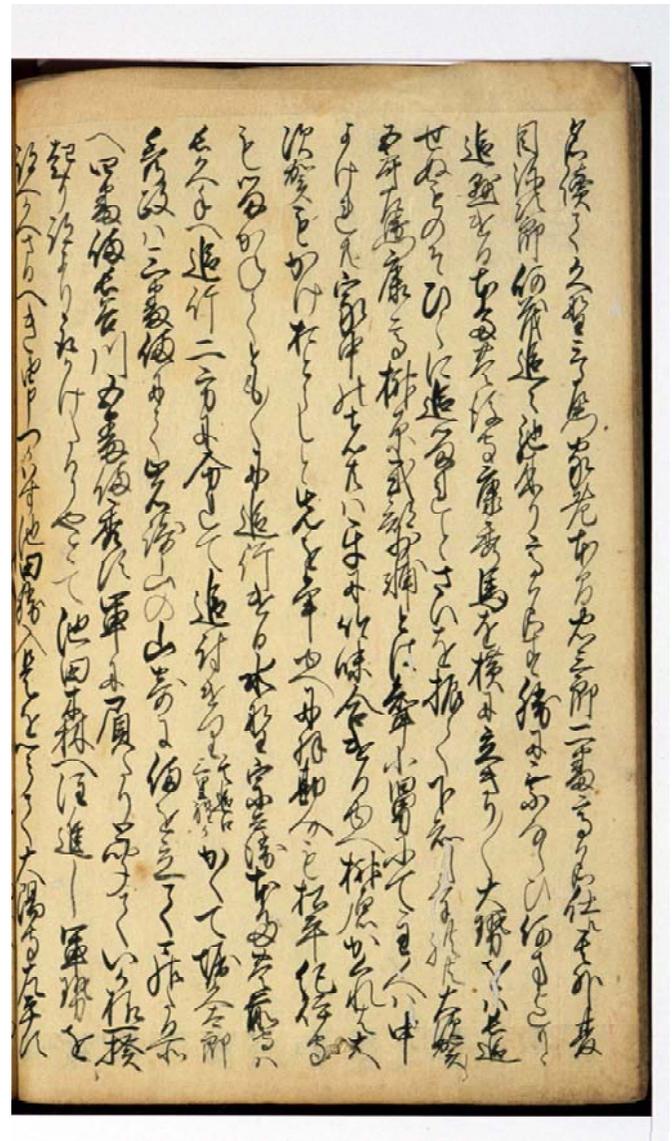
余御前備にて御馬廻り五千余也、同夜丑ノ刻小牧御出馬



にて御先手の跡を追て発向也、明れは四月九日辰刻大須賀・
 榊原七頭の軍勢小畑の城を打出上方勢の跡に附て押寄
 る、秀次ハ三河路へ向て段々人数を押さるゝ処に南の方
 小畑村より出たる勢ハいか様用有顔也、各いかゝおもふそと問給ふ
 内に又一備出来る、其間一里計ニ有之故遠見したる計なるに
 穂留山城守申けるは、只今小畑村より出来り候そなへハ事を
 待たる勢にて候御覚悟被成候へと云、小畑村より続て四備・五備出
 来り初の二備と続て押来りしと見るか内に跡も先も俄に一
 つに成、手先十町計にひろこりせこなみを立る様に地足なり
 にひらかゝりに懸り来り、秀次の後陣小荷駄人夫を追散し
 ける、近付に随て小畑村より出たる勢の旗を見れば車の
 輪の紋永楽銭也、扱は家康人数なりと騒動す、秀次
 見給ひて是ほとかくし打立たる事なれば小牧の家康聞



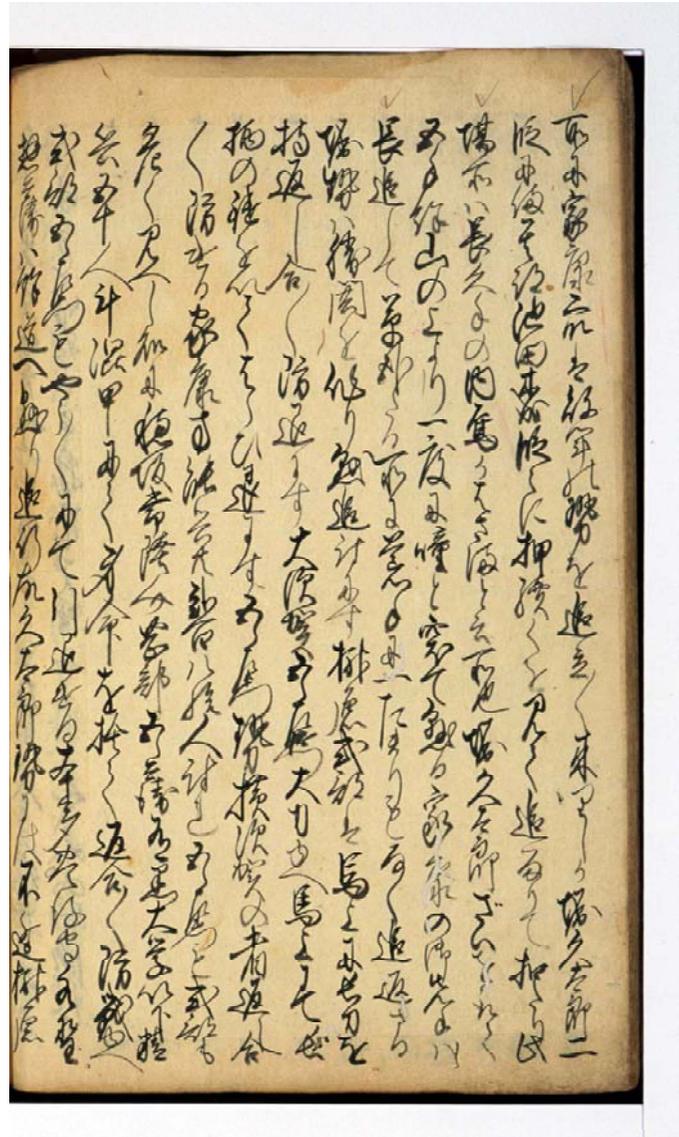
へきにもあらず、又小畑の城計に是ほと人数あるへきにもあらず、兎角たゝ事にてハあらし備へを立直せと下知せらる、然所に大須賀五郎左衛門足輕大将坂部三十郎・久世三四郎、足輕を左右に立鉄炮を打せける、寛助大夫等次第くくハせ加る、秀次方には村善右衛門・白井権大夫・岡本彦三郎・木下助左衛門・同勘解由・穂留与八郎出張し弓・鉄炮にて打立防戦といへとも、家康方の軍兵ことゝもせず真黒に懸り来るゆへ、秀次の前備田中久兵衛長正ハ戦に不及見崩れに崩れければ秀次旗本危く見ゆる、大須賀・榊原に押立く、懸り来りとして長谷川藤五郎備を崩し、懸来る丹羽勘介・水野宗兵衛等射立打立掛りければ、秀次も藤五郎も前後一つに成て敗軍す、御先手七かしら勝に乗逆るを追て進ける、秀次の土木下助左衛門・同勘解由・穂留山城守踏留て討死す、家康方水野藤十郎勝成一番高



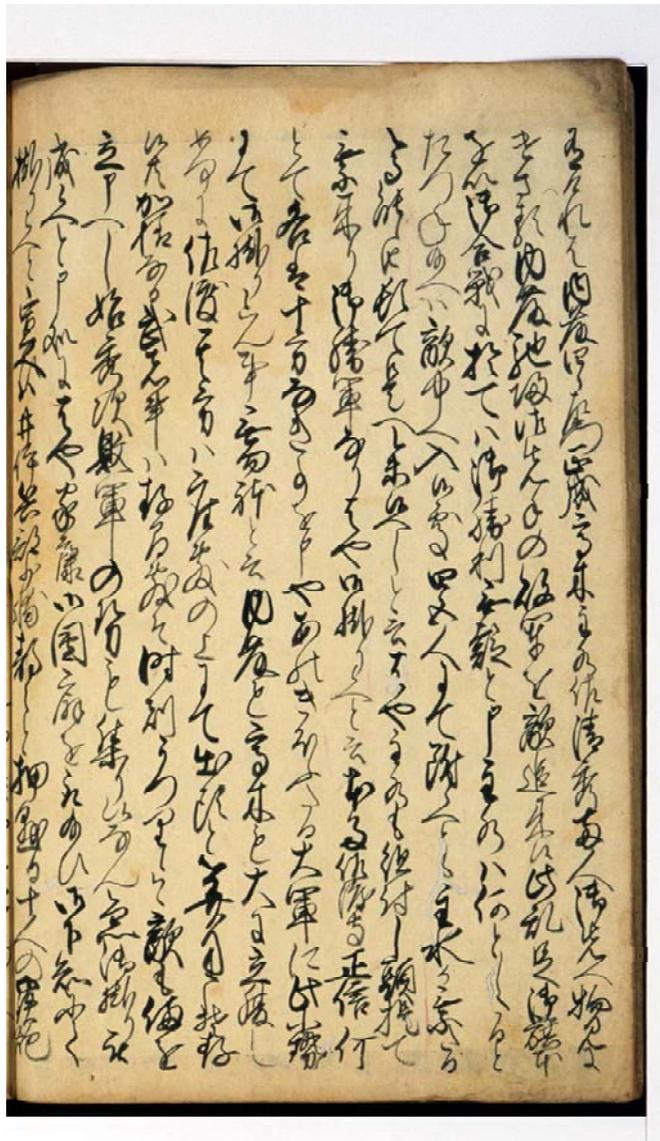
名、續て久野三郎左衛門家老本間忠三郎二番高名仕ル、其外夏
目弥次郎何も追々馳来り高名す、勝に乗ならひ何方迄もと
追懸ける、本多豊後守康秀馬を横に立きりく大勢をハ長追
せぬものそひらに追留れと、さいを振て下知しけれ共、大須賀
五郎左衛門康高・榊原式部少輔とは聳・小舅にて主人ハ中
よけれ共、家中の者共ハ互に竹味合けるゆへ、榊原かくれは大
須賀もかけおとらしと先を争ゆへ、丹羽勘介も松平紀伊守
も留かねて、ともく追行ける、水野宗兵衛・本多豊前守ハ
長久手へ追行、二方に分れて追付けり^{其追開}、かくて堀久太郎
秀政ハ三番備にて岩崎山の山寄に備を立て居たる所
へ、四番備長谷川・五番備秀次、軍に負たりと聞て、いか様一揆
起り跡より取かけたるにやとて、池田・森へ注進し、軍勢を
跡へかへさるへき由申つかハす、池田勝入是を聞て大陽寺左平次

先手の味方押行を呼びしむ、左平次ハ金の輪抜の刺物に
て味方を呼返す、其振尤見事なりしと也、又山脇修理白
母衣銀の短尺のだしにて森の備へ使して追付、爰元におゐ
て合戦始る、人数を返され候へ一手に成て戦へしと也、森
長可ハ尤として武市内蔵助黒母衣金のくり半月の出しにて
森の先勢を呼返すといへとも、先立勢の間一里計隔りぬれ
は人数不揃、勝入より又軍使を馳て此節油断心得かたし、早々
速備を寄らるへし、一手に成て敵を追崩すへしと也、長可是
に同じけれども人数集らず、漸々十七八騎にて勝入備へ馳加
はりぬ、堀久太郎ハ山の尾崎をかたとり立かためて足軽大将共呼
集て、敵只今敗軍の味方を追て来るへし、十間より
内に引請能たためて打すへし、馬乗一人打落したらは為
加増百石つゝ可出と申渡たるゆへ、足軽共押静め待かけたる

をして先手の味方押行を呼とめしむ、左平次ハ金の輪抜の刺物に
て味方を呼返す、其振尤見事なりしと也、又山脇修理白
母衣銀の短尺のだしにて森の備へ使して追付、爰元におゐ
て合戦始るへし、人数を返され候へ一手に成て戦へしと也、森
長可ハ尤として武市内蔵助黒母衣金のくり半月の出しにて
森の先勢を呼返すといへとも、先立勢の間一里計隔りぬれ
は人数不揃、勝入より又軍使を馳て此節油断心得かたし、早々
速備を寄らるへし、一手に成て敵を追崩すへしと也、長可是
に同じけれども人数集らず、漸々十七八騎にて勝入備へ馳加
はりぬ、堀久太郎ハ山の尾崎をかたとり立かためて足軽大将共呼
集て、敵只今敗軍の味方を追て来るへし、十間より
内に引請能たためて打すへし、馬乗一人打落したらは為
加増百石つゝ可出と申渡たるゆへ、足軽共押静め待かけたる

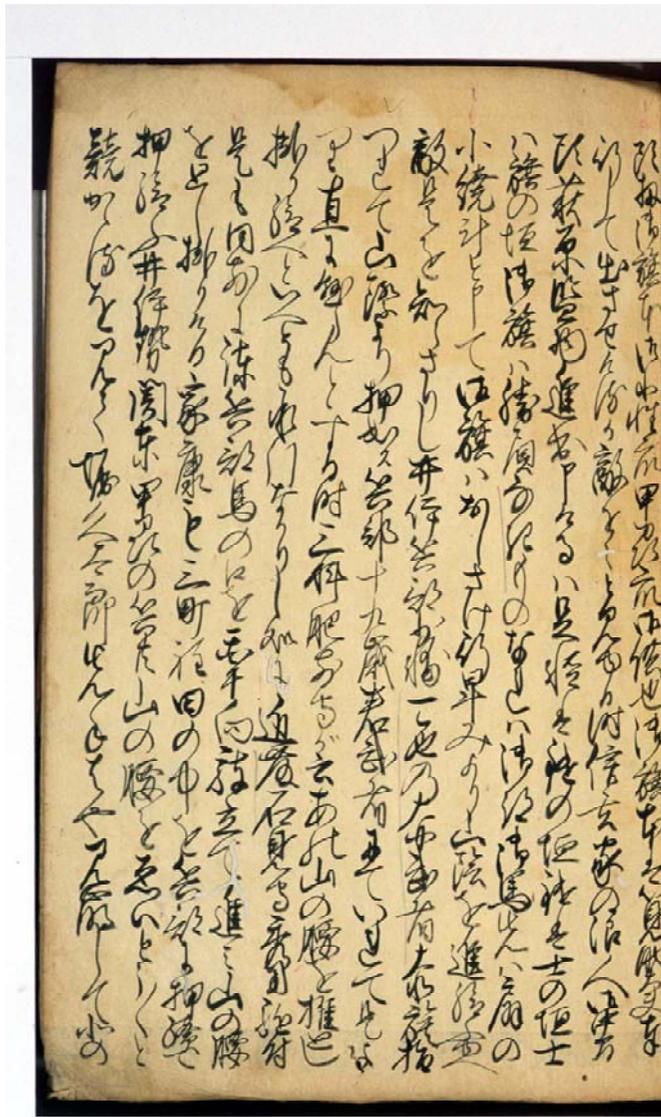


所に家康衆は敗軍の勢を追立く来りしか、堀久太郎二段に備、其跡池田・森段々に押続くを見て追留りて扣たり、此場所ハ長久手の内烏かはさまと云所也、堀久太郎ざいを取て五手余山の上より一度に瞳と突て懸る、家康の御先手ハ長追して草臥たる所に荒手に一たまりもなく追返さる、堀勢ハ勝鬨を作り懸追討にす、榊原式部は馬上に長刀を持返し合く防退にす、大須賀五郎左衛門大力ゆへ馬上にて長柄の鎧を以てはらひ退にす、五郎左衛門勢横須賀の者返し合く防ける、家康方能兵共式部八拾人討れ五郎左衛門も式部も危く見へし処に、穂坂常陸介・岡部五郎兵衛・有黒大学以下精兵五十人計混甲にて身命を捨て返合く防戦ゆへ、式部・五郎左衛門もやうくにて引退ける、本多豊後守・水野惣兵衛ハ余道へ懸り追行故、久太郎勢には不逢、榊原・

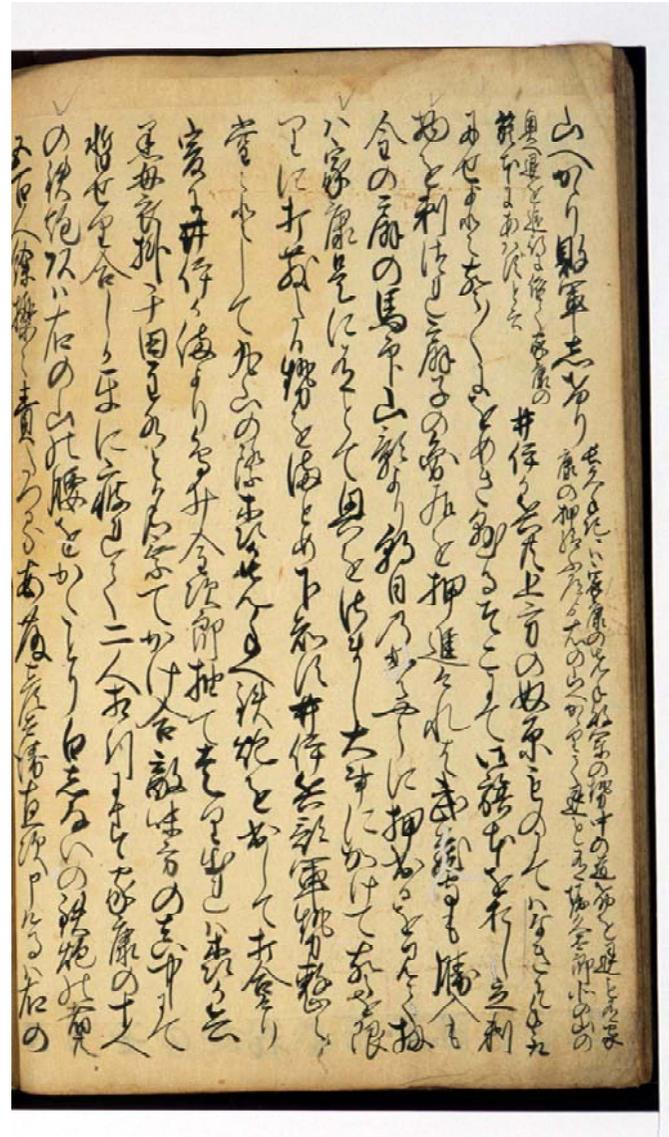


有ければ、内藤四郎左衛門正成・高木主水佐清秀兩人御先へ物見に遣さる、内藤馳帰御先手の敗軍を敵追来候、此乱足御旗本を以御合戦に於てハ御勝利無疑と申、主水ハ何としたるとたつね給へハ、敵中へ入候処四五人にて附候へとも、主水か乗たる馬能候由頓て是へ参候へしと云、はや主水も組付し頭提て乗来り、御勝軍なりはや御掛り候へと云、本多佐渡守正信何とて各は十方なき事を申や、あのきほふたる大軍に此小勢にて御掛り候はん事無勿躰と云、内藤も高木も大に立腹し、如何に佐渡其方ハ座敷の上にて出頭と算用こそ存候共、加様なる武者事ハ存間敷そ、時刻うつり候ハ、敵も備を立申へし、始秀次敗軍の勢も集り候なん、急御掛り被成候へと申処に、はや家康御団扇を取給ひ御下知にて掛り候へと宣へハ、井伊兵部少輔静々と押懸る、十人の御鉄炮

頭、扱御旗本御小性衆・甲州衆御供也、御旗本は寛助大夫奉
 行して出させけるか、敵近しと見る時、信玄家の浪人御中間
 頭萩原監物進出申けるハ、足輕は鐘の垣鐘は士の垣土
 ハ旗の垣御旗ハ勝負なきものなれハ、御跡御馬先ハ扇の
 小繞計と申て御旗ハおしさけ行、早みより山陰を進給ふゆへ
 敵是を知らさりし、井伊兵部少輔一色の大小武者赤旗指
 つれて山際より押出ス、兵部十九歳若武者にていれて是な
 り、直に懸らんとする時、三科肥前守が云、あの山の腰を（はじまり）
 掛り給へといへとも承引なかりし処に、近藤石見守秀用駈付
 是も同前に諫、兵部馬の口を牽向放立て進ミ山の腰
 を廻し掛りける、家康も三町程田の中を兵部に押統て
 押給ふ、井伊勢・関東・甲州の兵共山の腰を多いとうくと
 競かゝるを見て、堀久太郎先手はや見崩して北の



頭、扱御旗本御小性衆・甲州衆御供也、御旗本は寛助大夫奉
 行して出させけるか、敵近しと見る時、信玄家の浪人御中間
 頭萩原監物進出申けるハ、足輕は鐘の垣鐘は士の垣土
 ハ旗の垣御旗ハ勝負なきものなれハ、御跡御馬先ハ扇の
 小繞計と申て御旗ハおしさけ行、早みより山陰を進給ふゆへ
 敵是を知らさりし、井伊兵部少輔一色の大小武者赤旗指
 つれて山際より押出ス、兵部十九歳若武者にていれて是な
 り、直に懸らんとする時、三科肥前守が云、あの山の腰を（はじまり）
 掛り給へといへとも承引なかりし処に、近藤石見守秀用駈付
 是も同前に諫、兵部馬の口を牽向放立て進ミ山の腰
 を廻し掛りける、家康も三町程田の中を兵部に押統て
 押給ふ、井伊勢・関東・甲州の兵共山の腰を多いとうくと
 競かゝるを見て、堀久太郎先手はや見崩して北の



山へかゝり敗軍しけり

長久手記二八家康の先手敗軍の勢中の道筋を退も家

康の押給ふ道より右の山へかゝりて退も有堀久太郎北の山の

奥へ退を追行に依て家康の

旗本にあはずと云

、井伊か兵共上方の奴原ものにてハなきそ手取

にせよと声くゝにをめき懸る、そこにて御旗本をおし立刺

物を刺つれ、扇子の円居を押し進ければ、武蔵守も勝入も

金の扇の馬印山影より朝日の出るやうに押出るを見て、扱

ハ家康是に有とて、興をさまし大事にかけて声を限

りに打散たる勢をまとめ下知す、井伊兵部軍勢整々

堂々として丸山の際森か先手へ鉄炮を出して打合けり、

爰に井伊か備より鳥井金次郎抽て走り出れハ、森か兵

黒母衣掛千田主水と名乗てかけ合敵味方の真中にて

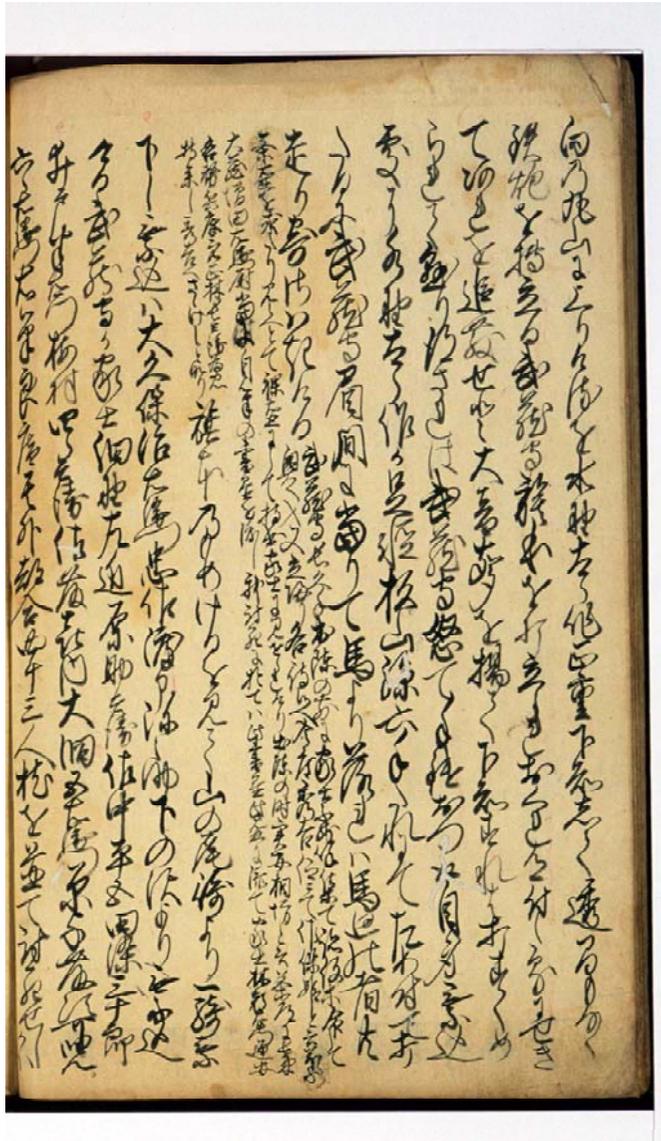
暫せり合しか互に疲れて二人相引にす、家康の十人

の鉄炮頭ハ右の山の腰をかたとり白しないの鉄炮の者共

五百人余撥々責たつる、安藤彦兵衛直次申けるハ右の

尾を打せり鉄炮打せしんより左の尾さきよりも打させ
然と申せ八、家康尤とて鉄炮を此方へ分て越候へと一番の使
鵜殿兵庫を被遣けれとも、何も敵と間近く打合せなれハ
仰に不随、家康怒まし〜て二番に村越茂介三番の使に
かゝ爪民部被遣、両度に鉄炮漸三四十挺来りしを、彦兵衛申
山へ上ケ筋違に打立けるにそ敵殊の外痛ける、池田勝入
太鷹ふり声をからして下知しけれとも、鉄炮烈敷ければ進ミ
難く見へける、勝入家士秋田加兵衛・片桐与三郎・梶浦兵七・
竹村小平太七八人汗水に成て働ける、森武蔵守ハ去ル羽黒
八幡村にて軍せしを恥て今度抜群の大功を立るにあら
すハ討死と思ひ入白装束に出立ける、甲ハ銀のかさり象
の鼻に手木を巻たるなり、白母衣一説ニ白帛
袖無羽織ト云月毛の馬に乗
て母衣武者四五人歩立て馬廻につれ家康の旗本の

尾ハなはかり、鉄炮打せ候はんより左の尾さきよりも打立させ可
然と申せハ、家康尤とて鉄炮を此方へ分て越候へと一番の使
鵜殿兵庫を被遣けれとも、何も敵と間近く打合せなれハ
仰に不随、家康怒まし〜て二番に村越茂介三番の使に
かゝ爪民部被遣、両度に鉄炮漸三四十挺来りしを、彦兵衛申
山へ上ケ筋違に打立けるにそ敵殊の外痛ける、池田勝入
太鷹ふり声をからして下知しけれとも、鉄炮烈敷ければ進ミ
難く見へける、勝入家士秋田加兵衛・片桐与三郎・梶浦兵七・
竹村小平太七八人汗水に成て働ける、森武蔵守ハ去ル羽黒
八幡村にて軍せしを恥て今度抜群の大功を立るにあら
すハ討死と思ひ入白装束に出立ける、甲ハ銀のかさり象
の鼻に手木を巻たるなり、白母衣一説ニ白帛
袖無羽織ト云月毛の馬に乗
て母衣武者四五人歩立て馬廻につれ家康の旗本の



向の丸山に上りけるを、水野太郎作正重下知して透間もなく鉄炮を搏立る、武蔵守旗本を打立られおくれ有付し処に、せきてあれを追散せと大音声を揚て下知すれば、打すくめられて懸り得されは、武蔵守怒て手鎧おつ取自身乗込処に、水野太郎作か足軽杉山孫六手たれにてため付て打たるに、武蔵守眉間に当りて馬より落れハ馬廻の者共

走り寄さハきける 武蔵守長久手出陣の前に家士不残呼集て諸役等命して

奥へ入又立帰り各待候へ今度秀吉仰て作保姫と云葉
茶壺を求たり見候へとて裸壺にして持出家士に見せられけり出陣の時実安相坊と云茶道に長束
大蔵増田右衛門尉当に自筆の書置を渡し我討死に於てハ此書置此壺に添て家士林新右衛門道安
各務兵庫之正林長兵衛為忠

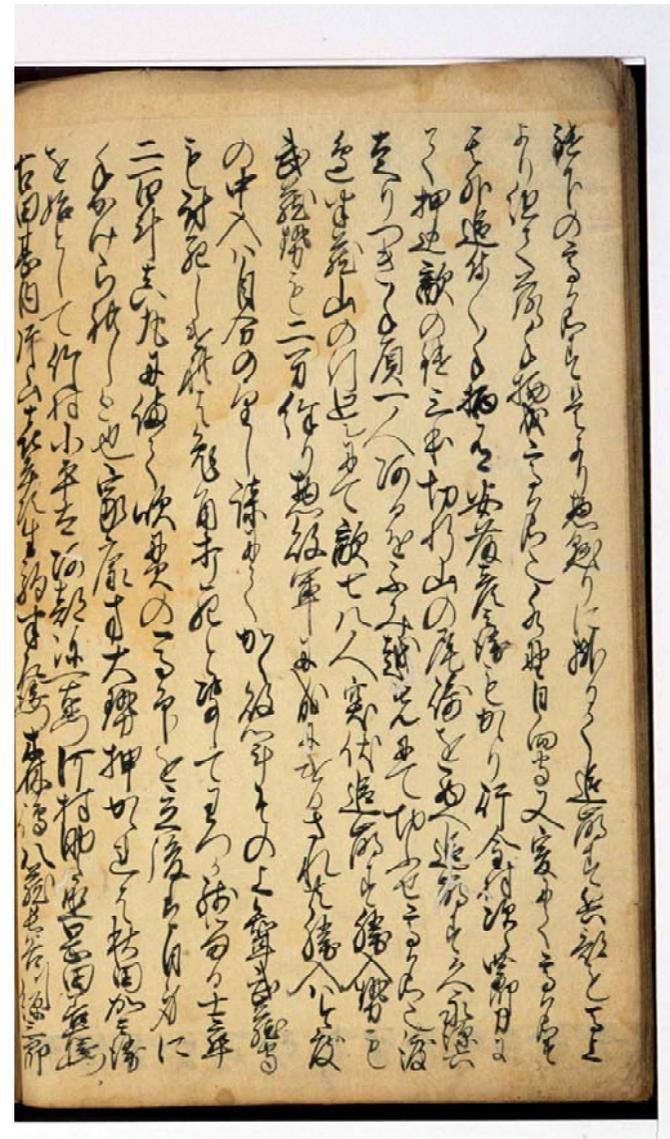
旗本のもめけるを見て山の尾崎より一騎乗

持参し秀吉へさしけしとなり

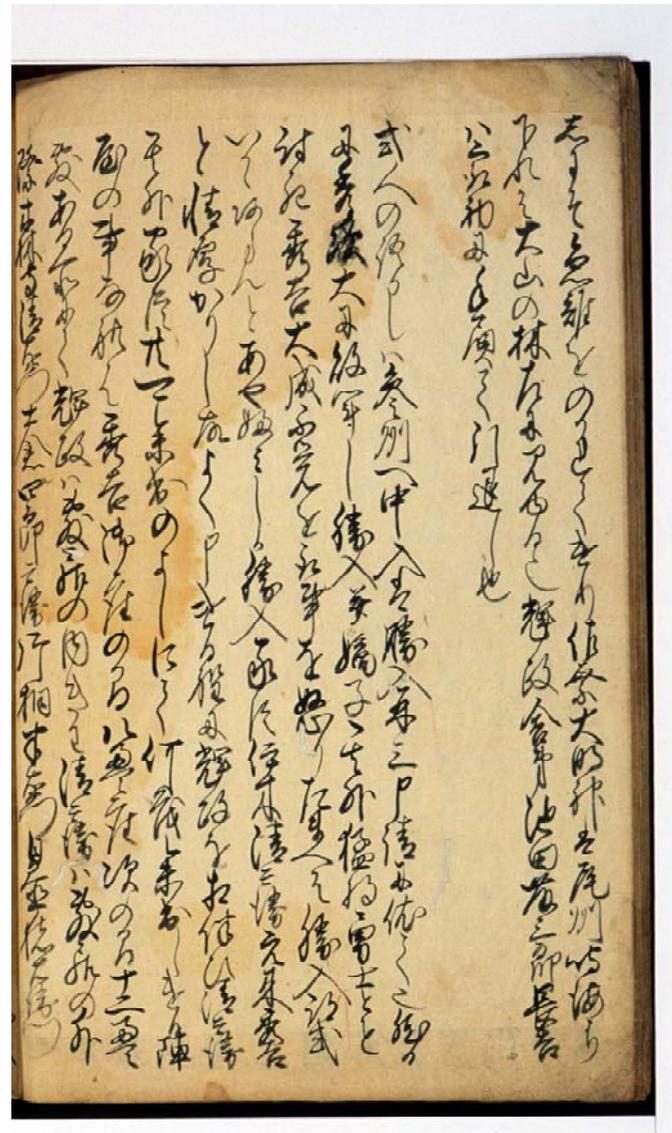
下し乗込ハ大久保治右衛門忠佐・渡部弥之助、下の沢より乗込ける、武蔵守か家士細野左近・原助兵衛・佐中平五・田染三十郎・井戸半右衛門・梅村四郎兵衛・佐藤喜内・大洞五右衛門・原与藤次・可児六郎右衛門・右筆良庵其外都合四十三人枕を並て討死せしかハ

残党乱て右往左往に敗北す、爰に武蔵守か旗下なりし関小十郎
右衛門ハ武蔵守迎に出たるか、武蔵守ハあの山際にて討死の
よし聞て二町計乗戻し討死す、家康ハ武蔵守旗本をめ
ける時再拝を振て、武蔵守か備は切崩す、勝入備は若
者共何とて追崩さぬそと下知し給へは、御馬の先より平松
金次郎茜の羽織着て十文字の鎧を持道筋をかゝり、勝入
大軍の真中へ鎧を打入るれハ、母衣武者山田八左衛門と名乗
て是に鎧を合、互に大音声を揚て戦所に、家康の軍
勢惣かゝりに懸て追崩す、井伊兵部も武蔵守か旗本もめ
ければ先手も色めくを見て再拝を振、かゝれくと下知す、
井伊か家土三浦与右衛門進て鎧を打込けるに、敵三方より鎧
付て既に討死と見へける所に、中村与兵衛突掛りける、与右衛門
若党河口彦四郎走り込、与右衛門合手のからすねをなきふせ

残党乱て右往左往に敗北す、爰に武蔵守か旗下なりし関小十郎
右衛門ハ武蔵守迎に出たるか、武蔵守ハあの山際にて討死の
よし聞て二町計乗戻し討死す、家康ハ武蔵守旗本をめ
ける時再拝を振て、武蔵守か備は切崩す、勝入備は若
者共何とて追崩さぬそと下知し給へは、御馬の先より平松
金次郎茜の羽織着て十文字の鎧を持道筋をかゝり、勝入
大軍の真中へ鎧を打入るれハ、母衣武者山田八左衛門と名乗
て是に鎧を合、互に大音声を揚て戦所に、家康の軍
勢惣かゝりに懸て追崩す、井伊兵部も武蔵守か旗本もめ
ければ先手も色めくを見て再拝を振、かゝれくと下知す、
井伊か家土三浦与右衛門進て鎧を打込けるに、敵三方より鎧
付て既に討死と見へける所に、中村与兵衛突掛りける、与右衛門
若党河口彦四郎走り込、与右衛門合手のからすねをなきふせ

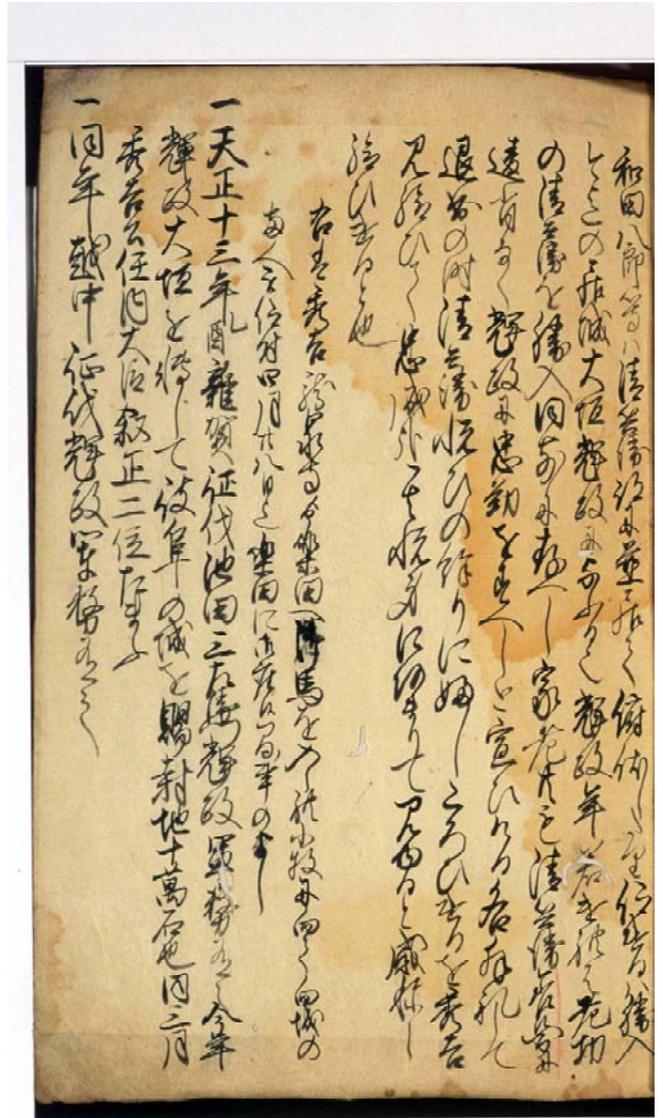


鐘下の高名す、是より惣懸りに掛りて追崩す、兵部も馬上より組て落手柄成高名也、水野日向守又爰にて高名す、其外追付く手柄有、安藤彦兵衛もかゝり行金村次郎四郎刀にて押込敵の鐘三本切折山の尾崎を西へ追崩す、久永源六走りつき手負一人あるをふみ越先にて切ふせ高名也、渡辺半蔵山の引廻シにて敵七八人突伏追崩す、勝入勢も武蔵勢も二万余り惣敗軍に成にける、され共勝入ハ今度の中入ハ自分の望し謀にてかく敗軍、その上賀武蔵守も討死しければ兎角打死と決して、わつか残留る士卒二百計真丸に備て吹貫の馬印を立、後は自身に手かけられしと也、家康方大勢押かゝれば、秋田加兵衛を始として竹村小平太・阿部弥一右衛門・河村助之丞・岡田善右衛門・古田甚内・片山喜平次・生駒半左衛門・森嶋八蔵・長谷川源三郎



しにそ急難をのかれてけり、佐奈大明神は尾州鳴海より
下れば大山の林左に見ゆる也、輝政舎弟池田藤三郎長吉
ハ最初に手負て引退し也

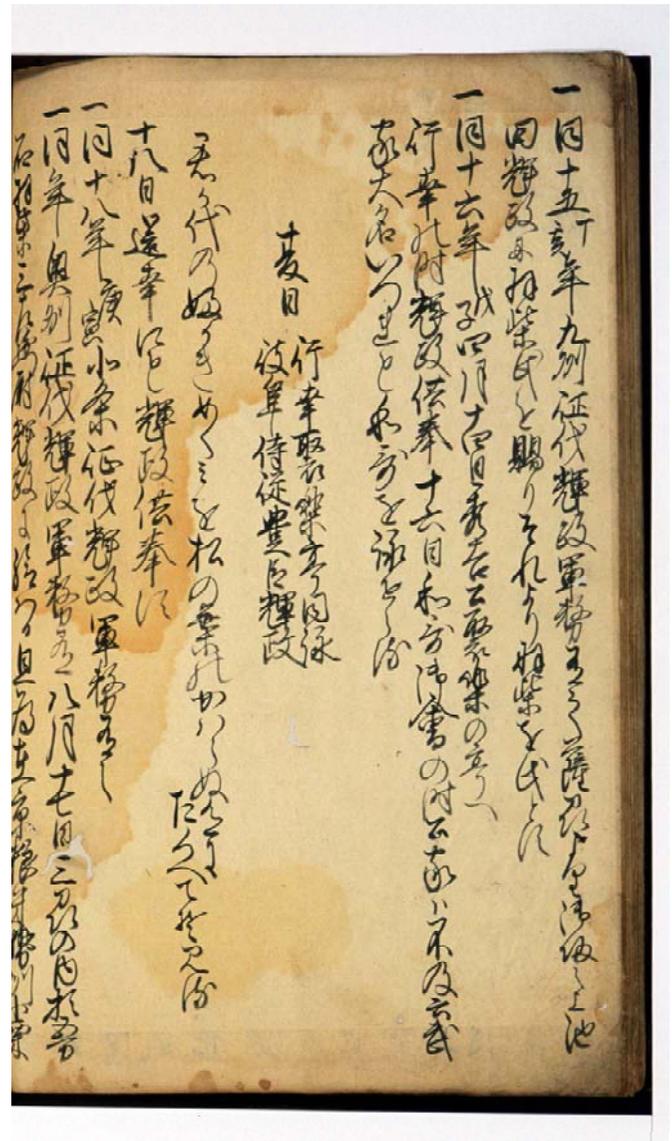
或人の語申候ハ、参州へ中入は勝入再三申請に依て也、然る
に秀次大に敗軍し、勝入并嫡子其外猛将勇士とも
討死、秀吉大成不覚を取事を怒りたまへは、勝入跡式
いかゝあらんとあやふみしか、勝入家臣伊木清兵衛元来秀吉
と情厚かりし故よく申ける程に、輝政を相伴ひ清兵衛
其外家臣共可参出のよしにて何も参出しける、陣
屋の事なれば秀吉御座の間八畳座、次の間十二畳
敷ある所にて、輝政ハ敷居の内きわ、清兵衛ハ敷居の外
際、森寺清右衛門・土倉四郎兵衛・片桐半右衛門・日置猪右衛門・



和同八郎等ハ清兵衛跡に並居て俯伏したり、仰けるハ勝入
 今迄の居城大垣輝政に与ふる也、輝政年若ければ老功
 の清兵衛を勝入同前に存へし、家老共も清兵衛差図に
 違背なく輝政に忠勤をすへしと宣ひける、各拝礼して
 退出の時、清兵衛悦ひの余りにふしころひけるを秀吉
 見給ひて、忠成哉其悦身にあまりて見ゆると感称し
 給ひけると也

右は秀吉龍泉寺より楽田へ御馬を入られ小牧に向て向城の
 兩人被仰付、四月廿八日迄楽田に御座候間ノ事のよし

一天正十三年、西雜賀征伐、池田三左衛門輝政軍務有之、今年
 輝政大垣を転して岐阜の城を賜封地十萬石也、同三月
 秀吉公任内大臣叙正二位たまふ
 一 同年越中征伐、輝政軍務有之



一 同十五丁 亥年九州征伐輝政軍務有之薩州より御帰之上池
 田輝政に羽柴氏を賜りそれより羽柴を氏とす
 一 同十六年 戊子四月十四日秀吉公聚楽の亭へ
 行幸の時輝政供奉十六日和尚御会の時公家ハ不及云、武
 家大名いづれも和哥を詠せらる

十五日 行幸聚楽亭同詠
 岐阜侍従豊臣輝政

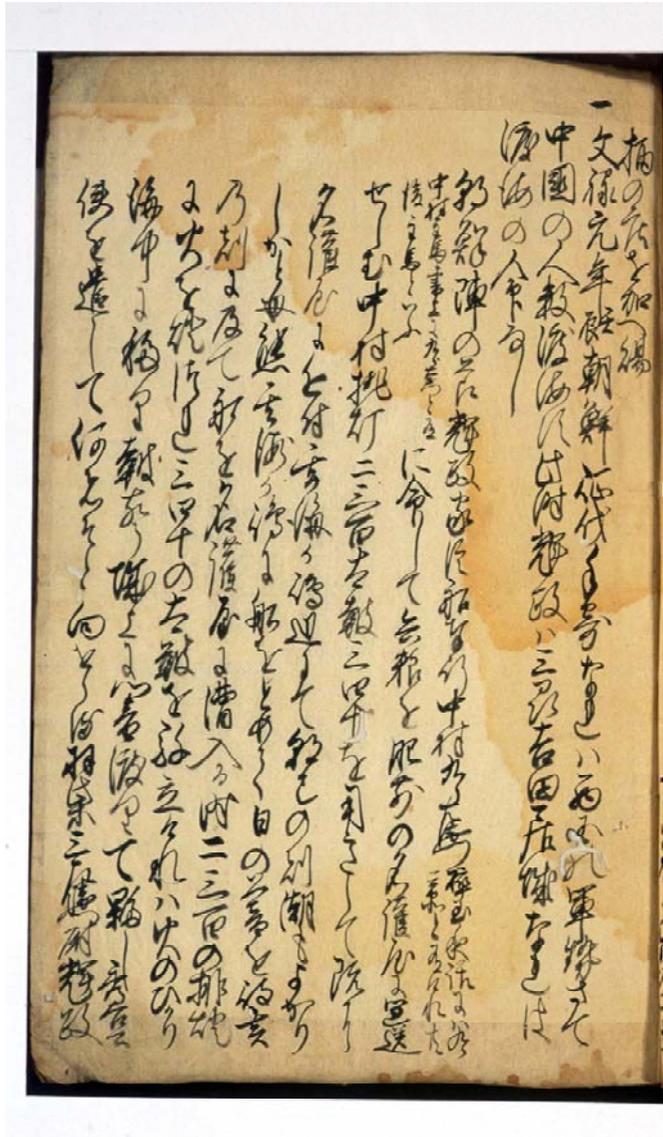
君か代のふかきめくミを松の葉のかはらぬ色に
 十八日 還幸に輝政供奉す

一 同十五丁 亥年九州征伐輝政軍務有之、薩州より御帰之上、池
 田輝政に羽柴氏を賜りそれより羽柴を氏とす
 一 同十六年 戊子四月十四日秀吉公聚楽の亭へ
 行幸の時輝政供奉、十六日和哥御会の時公家ハ不及云、武
 家大名いづれも和哥を詠せらる

夏日 行幸聚楽亭同詠
 岐阜侍従豊臣輝政

君か代のふかきめくミを松の葉のかはらぬ色に
 十八日 還幸にも輝政供奉す

一 同十八年 庚寅北条征伐、輝政軍務有之
 一 同年奥州征伐、輝政軍務有、八月十七日三州の内拾五万
 石羽柴三左衛門尉輝政に給へる、且為在京粮米勢州小栗



柄の庄を加へ賜
一文禄元年辰朝鮮征伐、手寄なれハ西国の軍勢さて
中国の人数渡海す、此時輝政ハ三州吉田居城なれば
渡海の命なし

朝鮮陣の節輝政家臣船奉行中村九郎右衛門
兵衛と有けれ共
中村主馬書上に九郎右衛門と有
後主馬といふ
に命して兵糧を肥前の名護屋に運送
せしむ中村挑灯二百太鼓三四十を用意して既に
名護屋に近付、玄海か嶋辺にて朝巳の刻潮もよかり
しかとも、態玄海か嶋に船をとめて日の暮を待、亥
の刻に及て船を名護屋に漕入る時、二三百の挑燈
に火を燈され、三四十の太鼓を敲立けれハ、火のひかり
海中に移り鼓声城上に響渡りて夥し、秀吉公
使を遣して何者そと問せらる、羽柴三左衛門尉輝政

柄の庄を加へ賜

一文禄元年辰朝鮮征伐、手寄なれハ西国の軍勢さて

中国の人数渡海す、此時輝政ハ三州吉田居城なれば
渡海の命なし

朝鮮陣の節輝政家臣船奉行中村九郎右衛門
兵衛と有けれ共
中村主馬書上に九郎右衛門と有
後主馬といふ
に命して兵糧を肥前の名護屋に運送

せしむ、中村挑灯二百太鼓三四十を用意して既に
名護屋に近付、玄海か嶋辺にて朝巳の刻潮もよかり
しかとも、態玄海か嶋に船をとめて日の暮を待、亥
の刻に及て船を名護屋に漕入る時、二三百の挑燈
に火を燈され、三四十の太鼓を敲立けれハ、火のひかり
海中に移り鼓声城上に響渡りて夥し、秀吉公
使を遣して何者そと問せらる、羽柴三左衛門尉輝政



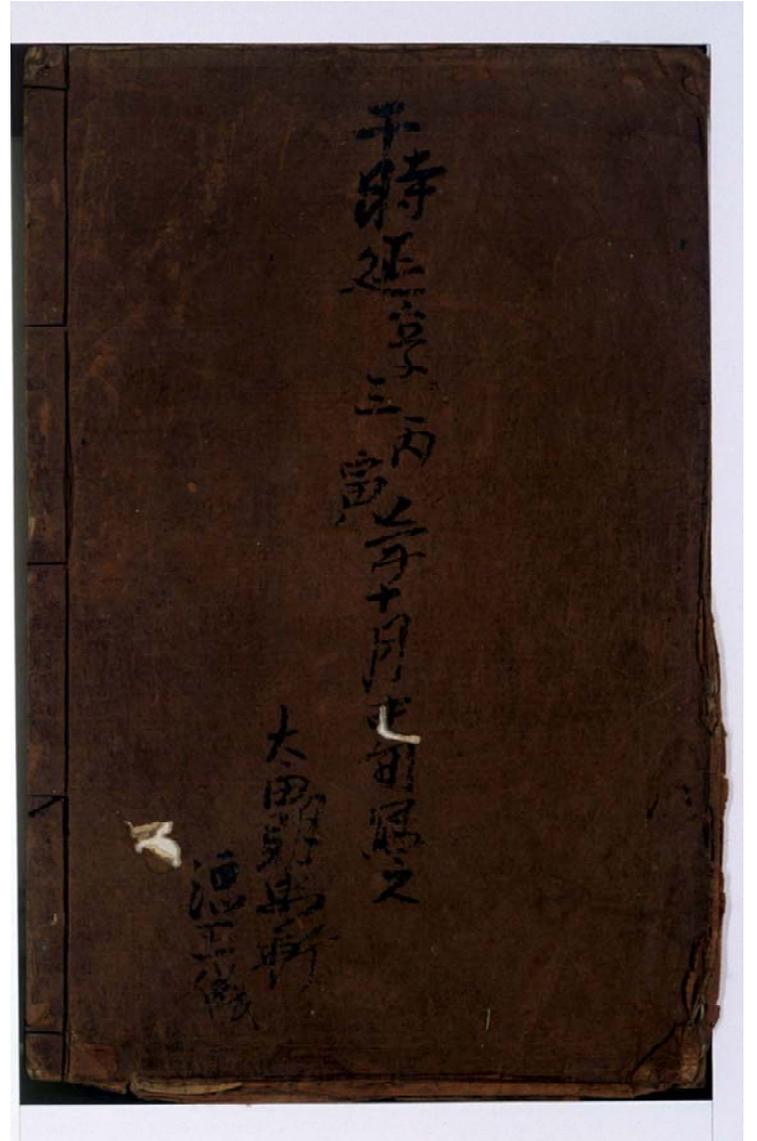
家士中村九郎右衛門兵糧運送の船なりと答ふ、依之名護屋
 在陣の上中村九郎右衛門を知らざるハなし、其翌日秀
 吉公入津の船共御覽し且輝政船御尋、則被為召
 九郎右衛門を被召出、忝御意にて御羽織御帷子被下ける、
 秀吉公花麗を好ミ給ふ意を中村か迎しに、案の
 ことく秀吉の心に適て、則中村を朝鮮に渡海せ
 しめらる、中村朝鮮に至れハ兵糧すてに尽なんと
 する頃兵糧到着しけるゆへ、諸将大に喜悦せりとなり

于時延享三丙寅年十月中旬寫之 太田明忠軒源正儀

家士中村九郎右衛門兵糧運送の船なりと答ふ、依之名護屋
 在陣の上下中村九郎右衛門を知らざるハなし、其翌日秀
 吉公入津の船共御覽し且輝政船御尋、則被為召
 九郎右衛門を被召出、忝御意にて御羽織御帷子被下ける、
 秀吉公花麗を好ミ給ふ意を中村か迎しに、案の
 ことく秀吉の心に適て、則中村を朝鮮に渡海せ
 しめらる、中村朝鮮に至れハ兵糧すてに尽なんと
 する頃兵糧到着しけるゆへ、諸将大に喜悦せりとなり

于時延享三丙寅年十月中旬寫之 太田明忠軒源正儀





于時延享三丙寅年十月中旬写之

大田明忠軒
源正儀